



ISBN978-4-8401-3579-5
C0193 ¥580E



定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー



機巧少女は傷つかない4

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。時計塔事件も一段落し、雷真たちは負傷続きながらも〈夜会〉に勝ち残っていた。だが、雷真の負傷を自分のせいと気に病んだ夜々が、突然姿を消してしまう。なんとか彼女を見つけ出した雷真だが、それは敵の罠だった！ この夜会を支配する存在（十字架の騎士）と名乗った彼らとともに、夜々は雷真のもとを去る。打ちひしがれる雷真。そして、彼の前に現れた男子は告げる——「夜々は放棄するわ。今後はいろいろを使いなさい」はたして雷真の決断は？ シンフォニック学園バトルアクション第4弾！

「さようならです、
雷真」

コミック1巻 &
特装版(ドラマCD付き)
同時発売!

敵の手に落ちた夜々。
雷真は彼女を取り戻せるのか——？ MF文庫J

MF文庫J

580

コミック版 著：高城 計

『機巧少女は傷つかない』

コミックアライブで
大好評連載中!!

アライブコミックスより
機巧少女は
傷つかない①も
通常版&特装版同時発売!

同時購入
キャンペーン
実施!

最新情報はこちらをチェック!
<http://www.machine-doll.com>



海冬レイジ

かいとう・れいじ

ちょっとした努力と、ちょっとした工夫。
そしてちょっとした「遊び心」——
それがたぶん、人生を楽しむスパイス。
——あ、あと「なまけ心」も！

いまだに新入気分が抜けないキャリア6年目の戦車作家。
札幌市在住。1月8日生まれ、A型。ほかに「幻想神グリモ
アリス」シリーズ(富士見ファンタジア文庫)など。

【イラストレーター】

るろお

秋になって、涼しくなったら登山がしたい。
友人にそう言ってみたところ
死亡フラグとしか聞こえないと言われました。
この本が出る頃、私の運命やいかに！



Racing
"Rosen
Kavalier"

傷つかない

機巧少女は

機巧少女は傷つかない4

海冬レイジ



9784840135795

ISBN978-4-8401-3579-5
C0193 ¥580E

1920193005806

定価：本体580円（税別）

メディアファクトリー



機巧少女は傷つかない4

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。時計塔事件も一段落し、雷真たちは負傷続きながらも〈夜会〉に勝ち残っていた。だが、雷真の負傷を自分のせいと気に病んだ夜々が、突然姿を消してしまう。なんとか彼女を見つけ出した雷真だが、それは敵の真だった！ この夜会を支配する存在（十字架の騎士）と名乗った彼らとともに、夜々は雷真のもとを去る。打ちひしがれる雷真。そして、彼の前に現れた硝子は告げる——「夜々は放棄するわ。今後はいろりを使いなさい」はたして雷真の決断は？ シンフォニック学園バトルアクション第4弾！

マシンドール
機巧少女は傷つかない4
Facing "Rosen Kavalier"

海冬レイジ



機巧少女は傷つかない4

海冬レイジ

11





機巧少女は

傷つかない

Exotic Creation-Dev

Ending
Point
Catcher

4

海冬レイウ・るるお



「さようならです、雷貞」





A close-up illustration of two characters. On the left, a man with short blonde hair and a red nose is looking towards the right. On the right, a woman with long white hair and purple eyes is looking towards the left. They are in a blue, watery or misty environment. The woman is wearing a blue and white outfit with a large blue bow. The man is wearing a dark jacket.

「独逸の^{ドイツ}人形よ。」

おまえは既に、私の(冬)の中にいる
いろりは猛烈な冷気をまといながら、
凍てつく声でつぶやいた。

「囚獄^{のうご}ころし——霜曇^{しもくも}り」

全身から噴き出す妖気。

暗雲のごとく立ち込める、

濃密な闇。

「目覚めなよ……ファファニール……」

（暴虐の王）！」

シャルがありつたけの魔力を込める。

光を奪う闇の中から、たくましい腕が、

脚が飛び出した。





contents

Unbreakable Machine-Doll

- Prologue 始玉のように甘くp11
- Chapter 1 かくて戦端は開かれるp22
- Chapter 2 十字架の騎士団p54
- Chapter 3 鼓動を止める言葉p88
- Chapter 4 この歩みをやめないp119
- Chapter 5 迎撃p151
- Chapter 6 すべてが嘘にp183
- Chapter 7 聖地に至る薔薇の騎士p215
- Epilogue 美酒のように甘くp250



マシンドール

機巧少女は傷つかない4

Facing "Rosen Kavalier"

海冬レイジ

MF文庫 

目次・本文イラスト●るろお

編集●片岡智



Prologue

鮎玉のように甘く



「もう、雷真かみまことったら、こんなにしちゃって……♡」

白い指先をつつと通とおわせ、夜々よよはそれの表面を撫なでさすった。

「あ、硬い……うふふ、そんなに夜々の指がよかったんですか？」

うっ、と雷真は軽くうめき声をあげ――

「……あのな、夜々」

「はい♡」

「皿くらい黙って洗え。いや、洗ってくれるのは嬉しいんだがもちろん」

医学部の一階。医務室のとなりにある、入院患者用の病室。

部屋のすみにタライを置いて、夜々は皿洗いをしているのだ。

夜々はつんとして、ふてくされ気味にそっぽを向いた。

「ほうっておいてください。雷真がちつともかまってくれないから、こうしてお皿を相手にイメージトレーニングをしているんです」

「何のイメージだー」

「お背中を流すイメージですー」

「明らかに背中じゃないよな!? 前の方に手が伸びてたよな!?」

「あ、それなら、お皿よりも、めん棒やフランクフルトの方が——」
という第三の声に、雷真と夜々がそろって振り向く。

メイド服姿のアンリが、扉の前で、洗濯物を抱えて微笑んでいた。

「え……あ……あのっ、洗いのものなら、私がやります」

アンリは耳まで赤くなり、夜々の手から皿を奪い取った。

夜々はがくがくと不穏な感じで震え出し、

「女狐が……夜々のキヤヲを……お株を奪う……!?」

「ちよっと貴方たち—— アンリに変なことを教えないで——」

ぶんぶんと怒りながら入ってきたのは、輝く金髪の美少女シャル。帽子の上には銅色の仔竜シグムントをのせている。

夜々はあからさまに嫌そうな顔をして、

「……またきたんですか、シャルロットさん」

「くるわよ。悪い? 魔術師協会の護衛がついてるとは言え、アンリが変なやつらに襲われたら大変なもの。できる限り一緒にいて、アンリを護るわ」

「そんなこと言って、本当は雷真のお世話が目的なんじゃないですか?」

「なっ、こっ、ばっ——ばかね! 下衆の勘ぐりよ—— そもそも、怪我人の面倒を見るの

は高貴なる者の義務なのよー」

「だったら街の病院でナースにでもなってくださいー」

「おあいにく。私は夜会で忙しいの」

「ああ言えばこう言うー もおおー、こうなったら、女狐は実力で排除しますー」

「上等じゃないー シグムント、このわからず屋を叩きのめすわよー」

シグムントはため息をつき、ばさばさと飛んで、雷真のベッドに着地した。

「気苦労が絶えんな、雷真」

「ああ……おまえもな」

切ないシンパシー。寂しく笑い合う二人。

夜々とシャルは今にもつかみ合いを始めそうな気配。アンリが必死にシャルを止めている。何だかんだで、プリュー姉妹は元気だ。姉妹——特にシャル——の元気な姿を見て、雷真は内心ほっとした。

先日、学院長が召集した全学集会の場で、シャルは学生たちに頭を下げた。

時計塔の破壊、ならびに学院を騒がせたことを、自ら詫言ったのだ。

あの（暴竜）が素直に頭を下げたのだから、そのインパクトは相当なものだ。

学院長のフォローも効いていた。出所不明の噂が広まっただけで、シャルがアンリを人質に取られていたことは、既に誰もが知っている。

不良少年が動物に優しくすると「とてもイイ奴」に見える……というあの現象により、シャルへの敵意は急速に弛緩し、以前より風当たりがやわらいでいる。

ただし、すべてが丸く収まったわけではない。

あの事件の首謀者と見なされた学生、執行部議長セドリック・グランビルは、軟禁された状態で見つかった。

つまり、雷真が戦ったあれは、セドリックではなかったということだ。

では、何者なのか。夜会の参加者なのか。だとしたら、目的は何なのか。

結局のところ、何ひとつわかってはいない。

だが、それは考えても仕方がない。今はただ、姉妹の無事を喜ぶべきだろう。

「雷真……シャルロットさんを見る目が優しい……！」

雷真はぎくりとした。夜々の才先がこちらに向いた――

「夜々にはそんな目、向けてくれないのに――はっ！　まさか、こないだの一件で急接近して……夜々の知らないところで、女狐とデキて……っ!?」

「違う！　勘違いするな！　シャル、おまえも否定しろ！」

シャルは真ッ赤になって否定しようとしたが、急に口ごもり、そっぽを向いてしまった。肯定とも取れる可憐な仕草。夜々がブチ切れ、またしても大騒ぎになる。

そのとき、仕切りのカーテンが乱暴に開けられた。



夜々が驚いて止まる。大剣が飛んでくるかと思つて、雷真も思わず身構えた。

カーテンの隙間から、のっそりと現れるロキ。

紅い瞳が雷真をにらみつける。だが、意外にもロキは無言だった。

軽く足を引きすりながら、病室を出て行く。その後ろを、鋼鉄製の機械人形ケルビムが、がしやんがしやんと金属音を響かせて、ついていく。

「……何よあれ。絶対ケンカになると思つたのに」

シャルが首をひねった。アンリはちよつと心配そうに、

「ライシンさん、ロキさんに何かしたんですか？ めちやくちやにしたんですか？」

「めちやくちやにはしてない！」

突然、夜々が雷真に飛びついてきた。

「パンツを脱いでください雷真！」

「前置きもなしに何だ！」

「本日はお日柄もよく——」

「その前置きからどうやってパンツにつなぐ!?」

「さっきの続きですー 今ここで女狐に見せつけてやるんですー 夜々と雷真が毎晩毎晩ねっとりしっぽりしていることを！ 例の許婚さんやロキさんや女狐姉妹が入り込む余地なんて、最初からないってことをー」

夜々は涙ぐみながら、威嚇する仔猫のように、プリュー姉妹をにらみつけた。

だが、シャルは余裕ありげにふふんと笑った。

「もうその手は食わないわよ。貴女たちが何でもないってことくらい、とっくにお見通しなんだから」

「シャル……ついにわかつてくれたのか……!」

感動する雷真。シャルはにわかに頬を染め、

「だって、貴方、私に言ったものね。俺の足なんか、いくらでも引つ張れて。あれは、その、いわゆる、一生涯……私の面倒を……ってことなんでしょう?」

聞こえなかった。雷真は首を傾げたが、夜々には意図が伝わっていた。

「うう……うわーん!」

「え!? 夜々さん!?」

驚くアンリを跳び越えて、廊下に飛び出す。

「夜々ー くら、どこに行く——」

走り去る夜々。ちょうど顔を見せたフレイが巻き込まれ、尻もちをついた。大きく上下した胸と、見えてしまったスカートの中に、雷真は思わず赤面した。

「毎日毎日、自習の邪魔をしやがって……うんざりだ!」

林の中の小道を行きながら、ロキは忘^いま忘^いましげに吐き捨てた。

「オレたちがやっているのは夜会^{やかい}だぞ？ 勝者がすべてを得て、敗者は何も得られない、過酷なゼロサムゲームだ。じゃれ合うのは勝手だが、せめて夜会が終わってからにしろ。おまえもそう思うだろう、ケルビム」

「Humm...Yes...?」

「……何だ、その反応は。まさか、はた目には面白いとでも言い出すつもりか」

「No.No..I'm ready」

「ふん。これなら姿に戻った方がマシだ」

「Yes I'm ready」

忠実な犬のようについてくるケルビム。いつもと変わらないその姿を見て、ロキも少し冷静になった。

（ふん……オレは何をあせっている）

いや、わかっている。傷がなかなか治らない——それが不安なのだ。

自分ひとりならば、いい。どうとでもなる。しかし……。

姉の笑顔が脳裏をよぎり、ロキはあわてて打ち消した。

（くだらん……）

松葉杖^{まつはづえ}を乱暴に突き、痛む足を強引に動かして、ずんずんと小道を進む。

目的地はラファエル男子寮。成績優秀な男子だけが入寮を許される、完全個室の学生寮だ。グリフォン女子寮よりも古いが、サービスの質は同等とされている。

人目につきたくない。ロキは庭園を迂回して、寮の裏口に回ろうとした。不意に微弱な魔力を感じ、足を止める。

耳を澄ますと、木立ちの奥から、か細い音が聞こえてきた。

細く、弱い。衣擦れにも似た、小さな音。これは……。

女の、すすり泣き？

ロキはしばしためらい——結局は、音のする方に足を向けた。

木立ちを進む。やがて、木漏れ目の下に、小柄な人影を見つけた。

妖精にでも出くわしたのかと思う。

乙女だ。どこから逃げ出してきたものか、身につけているのはワンピース一枚。なぜか

裸足で、真っ白い素足が見える。

見たことがない顔だ。たぶん、学生ではない。

(自動人形……？)

だが、それは、人形にしてはあまりに生々しい存在だった。

肌は色づき、血が通っている。機巧の存在とは思えないほどのやわらかさ。みずみずし

さ。頬を伝う涙は、どう見ても本物だ。

人間そっくりに作れば、人間と同じように見えるわけではない。

下手をすれば、死体をつなぎ合わせたような、ひどく悪趣味な物体になる。

この乙女には、そうした不気味さがまるで感じられない。少なくとも外見上は、生きた少女と何も変わらない。学生所有の自動人形はどれも高級品だが、これほど精巧なものは

——雷真の夜々や、マグナスの（戦隊）など、ごくひと握りだ。

乙女がロキの気配に気付き、びくっと振り返った。

涙の粒が散り、木漏れ日を反射して、さらさらと光った。

「……（白い子ども）」

乙女が口走った単語を聞いて、ロキの目元がびくりと動いた。

同じ頃、夜々も泣きながら、林の中を歩いていた。

「うっ、うっ、雷真の馬鹿！ 夜々の気持ちを知らなくて……っ」

ほろほろ涙をこぼしながら、とぼとぼと小道を行く。

——切ない。

周囲を照らすような、シャルの美貌を思い出す。

さらびやかな金髪。夜々より背が高く、頭身も高い。

自分が勝っているのは胸の大きさだけじゃないかと思う。

その胸だって、シャルの方は、これから育つかもしれない。シャルは「そういうふうに作られた」人形ではなく、人間の少女なのだ。

胸に包丁を突き立てられたような痛みが走った。

先ほどブリー・姉妹に言った言葉が、そっくり返ってくる。

そう、人間の男と、人間の女のあいだに、人形が入り込む余地なんて……。

嗚咽が込み上げる。夜々はたまらなくなつて、わーん、と声をあげて泣いた。

「何を泣いているの？」

びっくりして泣き止む。

しゃくり上げながら振り向くと、背後に女子学生が立っていた。

腰まで届く見事な銀髪。おつとりと優しいような微笑みは、見ていだけで癒やされるよ

うな、あたたかな恋愛に満ちていた。

見たことがある。雷真と同じ必修クラスに、こんな少女がいた。

「挨拶するのは初めてだね。初めまして、可愛いお人形さん。僕は」

少女はにつこりと微笑んで、控えめな胸に手を添えた。

「アリス・バーンスタインだ」



Chapter 1

かくて戦端は開かれる



1

「遅いな、夜々のやつ……」

窓から外の木立ちを眺め、雷真はひとりこちた。

その後ろには、しょんぼりと座るプリュー姉妹。特にシャルの落ち込みっぷりは激しく、見えていて気の毒なほどだった。

「何をしょげてんだ。らしくないぜ、恐竜娘」

「私の……せいよね。あの子を傷つけたかも」

「まあ、そう心配するな。フレイが探してくれてんだ」

その言葉通り、フレイと（ガルム）たちが夜々を捜索していた。

フレイが探してくれるというので、悪いと思いながらも、任せてしまった。雷真は外出禁止の身だし、こういうとき、（ガルム）は非常に頼りになるのだ。

かちやり、とドアが開き、全員の視線が集まった。

ドアの前に立っていたのは、夜々でもフレイでもなく、ロキだった。

こちらの視線に気付いたようだが、何も言わず、自分のベッドに戻る。

ロキは上の空だ。先ほどのいらだちが、すんと抜け落ちている。

何か、あったのか。夜々といい、こいつといい、わけがわからない。

かたんっ、と椅子を鳴らし、シャルが立ち上がった。

「……私、戻るわ。行きましょう、アンリ」

「夜々を探しに行ってくれるのか？　だが、たぶん、フレイがもう――」

「違うわ。追い出しておいて、私だけここにいるなんて、フエアじゃないからよ」

「フエア？」

「きなさい、シグムント。寮に帰るわよ」

シャルはシグムントを連れ、すたすたと病室を出て行った。

アンリもそちらに行こうとして、ふと、遠慮がちに雷真を見上げた。

「ライシンさん、あの……もう少し、夜々さんに優しくしてあげてください」

それから、はっとしたように飛び上がった。

「す、すみませんっ。私なんかが、知ったふうなことを言ってー」

ばたばたとシャルを追いかけ、病室を出ていく。

二人を見送ると、雷真は窓枠にもたれ、考え込んだ。

ついに、アンリにまで叱られてしまった。

「……つつたつて、どうすりゃいいんだよ？」

色恋沙汰に縁い雷真にとつて、これはなかなか難題だ。

夜々の気持ちは知っているが、だからと言つて、夜々をどう扱えばいい？ こちらにはその気がないのに、必要以上に優しくして、気を持たせるのは不実じゃないか？

まして、夜々が望むようなことをするのは――

はっ、はっ、という複数の息遣いで我に返る。

草を蹴つて茂みから駆け出してくる犬の群れ。

びたりと整列する「ガルド」たち。誇らしげに尾を振る彼らの向こうから、フレイに手を引かれて、夜々が歩いてきた。

「フレイー 夜々！」

雷真は窓から飛び出した。肋骨の痛みを無視して、夜々のもとに駆け寄る。

夜々はうつむいて、小さくなっている。目尻には涙のあともあるようだ。雷真は思わず怒鳴りそうになったが、すんでのところだと思いとどまり、優しく言った。

「こら、夜々。心配したぞ」

「……すみません」

「ありがとよ、フレイ。助かったぜ」

フレイはふるふるとかおりを振った。

「ライシンも……私を助けて、くれたから」

「そんなのはとくにチャラだろ——つて、もう戻るのか？ 茶くらい飲んでけよ」

「でも、夜会……」

「あ、悪い。もうそんな時間か。この礼は今度、ちゃんとするよ」

「う……じゃあ……今度、デート……」

「ん？ 何だつて？」

フレイは突然、挙動不審になった。はわわ、と変な言葉をつぶやき、悪魔を呼び出すかのような動きをして、ラビの背中にまたがる。

逃げるようにスタート。ラビが駆け出し、ほかの犬たちもそれに続く。

急な出発に驚きつつ、雷真はフレイの背中に呼びかけた。

「頑張れよー」

「頑張るー」

手を振って応える。その拍子に上体が傾き、ラビから転げ落ちそうになった。

併走するグレートデンがフレイを支え、ラビの上に押し戻す。雷真は苦笑しつつ、走り

去る一行を見送った。

その瞬間、得体の知れない違和感を覚えた。

「……雷真？　どうかしましたか？」

「いや……」

視線を感じた。誰かの、悪意を。

そつと病室を見やると、ロキが鋭い視線を窓の外——つまり、こちら側に投げていた。彼もまた、何かを感じたようだ。

（あいつも……感じた？）

人造とはいえ、ロキは（約束された子ども）だ。魔力親和性が高く、感能力には人一倍優れている。雷真と同じか、それ以上に敏感だ。

二人が感じたのなら、気のせいではない。

きな臭いものを感じる。不穏な気配があたりに満ちていくようだ。

「戻れ、（下から）一番目！」　ケツに体温計を挿されてーのかー」

突然、病室から声がかかった。

黒ぶち眼鏡のクルーエル医師が、猛犬のような形相でこちらをにらんでいた。

傷の具合を見にきたようだ。雷真は夜々の手を引いて、急いで病室に戻った。

雷真が病室に戻る様子を、双眼鏡で観察している者がいた。

法学部の校舎。医学部からは少し距離がある。いかに〈ガルム〉や雷真の感覚が優れていても、この距離では気付かれない……はずだ。

ディベートを行う演習室に、三十近い人影が立っていた。

女子学生が三人に、男子学生が十一人。

残りは明らかに異質な存在だ。鋼鉄の甲冑に身を包み、その上から布の前垂れを垂らし、前垂れには黒い十字架が描かれ、甲冑には薔薇のレリーフが彫り込まれていた。フルフェイスの兜はいかめしく、堅牢。まるで中世の十字軍を思わせる時代錯誤な意匠。そんな装束に身を包んだ自動人形が、学生と同じ数だけ控えている。

双眼鏡をのぞいていた男子学生が、ふっと小さく笑った。

「唇の動きで、おおよその会話は読み取れました」

双眼鏡を下ろし、振り向く。背が低く、線も細い、中性的な顔立ちだ。

「〈下から一番目〉も〈剣帝〉も退院する気配はないですね。〈多重なる騒音〉はひとりで夜会に向かうみたいです」

それから、広間の奥に向かつてたずねる。

「どうしますか、主？」

一同の視線が集まる。

広間の中央、円卓の向こうに、肘かけつきの優雅な椅子がある。

座す者の風格がそう見えるのか、玉座のように見える。

座しているのは蜂蜜色の金髪を垂らした青年。彫りが深く、端正で、背景に花が咲いて見えるほどの美青年だが、ざらりとした、剣呑な雰囲気を出している。

「……迂闊だな、(剣帝)」

美青年は青い瞳に冷徹な光を宿し、一同を見回した。

「(多重なる騒音)」がフィールドに現れるのを待つて、仕掛けよう」

「それでいいの、ローゼンベルク？」

「いいの？ いいのー？」

くすくすと笑しげに笑いながら、女子学生二人が左右から飛びついてくる。

頭の片方で髪をひとふき結っている。顔の造作はうりふたつ、背格好も同じで、二人が並ぶと完全なシンメトリだ。どうやら双子らしい。

ローゼンベルクと呼ばれた男子学生は、鬱陶しそうに双子を押しやり、

「指揮は (X) —— 貴公に任せる」

「仰せのままに、主。それじゃ、僕が脇役ですわ」

双眼鏡を置き、少女のような笑みを浮かべる。

「(完全統制振動)」が支給されたとはいえ、僕らのやつは旧式ですからね。責任を持って、



犬のお姫さまを誘い出しますよ」

「……任せる。(XIII) まで行け」

何人かがうなずく。了解の合図だ。

ローゼンベルクもあごを引いて応え、立ち上がった。

「では、開戦といこう。祖国のために——十字架の騎士に栄光あれ」

「十字架の騎士に栄光あれ」

一同が敬礼し、同じ文句を唱和する。

それはあたかも、遠征に向かう騎士団のような風情だった。

統制の取れた一団の中にあつて、ただひとり、唱和に参加しなかった者がいる。

ローゼンベルクの背後に控える自動人形の一体。ほかの人形より小さいふんと小柄だ。

身の丈ほどの盾に手を添え、きっちり敬礼はしたのだが、声は出さなかった。

そのことに気付いた者はいない。

学生たちはそれぞれに表情を引き締め、勇ましく広間を出て行った。

3

午後六時半。今宵の夜会が始まって、三十分が経過した。

太陽は西の空に健在で、あたりは明るい。見物の学生たちで賑わう夜会の会場に、見事な金髪をなびかせて、^{（暴走）}シャルが現れた。

シグムントを帽子に乗せ、肩で風を切つて歩いてくる。

学生たちは我先に道を譲る。だが、視線は以前ほど敵対的ではない。

シャルは照れくさいような、むずがゆいような気分になりながら、屋台でミートパイを買つて、シグムントと『半分こ』した。

ここ数日に比べると、明らかにギャラリーが多い。

理由は簡単。久しぶりに実戦が起こりそうな状況なのだ。

交戦フィールドには、既にひとり、^{（手袋持ち）}が立っている。

十二、三歳くらいに見えるが、そんなわけではない。どこか中性的で、砂糖菓子のように甘い顔立ちの男子学生。もちろん、シャルはその顔を知っている。

「八六位のヴォルター——イタリア出身の四回生ね」

「ふむ。四回生で、五十位より下につけているのか」

「つまり、大したことないやつね」

「シャルよ。君の所感では、『五十位までは前哨戦のようなもの』だったな」

「だって、選抜方法が違うもの」

夜会の参加者は百人。それは定期考査の成績で決まる。

各学科のスコアから偏差値を割り出し、四学年すべてを箱館ムサシして選ぶのだ。

一回生は比較的簡単に参加できる……とされている。最初の数回のテストで、たまたま成績がよければ、上位者としてランクされるからだ。

つまり、戦闘能力は十分に加味されていない。

そこで、選抜された百人のうち、約半分——四九位までは戦闘能力の優劣で順位をつけることになっている。無論、一位はマグナスだ。

結果的に、五十位以下は実戦経験の浅い低学年層が大部分を占めることになる。シャルやロキのように、二回生で（十三人）に入るのは大変なのだ。

もしも武力があつたなら、五十位以下にはいない。

そのはずなのだが……。

シャルの視線が、ヴォルタの自動人形オートマタに向く。

つい先日まで、ヴォルタは巨人タイプのゴーレムを使っていた。

だが、ここにいるのは——騎士甲冑ナイトアーマーに身を包んだ人間タイプ。

夜会ナイトに合わせて、とっておきを持ち出してきたのか。

そういう戦術に訴える者は、たまにいます。しかし、（奥の手）を温存したまま参加資格を得られるほど、夜会の選考はゆるくない。

（案外、とんでもない力の持ち主なのかも……）

そのとき、ざわっとギャラリーがざわめき、対戦者の到来を告げた。

——きた。彼女は、逃げずにやってきた！

五頭の（ガルム）を引き連れた、真珠色の髪的女子学生。

ひととき体格のいい、黒い毛並みのオオカミ犬に腰かけている。

フレイを認めると、ヴォルタはにこっと微笑んだ。

「やっときてくれましたね、フレイさん」

フレイはラビから降り、とことと交戦フィールドに入った。

「う……行くよ、ラビ。リビエラ。ルビー。レビーナ。ロビン」

がうがうと応じる（ガルム）たち。命令を待つまでもなく、散開する。

敵はひとり。敵の優位を利用しない手はない。犬たちは立ち並ぶ石柱に沿って展開し、

包み込むような陣を張った。

フレイの連勝を支えた戦術、包囲陣形。

真珠色の髪が逆立ち、魔力の炎が噴き上がる。全部の（ガルム）にフレイの魔力が行き

渡り——そして、咆哮。

吠え声が砲弾となって、芝生の地面をえぐり取りながら、自動人形に殺到した。

ヴォルタは微笑を浮かべたまま、騎士の肩に手をかけた。

刹那、騎士はするりと真上に逃れた。飛んだ！

タイミングを計ったかのように、フィールドに飛び込んでくる影がある。影は四つ。なめらかな飛翔。空中をスライドする人影は——自動人形？それぞれがひとりずつ、学生に肩を貸している。

使い手とともに現れたのは、騎士甲冑をまとった者たち。

ヴォルタが連れている人形と同じ意匠、同じ能力だ！

「フレイ！ 伏兵よ！」

思わず叫ぶシャルの眼前で、騎士たちは既に動いていた。

それぞれの主をフィールドに降ろし、五頭の〈ガルム〉に襲いかかる。

数だけ見れば五対五。だが、フレイは対応できていない！

複数の自動人形を同時に使役する——それがフレイの強みであり、弱点でもあった。扱う人形の数が多くほど、意識が散る。扱いが難しくなるのだ。

一方、相手は自分の一体だけを操ればいい。その上、フレイの虚を突く奇襲。これ以上、有利な状況もないだろう。

苦しまぎれに、フレイは〈音圧操作〉の魔術回路を起動した。

それぞれの〈ガルム〉が吠える。音の砲弾が再び生じ、五体の騎士を狙った。

（上手い！）

射線上に敵の人形使いを入れている。人形がかわせば、人形使いが重傷を負う。

案の定、騎士たちはかわさなかった。文字通り、盾となって主をかばう。

音の砲弾が命中。ずがんっ、と猛烈な衝撃音が響き、大地が揺れた。

だが、騎士たちは微動だにしなかった。

（耐えた……あの衝撃に!?）

ほとんど無傷。ビリビリと魔力の残滓があたりに漂う。それがフレイのものではないと理解した瞬間、シャルの膝に震えがきた。

膨大な魔力がフィールドに充満している。シグムントが反応し、翼を開く。

（こいつら……普通じゃないわー）

自動人形と人形使い、両者を結ぶ魔力の糸が太い。圧倒的な魔力の波動。まるで、人形そのものが魔力を放っているような錯覚に陥る。

……いや、それは本当に錯覚だろうか？

シャルは人形使いたちに視線を走らせた。記憶のデータベースから情報を引っ張り出し、目の前の顔と照らし合わせる。

「右端の男子はアフマド——インド出身の三回生。イタリアのロッソにフランスのシラー。あのふたりは四回生……」

「国籍はバラバラか。そのわりに、彼らの自動人形は同じ型だな」

「そうよー。どうして気付かなかったのかしら。不自然だわ、こんなのー」

目の前にいる連中は上級生ばかり……。

その上、共通の意匠を持つ、（シリーズ）の自動人形オートマタを従えている。

（やつぱり、こいつらは〈チーム〉）

シャルが考え込んでいるうちにも、戦闘は進んでいた。

音の砲弾に耐えた騎士たちが、同時に動く。

消えた——いや、違う——速い！

慣性を無視した挙動。彼らはいきなり最高速に達し、それぞれの標的に突進した。

魔力を放出した直後だけに、フレイは何もできなかった。

ほぼ一瞬で勝負が決まる。五体のガラムたちは胴を、あるいは足を切りつけられ、怯んだ隙に、地面に押さえつけられた。

ヴォルタの騎士がラビを踏みつけ、首筋に剣を突きつける。

「ラビっ——」

「止まってください」

思わず駆け寄ろうとするフレイに、ヴォルタはにこやかに警告した。

剣の切っ先がラビの首筋にめり込み、ラビが「ひゃうんっ」と叫んだ。

「正面からやってもいいんですけど、君には危険な潜在能力がありますしね」

ヴォルタが言っているのは、ロキとフレイがぶつかった夜会二日目——戦いの中でラビ

が巨大化し、暴走した、あのときのことだろう。

「不確定要素はなるべく排除したいので、こういう結論にたどりついたんです。君はこの犬どもを家族のように大事にしてるって聞きましたから。その噂が本当なら、こいつらの命が惜しいはずでしょう？」

天使の微笑みを浮かべつつ、悪魔のように告げる。

「大人しく手袋を渡してください」

フレイはラビを見つめ、ほかの〈ガルム〉たちを見回した。

ギャラリーが、しんと静まり返る。

猛威をふるった〈多重なる騒音〉が、こうもあつさり、やられてしまうのか？

観衆が息を詰めて見守る中、フレイは手袋を脱ぎ、ヴォルタに突き出した。

ヴォルタが微笑み、手袋を受け取ろうとした、その瞬間。

突然、黒い影が宙を舞った。

紫電のように鋭く、交戦フィールドに飛び込んでくる。影は空中で二つにわかれ、それぞれに別の騎士へと飛び掛かった。

見事にシンクロした動きで、二体の騎士を蹴り飛ばす。

何だ、と思う間もなく、今度は逆方向から、何かが空気を裂いて飛来した。

一直線に飛んできて、騎士の一体にぶち当たる。

こちらは大剣だ！ 剣は騎士を吹き飛ばし、グレートデンを救い出した。人間型に変形する——と同時に、八本の短剣を射出する。機銃掃射のようなそれが、別の騎士に襲いかかり、騎士はたまらず後退した。

そこでようやく、フレイも我に返る。フレイは瞬時に魔力を練り上げ、

「ラビ！」

がおんつ、と音の砲弾が飛び出し、ヴォルタの騎士を狙った。

ヴォルタの反応も速い。素早く騎士を下がらせ、音の砲弾をかわす。

これで、ラビの拘束も解けた。かくして、〈ガルド〉全員が自由を取り戻した。突然の状況変化にギヤラリーがどよめく。彼らの視線の先には——

「どうも、百位です」

「遅れました、九九位です」

包帯でぐるぐる巻きの雷真と、松葉杖をついたロキ。

傷病欠場中のはずの二人が、平気な顔をして、そこに立っていた。

好奇とも侮蔑とも賞賛ともつかない、おかしい歓声が沸き起こった。

（あのバカ！ また無茶して……！）

シャルの頭に血がのぼる。と同時に、胸がどうしようもなく熱くなった。

どちらも怪我人だ。まともに戦える状態ではない。それなのに、フレイの窮地を救おう



と、駆けつけたのだ……

不覚にも感動するシャルの前で、雷真とロキはお互いに視線を交わし、

「真似すんなバカー」

「貴様が真似だ東洋バカー」

いがみ合いを始めた。

「怪我人は帰って寝てろー 医療班の女子学生に優しくされろー」

「貴様がされろー！ それがきっかけで恋でも芽生えろー」

「恋っ!? 滅多なこと言うな音速バカー」「黙れ光速バカー」「ワープバカー」

顔がぶつかるほどの距離で罵り合う。

力んだ拍子に激痛が走ったらしい。雷真は胸を、ロキはわき腹を押さえ、ぐおお、と
うめきながら、その場にうずくまった。

「……何しにきたのよ、あいつら」

あきれ返るシャルの声が、夕暮れのフィールドにむなしく響いた。

4

あばらが痛い。

着地の衝撃で痛みがぶり返し、じんと腰打っている。治りかけの鎖骨も、さっきの飛び蹴りで思い出したように不調を訴えている。

雷真は冷や汗を垂らしながら、交戦フィールドを見回した。

となりのロキも脂汗を浮かべている。どうやら、ロキも似たような状況だ。足を痛めているのに、飛行中のケルビムから飛び降りた。はっきり言って、バカだ。

だが——間に合ってよかった。

フレイは無事だ。(ガルム) たちも、怪我はしているが、まだ無事だ。

敵集団は固まるでもなく、バラけるでもなく、敵メートルほどの間隔を開けて立っている。思うに、それが彼らのフォーメーション。統制の取れた集団だ。

先ほどの強い魔力は雷真も感じていた。

この階級にいるのがおかしいほどの強敵五人。そして高性能の自動人形。

だが、怯む必要はない。ロキもまた、こんなところにいるべき存在ではないし、夜々の性能は世界最高峰だ。

「おや、伏兵ですか。卑怯ですわね。ひとのことは言えませんが」

中性的な少年——ヴォルタというらしい——が茶目つ氣たつぷりに笑った。

表情とは裏腹に、警戒しているようだ。仕掛けてこない。

長いにらみ合い。気迫と気迫のぶつかり合い。沈黙に押され、後ずさる騎士に、

「怯むな！ 相手は怪我人、人数もこちらが上だよ！」

ヴォルタが叱咤を飛ばす。それで、騎士たちは落ち着きを取り戻したようだ。すうっと宙に浮いて、互いの位置を入れ替え、フォーメーションを変更する。

「……おい、（下から二番目）」

「ああ」

ロキのささやきにうなずく雷真。言われるまでもない。今の動きは――

この前戦った「執事」シンとよく似ている。

察するに連中、シンとよく似た――あるいは同じ――魔術回路を搭載している！
では……あの騎士甲冑の中身は、シンと同じように、生きた人間？

おぞましい想像。雷真は感情の揺れをおし殺し、相棒にささやいた。

「ぬかるなよ、夜々。こいつら、戦い慣れしてる」

「はい！」

夜々が答える。涙のあとが希々しいが、声と態度はいつも通りだ。

敵はどうやら、集団で戦うことを前提に組織されているようだ。

今、目の前にいるのは五体。だが、さらに伏兵がいる可能性は捨てられない。

「どうやる、〈剣帝〉陛下。敵は五人だが、サポータージュ組は十三人いるぜ？」

「怖じ気づいたのなら、そこで見ている」

「誰がー」

「ふん……だから貴様は〈下から二番目〉だというんだ」

「いきなりケンカを売るなバカー」

「バカは貴様だ単細胞バカ。仮に伏兵が潜んでいるとしても——連中が手を出す暇を与えず、蹴散らせばいいだけだ」

「だからおまえは多細胞バカだってんだ。こっちはにわか仕込みの連携、向こうは見るからに完全なフォーメーションなんだぞ。どう考えても向こうが有利だろ」

「あきれ果てた細胞分裂バカだな。——オレを誰だと思っている」

松葉杖を捨て、腕を伸ばしたロキから、ケルビムに向かって魔力が流れ込んだ。

魔術回路（熱風操作）が起動。ケルビムの背面パーツが展開し、棘のような短剣がせり出した。四本が切り離され、四方向に飛ぶ。

短剣が狙うのは、両翼の騎士四体。

防ぐか、かわすか。騎士たちは一瞬、迷ったようだ。

だが、結局は回避を選ぶ。（熱風操作）の攻撃力を警戒したようだ。

短剣は即座に向きを変え、騎士たちに追いつがる。

そして始まる鬼ごっこ。四体は回避に気を取られ、攻撃の余裕を失った。

上手く四体を封じた。たった四本の短剣で――

ケルビムの短剣は八本だ。敵の数が増えても、まだ対応できる。

（やっぱりこいつ、とんでもねえ……！）

何という魔力。舌を巻く雷真の眼前で、ケルビムが地を蹴った。（熱風操作）の推力で飛翔し、残る一体の騎士——ヴォルタの自動人形に迫る。

両手のブレードを叩きつける。ヴォルタの自動人形は盾で防いだ——が、無駄だ。盾は綿か何かのように、たやすく切り裂かれてしまう。

きわどくかわす騎士。そして、こちらも鬼ごっこが始まった。

かくして、ロキは見事、五体の騎士の陣形を崩してみせた。

ここでようやく、雷真はロキの意図を理解した。

（連中の注意はロキに向いてる……。なるほど、こういうことか）

ふと、背後のフレイが不安げに震えていることに気付いた。

怪我をした犬たち五頭を抱えて、心配そうに、ロキの戦いを見守っている。

「安心しろ、フレイ」

雷真は魔力を練りながら、フレイに笑いかけた。

「俺はともかく——あいつが負けるところなんぞ、想像もつかねえ」

「ライシン……」

「夜々。準備はいいか？」

相棒の様子をうかがう。夜々は唇を引き結び、こくりとうなずいた。

夜々と二人、力を溜めて、チャンスを待つ。

大立ち回りが繰り広げられるフィールドの中央。不意に、そこから飛び出してきた騎士がいた。短剣がかすり、鎧を裂かれ、回避のために飛び退いたのだ。

今だ！

「吹鳴 四八衝！」

爆発的な突進。夜々は一瞬で騎士に迫り、その背中に蹴りを見舞った。

蹴りは見事に騎士をとらえた。ボデイが（く）の字に曲がる。だが、折れない。

力と力の拮抗。シンと同じタイプの抵抗だ。だが――

「天輪！」

魔力の質を変更した途端、ばきんっ、と騎士の背骨が砕けた。

（――いける！）

連中の魔術回路はシンに似ているし、使い手も相当の魔力を持っている。だが、やはり、シンほどの戦闘能力は持っていない！

騎士が芝に激突し、赤い液体が兜から噴き出す。とっさに吐き気をこらえる雷真。注意がそれて隙が生じ、棒立ちになる夜々に、騎士が突っ込んできた。

大ぶりの戦斧を叩きつけてくる。雷真はあわてて魔力を送り込み、夜々に防御を命じた。

細い腕で戦斧を受け止める……が、魔力が足りず、肌が裂けた。

力比べになる。

夜々の〈金剛力〉は強力だが、相手もまた不可思議な剛力を発揮する。

ケルビムの短剣をかわしつつ、別の一体がこちらを向いた。夜々の背後を取るつもりか。このままでは挟み撃ちにされる！

刹那、ごうつ、と凄まじい音を立てて、大剣が戦斧の騎士を真つ二つにした。

盛大な血しぶき。人形使いの叫びと、観客の悲鳴が交錯する中、血しぶきは夜々に降りかかり、白い肌を真つ赤に染めた。

「ふん……甘ったれが」

雷真の背後で、ロキが冷ややかに吐き捨てた。

「戦う気がないなら、下がっている。足手まといだ」

一瞬の動揺を見抜かれた？

無性に恥ずかしい。雷真は歯噛みしつつ、

「夜々、吹鳴三六衝！」

「はい！」

夜々が素早く跳躍する。背後の騎士が夜々を見失い、戸惑う。

夜々は騎士の頭上で一回転し、叩きつけるように蹴った。相手はかろうじて受け止めた

が、そのせいで動きが止まった。

そこへ、疾風のような一撃。変形したケルビムが騎士の胴体を上下に切り離す。

「……ふん。まだやるのか？」

「おまえの言う通りだよ、ロキ。俺は甘かった。そして、もうそれは許されない」
これまでも、雷真は人形を殺してきた。

今さら相手が人間そっくりだからといって、躊躇するわけにはいかない。

躊躇していて、いいはずがない！

ケルビムの短剣を叩き落とし、振り払いながら、二体の騎士が迫ってくる。二体が同時に繰り出す白刃を、夜々はたやすくブロッタした。

「夜々ー 天嶮 三六 衝！」

さらに命令。そのまま押し返し、相手の武器を弾き飛ばす。

そして、がら空きの胴体に、渾身の蹴りを叩き込んだ。

ずどずどんっ、と二連発。騎士は左右に吹っ飛んだ。

その片方をケルビムが――

もう片方を夜々が――

追いますが、空中でとらえる。ケルビムの斬撃が騎士の首をはね飛ばし、夜々の蹴りが胴体に大穴をうがつた。

「ひ、怯むな！ 持ちこたえろ！」

と自分の騎士に叫ぶヴォルタ。しかし、その声は上ずっている。

怯もうが、怯むまいが、もう関係がない。

二対一になった時点で、既に決着はついている。

夜々とケルビムがヴォルタの騎士へと突き進み、左右から挟み込むように攻撃した。

どちらをさばくか、ヴォルタは迷ったようだ。

どちらをさばいても、意味はないというのに。

夜々の颯りが頭部を碎き、ケルビムのブレードが胴体を切断する。

そして、かくもあつさりど、五体の騎士は死体になった。

彼らの魔術回路が勝手に起動している。どういう加減なのか、ボディは粉々に――灰のようになつて、さらさらと崩れ、飛び散つてしまう。

五人の人形使いは、信じられないといった様子で、そのありさまを眺めていた。

夜々とケルビムが、べつとりと返り血を浴びた姿で、そちらをにらむ。

威嚇したわけでもないのに、人形使いたちはそろって腰を退いた。

無論、逃げて意味はない。人形を破壊された状況でフィールドから逃げ出せば、審判が失格を告げるだけだ。

五人は悔しげに肩を震わせつつ、それぞれに手袋を脱ぎ、足もとに捨てた。

その瞬間、こちらの勝利が決まった。

「第八六位、第八五位、第八四位、第八三位、第八二位——権利消失です」

失格を告げられ、すごすごと退散する五人の学生。その後ろ姿を見送りながら、雷真はふうとため息をついた。

夜々があたりを警戒しながら、心配そうに寄ってくる。

「大丈夫ですか、雷真」

「ああ。……さて、今度は」

ロキとフレイを見る。フレイはびくっと、思い出したように身を固くした。

「俺たちの統きはどうする、お二人さんよ」

「ふん……貴様はどうしたいんだ？」

「そうだな。連中の伏兵が割り込んでくる可能性もあるし——おまえたち姉弟が相手じゃ、俺としては分が悪い」

「奇遇だな。オレも足手まといがいる状況ではやりたくない」

というロキの言葉に、フレイが目を丸くした。

犬たちを抱えながら、顔を赤くして、弟を見上げる。

「ロキ……それって」

「……あんたと組んだ方が、夜会で有利になると踏んだだけだ」

足手まとい、という言葉と矛盾しているのだが、ロキはそんなことにも気が回らない様子で、姉に向かって言い捨てた。

その発言が聞こえたのか、ギャラリーに動揺が走った。

「おい、聞いたかー」「(剣帝)がフレイと組む気だぞ」「(剣帝)で組むのか!?」

ただでさえ厄介な(剣帝)に、(ガラム)五頭の援護が加わるなら、それはもう一個の軍隊と言ってもいい。下手をすれば、(元帥)なみに厄介な相手だ。

背筋が寒くなるのを感じながら、ふっと笑って、雷真は下がった。

ロキとフレイもそれにならう。お互いにフィールドのすみまで後退。

そして、にらみ合うように、一時間。

待機義務を果たし、午後八時になる前に、今宵の夜会は終わった。

まずは、ロキとフレイがフィールドの外に出る。

雷真もそれを確認して、夜々を連れ、フィールドを出た。

三人がフィールドを出たのを見て、執行部の審判が休戦を告げる。

雷真とロキは振り返りもせず、ギャラリーのあいだを抜けて、それぞれの寮へ向かった。てくてくと二十歩も進んだ頃、そろって前のめりに倒れ込む。

ともに倒がつてはいたが——とても戦える状態ではなかったのだ。

うつすら目を開けると、薬品くさい室内だった。

「雷真！ 気がついたんですねー」

視界に飛び込んでくるのは夜々の顔。漆黒の瞳がうるうる揺れ、ほろほろと大粒の涙がこぼれ落ちた。

「よかった……雷真……」

「……悪い。また、心配をかけたな」

室内を見回す。既に見慣れてしまった天井と壁。案の定、と言うか何と言うか、そこは医学部一階、医務室となりの病室だった。

ほんやりした頭で記憶の糸をたぐる。確か、戦いの後――

そう、ぶっ倒れたのだ。

重傷の体で無茶をした。魔力の負荷に耐え切れず、気絶してしまったようだ。

思わず苦笑してしまう。我ながら、まるで学習していない。

傷口が開いたのか、胸がじんじんと痛む。その胸には新しい包帯が巻かれていて、どうやら、クルーエルが処置してくれたらしい。

となりのベッドには、静かな寝息を立てるロキがいる。そちらにはフレイが突っ伏して

いて、真珠色の髪がベッドの上に広がっていた。

突然、ぼたぼたと冷たいしずくが頬に当たり、雷真は我に返った。

「すみません……雷真……っ。夜々が……夜々がついていたのに……！」

夜々は切なげに眉をゆがめ、顔を覆って泣き出した。雷真はあわてた。

「泣くなよ。おまえは何にも悪くない。俺がちよっとカッコつけて、飛び蹴りなんかしたからだ。おまえのせいじゃない」

「違います……夜々のせいです……っ」

夜々はいつも以上に頑なだ。ぐすつ、ひつく、としゃくり上げる。

「……おまえ、ちよつと、おかしいぞ？ 何かあったのか？」

「何でも……何でもありません……！」

「何でもないわけないだろう。そんな顔して」

思わず手を伸ばす。肩に触れようとした瞬間、夜々はびくっと身を退いた。

「あ……す、すみません」

夜々は自分で自分に驚いたようだ。もちろん雷真も驚いた。普段、進んでくっついてくる夜々が、雷真に触れられることを拒むなんて。

雷真は気付かなかったふりをして、

「おまえがここまで遅んでくれたのか？ 今、何時だ？」

「あ……ええと……時計、見えます」

夜々は立ち上がり、フレイを起こさないように、忍び足で廊下に向かった。
一歩一歩を踏みしめるように——そう見えたのは錯覚だろうか？

扉の前で立ち止まり、そつと雷真を振り返る。

その美しさに、雷真は息をのむ。

ひっそりと、はかなげに咲く水仙（スイセン）のようなたたずまい。

夜々は目を伏せ、さみしげに微笑（ほくそく）んだ。

「さようならです、雷真」

「え——？」

一転、にこつといつものように笑って、

「時計、見えますねー」

「あ……ああ」

たたたと駆けていく。

走り去る後ろ姿は、いつも通りの彼女に見えた。

この夜、このまま、夜々は戻ってこなかった。



Chapter 2 十字架の騎士団

1

早朝。夜の闇は既にやわらぎ、小鳥のさえずりが騒がしい。

夜明けに近い。まんじりともせず、一夜を過ごした雷真は、このときになって、ついに動いた。ロキとフレイの横をすり抜け、病室を出る。

駆け足で無人のロビーへ向かい、はやる気持ちを抑えて電話に取りつく。

「はい……何の御用でしょうか？」

起き抜けなのか、珍しくほんやりした、いろりの声が聞こえた。

「朝早くにすまないー 硝子さんにつないでくれー」

「え……雷真殿？」

「夜々が戻らなかったんだー 何かあったのかも――」

「戻らなかった……？ それはつまり……」

「行方不明ってことだよー 急いで硝子さんにー」



「落ちていてください雷真殿！ おお落ち着いて、まずは硝子に電話を！」

「うん。とりあえず、おまえが落ち着け」

ばたん、どたん、がしゃーん、と受話器の向こうがうるさくなる。

しばらくして、ようやく硝子が出た。

「また厄介ごとなの、坊や」

「すまない……だが、今回はちよつと違うんだ」

「夜々がいなくなったそうね？」

「……俺のせいだ。昨日、様子がおかしかったんだ。それなのに俺は」

「愚痴は後になさい。こちらでも探してみるから——」

そのとき、「主」と遠くでいろりが叫んだ。

何かあったようだ。手に汗を握る雷真に、硝子は無情にも、

「ちよつと面倒なことになりそうね。一度切るわ」

「え!? 待ってくれ——」

「甘えないで」

ぴしゃりと言われる。先日の命令違反をまだ怒っているのかもしれない。

「坊やはベッドに戻りなさい。夕刻、こちらから連絡するわ」

一方的に通話が切れる。雷真は不安に駆られつつ、受話器を置いた。

じつとしていられない。衝動的に窓を飛び出したところで、立ち止まる。闇雲やみぐもに探しても、夜々ややが見つかるわけがない。

一体、どこに行つたのだろうか？ 俺おれが傷つけてしまったのか？

それとも、誰かに——拉致らっしされた？

夜々は花博やふくブランドの最高級人形。その価値、性能は既に周囲の知るところとなっている。学生たちの中には列強軍部の後援を受けている者も多い。どこかの国が、子飼いの学生をたきつけて、強引に奪つたのでは？

だが、学院はそれを許すまい。そもそも、夜々の性能がそれを許さない。

（学院——そうだ、盗難事件として学院に泣きつくか？）

……いや、学院長に相談するのは得策ではない……気がする。

（誰か、信頼できる人物に——そうだ、キンバリー先生！）

即座に決断する。急いで理学部の方に行こうとして、誰かにぶつかつた。

可愛らしい悲鳴。雷真らいまことの胸に当たつたのは、サラサラの銀髪だった。

「おはようございます。ライシンさん」

鼻をさすりながら、にこりと微笑む女子学生。

整った顔立ちだ。目が切れ長で、鼻筋の通つた美人顔。瞳はエメラルドのごとく輝き、長い銀髪は羽衣はふえのように、風をはらんできらきらと輝いている。

雷真の本能が一斉に警報を鳴らした。

乙女は美しい。だが、気配を感じなかった。この俺が！

「……誰だ？」

「まあ、残念です。覚えていらっしやらないなんて。同じクラスなのに」

「……悪い。余裕がないんだ」

普段から、ほかの学生を気にしている余裕も。

そして今、ここで立ち話に興じている余裕も。

雷真は油断なく後ずさり、乙女の顔を離れようとした。乙女は構わず、

「自動人形オートマトンの姿が見えませんか。ひょっとして、自動人形オートマトンを探しています？」

「夜々だ」

「ごめんなさい。夜々——さん、の行き先に心当たりでも？」

「ない。だから、おまえに構っている暇はない」

「でも、わたくしにはあるんです」

本能の警戒レベルがさらに跳ね上がる。今、こいつは何て言った？

「どこだ！ なぜわかる！ おまえは誰だ！」

「落ちてきてください。確定情報ではなくて……先ほど、湖のほとりを散策していたら、

キモノ姿の乙女を見かけたので、もしやと思ったただけなんです」

嘘だ。直感がうるさいくらいに告げている。それは嘘だ！

こいつは何者だ？ 前回、シャルを利用しようとした敵……なのか？ 危険だ。今の雷真には相棒がいない。おまけに重傷を負っている。

だが——またとない好機だ。

こいつが黒幕なら、事件の真相に近付ける。

雷真は直感の命じるまま、無謀にもこう言った。

「案内してくれ」

2

清々しい朝の光が、白亜の外壁を照らし出す。

早朝のグリフォン女子寮。ほとんどの寮生はまだベッドの中だ。

「バカ……そそり立つバカ……！」

ダブルサイズのベッドで、シャルはむにやむにやと寝言を言っていた。

「バカ……そんなこと許すわけ……あん……だめだってば……♡」

台詞とは裏腹に、枕をぎゅーっと抱きしめて、ぼちっと目を覚めます。

しばし、ぼんやり。そして、かーっと赤面した。

羞恥に悶え、ぼすぼすと枕を叩く。枕元のシグムントが目を見まし、あくびをした。こしこしと目をこすりながら、となりのアンリが身を起こす。

「お姉さま……？　どうかした？」

「どとうもしないわよー 極めて正常よー」

「案ずるな、アンリ。シャルは少々、恥ずかしい夢を見ていたのだ」

「ただ黙りなさいシグムントー お昼のチキンを卵のカラにするわよー」

くすつと笑うアンリを見て、シャルは幸せな気分になった。

アンリの学跡は既に抹消されているが、キンバリーのはからいで、グリフォン女子寮に寄宿することが許されていた。

一緒に寝起きできる日が、こんなに早く訪れるなんて……。

そのとき、コンコンと窓ガラスがノックされた。

小鳥が遊びにきたのかと、そちらを見やつて——どきっとした。

勝手に窓を開け、顔を突き出してきたのは雷真だ。

先ほどの夢が脳内で再生され、シャルの頭は沸騰しそうになった。

「よう、シャル。早いな」

「なな何やつてるのよ無礼者ー レディの部屋に失礼よー」

こんな大胆な行為、当然、彼の相棒が黙っていない——かと思っただが。

「……あの子はどうしたのよ。貴方あなたがひとりなんておかしいじゃない。何の用？」

「ああ、実は——デートの誘いにきてやった」

「バカなの？」

声が裏返る。耳はもちろん、首のあたりまで赤くなった。

「とととにかく下で待ってなさいー早く行きなさい無礼者ー 変態ー」

重真かさしんは苦笑を浮かべ、アンリとシグムントを一瞥ひとくちして、寒怦ひやうを隠かくった。

向かいの枝に飛び移り、するすると降りていく。まるで猿だ。

シャルは急いでネグリジェを脱ぎ捨て、着替えを始めた。

「お姉さま。今の、ライシンさん……？」

「アンリ、貴女あなたも着替えて。今すぐキンバリー先生のところに行きなさい」

「え……？」

「まっすぐ行くのよ。どこにも寄り道しちゃ駄目よ。誰たれに会っても、ついて行っちゃだめ

よ。いいわね？」

「う、うん……」

アンリは怪訝けげんそうにしていたが、大人しく姉の言うことに従った。顔を洗い、エプロン

ドレスに着替える。

シグムントが帽子にとまるのを待って、シャルはアンリと部屋を出た。

エントランスに向かう。まだ寮監はいない。守衛室を素通りして、外に出る。アンリを理学部の方に送り出し、自分は寮の裏手、自室の窓の下へと向かった。

言いつけ通り、そこに雷真が待っていた。

「それで、何の用よ？」

雷真は急に元気を失くし、ひどく真剣な顔で言った。

「実は……夜々がいなくなったんだ。悪いが、一緒に探してくれないか」

シャルは「ふふっ」と含み笑いをした。

「……シャル？」

「わざわざそちからきてくれるなんてね」

ざわ、と植え込みの樹が騒ぐ。枝が震え、葉がこすれた。風……いや、違う。シャルの魔力に反応しているー

「このあいだの落とし前、つけさせてもらおうわー」

魔力を解放。シグムントが不定形の闇をまとい、質量を増大させる。だが、闇の中から現れたのは、決して巨竜ではない。馬ほどの大きさだ。

筋肉は細く引き締まり、猛禽のような、鋭角的な印象を与える。

「ちょ……おい、シャルー 一体、何の真似——」

「ラスターセイバーー」

問答無用。シグムントのあごから、光がひとすじ、ほとばしった。

それは彗星（せいせい）のように伸び、雷真（かみま）を狙う。

雷真はふわりと、人間離れした動きで飛び退いた。後方に宙返りして射線を外す。だが、シグムントの光はそれに追従する。

あたかも光の剣。雷真はかわしきれず、たまらず手で弾いた。皮膚が焼け、はがれる。破れた皮膚の下からは、おかしなことに、無傷の手がのぞいていた！

すடன்、と着地する雷真。陽炎（やぎやう）のように体が揺らめき、姿がはやけている。

「ふん。いい加減、正体を現したらどう？ ムカつくのよ、その姿」

にやつと、嫌な感じに雷真が笑う。次の瞬間、花びらが散るように、その姿が完全に崩れた。髪や服、肌の破片がはがれ落ち、その下から、別人が現れる。

雷真よりも背が高く、すらりとしている。びちつと撫でつけられた髪に、色つき眼鏡（めがね）、刃物のような目つきが特徴的だ。

自らを『マシンドール』だと言った、あの男——シン——

「これは面妖（めんよう）ですね。どうしてわかったのです？ 完全無欠というわけにはまいりませんが、自分でもなかなかの名演技だったと思いますか？」

「あいつは鈍くて、鈍感で、女心なんか微塵（じじん）も理解しない、どうしようもないバカだけど——アンリに挨拶（あいさつ）もせず、私だけ誘うような、そんな男じゃないのよ」

「なるほど。さすがは東洋のドン・ファン。□^{くど}説く場合は姉妹そろって、というわけですね。姉妹井^{しきい}ですね」

「……ドン？ 何それ？」

シンは前髪をかき上げ、鋭い一瞥^{ひとみ}をシグムントにくれた。

「……以前とは少し、姿が違いますね」

「姿だけじゃないわ。ラストーセイバー」

シャルの命に応じ、再びシグムントが光線を放つ。

収束した光の剣だ。シンは飛んで逃げるが――振り切れない！

ラストーカノンほどの出力はないが、その代わり、持続時間が長い。剣は消えず、いつまでもシンを追いつける。

シンはかわすのをあきらめ、先ほどと同じように、手で光を弾いた。

苦痛に顔をゆがめつつ、宙を蹴^こって突進してくる。

一瞬で最高速に到達。シグムントに肉迫し、鋭い蹴りを放つ。

シグムントは軽やかにステップを踏み、かわした。

シンが驚愕^{きょうがく}する。蹴りが当たらない！

ムキになって速度を上げる、その瞬間、シグムントの首が振り向いた。

「ラストーフレア」

散弾のような光の彈幕。光の針が無数に飛び散り、シンの体に降りそそいだ。

いかに高速移動が可能でも、至近距離で炸裂した散弾はかわせない。光の針に貫かれ、衣装に穴があく。相殺に使ったのか、シンの魔力がぐんと落ちた。

「……やりますね。先日とは別人のようだ」

「ふん。この私が負けっぱなしのままではいると思ったの？」

敗因を分析し、戦術を練った。

魔術回路（魔剣）の新たな運用方法も開発した。

耐久値とのトレードオフになってしまうが、敏捷性を高めるため、シグムントを無闇に巨大化させないことも思いついた。

すべてはシンを打倒し、アンリを護るためー

「……なるほど、どうやら分が悪いようです。バーンスタインの執事は優秀ですが、いささか怠惰ですね。五分の勝負は好まないのです」

シンはスーツの砂ぼこりを払って、上空へとエスケープした。

「逃がさないわー」

シャルはシグムントの背中にまたがり、ただちに飛翔させた。

「はい、ロキ……牛乳」

「……自分で取れる」

「はい、たまご、むけた」

「やめろ。子ども扱いするな」

朝の病室。ロキがベッドで朝食をとり、フレイがその世話を焼いている。

冷たくあしらわれても、フレイは嬉しそうだ。「お姉ちゃんらしいこと」ができて満足なのだろう。一方、ロキは不機嫌な顔で白パンにかじりついている。

そんな二人を、壁にかけられた大剣——ケルビムが興味深そうに見つめ、ラビ以下五頭の犬たちが（お座り）の姿勢で見守っていた。

微笑ましく、平和な光景。その静けさをぶち壊して、

「おまえら！」

と、雷真が病室に飛び込んできた。

痛みがあるのか、顔をゆがめ、わき腹を押さえている。

フレイが驚いて腰を浮かせ、マフラーを踏んでコケそうになった。

「う……ライシン、どうしたの？」

「ふん……朝から姿が見えなかったな」

雷真はせっせと詰まった様子で、勢い込んで二人に言った。

「夜々が——俺の自動人形がいなくなったんだ！」

刹那、フレイとロキに緊張が走った。

「俺ひとりじゃ見つけれない。頼む、力を貸してくれ！」

フレイとロキは互いに視線をかわし、うなずき合った。

ロキが食べかけのトレイをどかし、身を起こす。

「わかった。行くぞ、ケルビム」

「I'm ready」

次の瞬間、ケルビムが壁から外れ、宙を飛んだ。

くると空中で一回転。刀身に炎をまといながら、雷真に振り下ろされる！

がちいんっ、と硬質の衝突音が響き、何かが雷真を護った。

分厚い板——盾だ。大ぶりのタワーズシールドが、雷真の背後から突き出され、ケルビムの凄まじい破壊力を受け止めていた。

雷真の後ろ、盾をかざしているのは小柄な自動人形。

十字軍ふうの騎士甲冑を身につけ、十字が描かれた布をかぶっている。

「……少々、迂闊だったか」

雷真が無表情でつぶやく。いつもの雷真とは明らかに違う。こんな殺伐とした感じは、

雷真ではない。(ガルム) たちが一斉にうなり声を上げ、牙をむき出した。

「どうしてわかった、(剣帝)? 欺瞞は完璧だったろう?」

「バカが。あいつがオレに助けを求めるか」

「ほう。そちらは?」

「う……ライシンは」

フレイはきりきりと眉を吊り上げ、怒った顔で答えた。

「夜々ちゃんのことを、俺の、人形なんて、言わない」

「なるほど……どうやらあの東洋人は、思った以上に慕われているようだ」

「誰が慕うか」

瞬時に沸点を越え、ロキから魔力が飛んだ。大剣のパーツ結合がゆるみ、人間に近い姿へと変形する。そのまま、ケルビムは両腕のブレードで斬りかかった。

騎士がタワーシールドで受ける。もちろん、それはロキの想定内。ロキは(熱風操作)の魔術を使って、盾を焼き切ろうとした。

力と力がせめぎ合う。噴射熱でドアが焦げ、あたりに熱気が充滿した。

だが、斬れない。それほどの高熱にタワーシールドは耐えている。ケルビムのブレードが本来の意味で「変形」し、刃がつぶれてしまった。

やがて、タワーシールドの下で、雷真の姿が崩れた。

はらはらと花びらが散るように、体の表面がはがれる。その下から現れたのは、蜂蜜色の金髪を長く垂らした、立派な体格の美青年だった。

「貴様……ローゼンベルク！」

「ここでやるのは迂闊だ、〈剣帝〉。お互いにな。ゆえに——追ってこい！」

ローゼンベルクが叫ぶと同時に、騎士はタワーシールドを振り上げた。

ケルビムごと跳ね上げ、退路を確保。ローゼンベルクが騎士の肩につかまると、騎士は重量を失くしたかのように飛翔した。

ロキの眼前を突っ切って、開放された窓から飛び出していく。

ロキはベッドから飛び起き、目を回しているフレイを引き起こした。

「……あの極東バカの身に何かあったようだな。追うぞ！」

4

雷真は銀髪の乙女に連れられて、木立ちの中を歩いていた。

道と言えるかどうかとも怪しい獣道。あたりはもう、完全な原生林だ。うっそうと茂る森の中は、トカゲが地べたを走り、鳥や昆虫がうごめいている。

「本当に、こんなところで夜々を見たのか？」

「はい」

銀髪の乙女——アリス・バーンスタインは微笑^{こぼれ}んでうなずいた。あからさまに怪しい。そして、その怪しさを隠そうともしていない。腹が読めない女だ。

「夜々さんを見かけたのは、このあたりです。ここからは手分けしましょう」
「……おまえも一緒に探してくれるのか？」

「東洋のことわざに、乗りかかった船、というのがあってしょう？」

邪気のまったく感じられない——それゆえに恐ろしい微笑み。

だが、彼女に害意があるのなら、雷真はとつくに術中だ。今さらジタバタしても始まらない。雷真は腹をくくって、アリスと別れ、軌道を奥に進んだ。

不意に木々が開け、広場のような場所に出た。

そこに、夜々がいた。

こちらに背を向け、切り株に座っている。肩の大きく開いた着物姿。濡^ぬれたようにつややかな黒髪。小鳥を指にとまらせて、何やら会話をしているようだ。

雷真の気配で小鳥が逃げる。それで、夜々もこちらに気付いた。

「雷真……」

「探したぜ、夜々」

「こないでください」

夜々の表情は険しい。怒っている……？ いや、違う。夜々はどこかつらそうに、無理をしたような顔で、雷真をにらんでいた。

雷真はできるだけ優しく見えるように、努力して微笑んだ。

「無事みたいで、よかった。心配したんだぜ？」

「……雷真が夜々を心配してくれるのは、夜々が夜会に必要だから、ですよね？」

「違う。おまえは俺の相棒だ。相棒を心配するのに、理由なんざいるか」

張り詰めていた夜々の表情が崩れる。夜々は漆黒の瞳をうるませ、

「でも、夜々は自動人形……」

「どうやって生まれたかなんて関係ない。俺にとって、おまえは間違いないニンゲンだ。つまらないこと言ってる、放り出すぞ」

夜々は目をこすり、それから、ふわつと微笑んだ。

「ありがとうございます。夜々は……嬉しいです」

「礼なんかいから、戻ってこい」

「……それは、できません」

「夜々——」

「だめなんです——」

「なぜだ——」

夜々はひくつとしやくり上げ、

「だって……夜々は……夜々じゃ……雷真には、足りないから……」

「足りない……」

「夜々はっ」

續けて何か言おうとするのを、ばんばん、と拍手がさえぎった。

何もないところから、にじみ出るように現れる人影。

銀髪をなびかせ、楽しげに笑う乙女は、もちろんアリスだ。

「いやはや、美しい光景もあったもんだね。僕はガラにもなく感動したよ」

先ほどまでとは口調が違う。身にまとう空気からして、別物だ。

破滅に飢えたような眼。虚無をたたえた、この瞳には覚えがある。

「主は人形を人間として愛し、人形は主に相應しくないと自ら身を退く——こんなに想い

合っている組み合わせは、学院中を探したって見つからないよ」

「……やつぱり、おまえの差し金か。夜々に何を吹き込んだ！」

「何も。ただ教えてあげただけだよ」

「教えた……？」

「そうとも、彼女は戻れない。その資格がないからね」

さつと手をあげる。それが合図だったのか、あたりの風景が崩れた。それまで樹木だと

思っていたものが、次々に人間の姿へと変貌する。

続々と現れる学生たち。そして、甲冑をまとった騎士たち。

十字軍ふうの騎士を引き連れて、白い手袋の学生たちが出現した。

「え……っ!?」

夜々が驚きの声をあげる。どうやら、夜々も知らなかったようだ。

そんな夜々に、アリスはにっこりと微笑みかける。

「エサになってくれてありがとう、夜々。おかげでライシンの意識は君に向き——簡単に

包囲することができたよ」

雷真は素早く敵を数えた。アリスを含めて学生は八人。自動人形は七体だ。

学生たちの顔に見覚えはない。上級生が多いのかもしれない。にこにこと楽しげな双子

の少女。仏頭面の赤毛の青年。褐色の肌の少年に、老僧のような若者……。

騎士たちは見事に等間隔で、ぐるりと雷真を取り囲んでいる。

「さて、こうして逃げ場もなくなったわけだし」

アリスは上品に唇を曲げ、にっこりと麗しく微笑んだ。

「僕らに協力してもらえるかな、ライシンさん？」

ビリビリと肌を刺すような刺激が雷真を襲う。

それは周囲に満ちた魔力、攻撃の意志だ。

雷真は頭をフル回転させて、脱出の方法を考えた。

夜々を（強制支配）して、無理やり戦わせることは……できる。

だが、そんなやり方で、この敵を相手にできるだろうか？

アリスの目的が何かは知らないが、今は素直に従うしか……。

そのとき、ぶおんつ、と強烈な光線が頭上に走った。

「あれは、ラストーカノン？」

天を振り仰ぐ。光の大砲をかわして、降りてくる男は——シンだ！

そのシンを追って、馬くらの大きさのシグムントが飛んでくる。

見たことがないフォルム。スマートなシルエツトはいかにも敏捷。四枚の翼のあいだに、

シャルがまたがつて騎乗していた。

「最悪のバカー！ 考えが足りないわね！ 警戒心のない草食動物ね！」

いきなり罵倒される。雷真が反論する間もなく、シグムントが光線をぶつ放した。

光線は雷真の周囲をなぎ払う。騎士たちは光をかわして飛びのいた。

「申し訳ありません、お嬢さま。いとも簡単に見抜かれました」

シンはアリスを光からかばいつつ、うやうやしく言った。

「ミスター・アカバネは心ざまの真つ直ぐな男のようで……お嬢さまのねじ曲がった根性では、あの男を再現することは不可能だったようです」

「OK、シン。後で泣いたり笑ったりできなくしてやるからね」

そこへ、小柄な自動人形につかまって、金髪的美青年が飛んできた。

その顔を見て、シャルは驚きの声をあげた。

「（敵らない番長）——ローゼンベルク——」

学生たちのど真ん中、夜々のすぐとなりには躊躇なく着地する。立派な体軀の美青年に、

アリスは気さくに声をかけた。

「おや、君も失敗かい、ローゼンベルク」

「すまない。たやすく看破された」

「やれやれ……思ったより人望があったのかな、（下から二番目）さんは。でも、上手いことおびき寄せることには成功したね」

目を細めるアリス。少し遅れて、雷真は誰かの魔力を感じた。なじみのある波長。背後からやってくる。ローゼンベルクを追いかけてきたようだ。

間もなく、二人が到着する。

ラビに乗り、《ガラム》を引き連れたフレイと、大剣に立ち乗りしているロキ。

フレイがはっとしたように雷真を、そしてシャルを見た。

「う……ライシン。シャルも」

「話は後だ。敵に集中しろ」

ロキが鋭く言う。そう、話し込んでいる余裕はない。

アリスはにっこりと、満足げにうなずいた。

「実質、四対九だね。これなら確実に勝てるね、ローゼンベルク？」

「慢心は捨てろ。貴公を計算に入れても、八割五分といったところだ」

雷真は目をむいた。

今の口調は、ハツタリでも、誇張でも、強がりでもなかった。

ロキたちがきてくれたことで、包囲は崩れている。今なら、逃げることもできる。戦力的にも、シグムントとケルビム、〈ガルド〉五頭がいる。

はつきり言って、こちらはかなりの戦力だ。並みの人形使いでは相手にならない。昨晚の戦いでも、ロキは騎士たちを圧倒して――

最悪の想像が脳裏をかすめ、雷真は戦慄した。

彼らの騎士が、昨晚と同じレベルなら、こちらが勝てる。

だが、もし――シンと同じレベルなら？

「……おまえらは何だ」

答えを期待したわけではなかったが、ローゼンベルクはあっさりと応えた。

「仮に（十字架の騎士）と名乗ろう。この夜会を支配する存在だ」

「へえ……大きく出やがったな」

やはり、相当の自信に満ちている。

それは彼の背後、居並ぶ学生たちも同じだ。（剣帝）や（暴竜）を前にしているのに、自分たちの優位をいささかも疑っていない！

「……まあ、おまえらが何だろうと関係ないな。夜会を支配したけりや勝手にそうしろ。だが、夜々は返してもらう」

「それはもう、貴公のものではない」

「ふざけるな！ そんなことが通るか！ 夜々、戻ってこい！」

だが、夜々は顔を背け、あろうことが、アリスの背中に隠れてしまった。愕然とする雷真の前で、王族のように泰然と、ローゼンベルクは言った。

「ゆうべの戦いは見せてもらった。その怪我で乱入したのは迂闊だったが——戦いぶりは見事だった。捨て駒とは言え、我らの騎士を五体も破壊するとは」

「捨て駒、と言ったな」

ロキが敏感に反応する。

「確かに、昨夜のガラタは、そいつらの半分も潜在能力を感じなかった」

雷真は耳を疑った。半分……？

——半分？

「この場にあるのは〈完成品〉。昨晚、威力偵察のために捨てたのは〈欠陥品〉だ」
完成品。その響きにぞっとして、雷真は思わずつぶやいた。

「それじゃ、そいつらはやはり、シンと同じ……」

神性機巧——マシンドール。

「僕らの国では〈機巧兵士〉と呼ぶけどね」

アリスの補足に、シャルとフレイが同時に息をのむ。ドイツ語だー
シンを含め、数は九体。それも、今度は〈使い手〉つき。

シン単体にさえ、あれほど苦戦させられたのに……

「問答はもういい。やっちまおうぜ、主。」

学生のひとり、燃えるような赤髪的青年が、鬱陶しそうに言った。

「あれは……〈飛来する痛苦〉。シュナイダーだわ」

シャルが警戒してつぶやく。ロキは意にも介さず、

「何だ、シュナイダー。貴様から血祭りにあげて欲しいの——」

最後まで言うことはできない。赤髪が逆立ち、シュナイダーが魔力を放った瞬間、騎士はクレイモアを振りかぶり、ケルビムに斬りかかった。

ロキは反応できている。ケルビムを人型に変形させ、左右のブレードを交差して、クレイモアの一撃を受け止めた。

いや、受け止め切れていない。ケルビムのブレードが切断され、つぶれた刃が宙を飛ぶ。騎士はただちにケルビムを押し倒し、踏みつけた。

切っ先をケルビムに突き刺す。クレイモアはケルビムの装甲を貫き、首筋を断ち切った。オイルのような、黒い液体が飛び散る。

そのときにはもう、赤髪がロキの鼻先にあった。

間合いを詰めていた――シャルもフレイも、雷真できえ反応できない。シュナイダーはロキを殴り飛ばし、そのまま馬乗りになって、ロキの首に手をかけた。

凶暴な光が瞳に宿る。そのまま戦術を握りつぶそうとして――

「迂闊だ、〈V〉」

ローゼンベルクの騎士が、シュナイダーの腕をわしづかみにして止めた。

腕の筋肉がおしつぶされ、めきつと鳴く。シュナイダーはしぶしぶ手を離し、痛そうに腕を振った。彼の騎士もケルビムを解放し、クレイモアを鞘に収める。

その一部始終を見届けて、雷真は震えた。

やられかけた――手負いとは言え――あのロキが！

銀髪をサラサラ言わせながら、アリスが小首を傾げた。

「どうして止めたんだい？　せつかくおびき出したのに」

「……派手にやりすぎた。じき、警備か、執行部の手が回る。見る者が見れば、これが単なる私闘ではなく、我らの仕組んだことだとわかるだろう。この場は退くべきだ。まして、殺しが知られたら参加資格を失う」

「それでいいのー、ローゼンベルク？」

「いいの？　いいのー？」

双子と思しき女子学生が、左右からローゼンベルクにまとわりつく。

「いいんだ、^{ダブル・シン・トローツ}Ⅱ&Ⅲ」。その気になれば片付けるのは遺作もないと、よくわかった」

「君はいつも慎重だね。うんざりするよ、ローゼンベルク」

アリスは肩をすくめ、それから、自分の従者——シンを振り返った。

「それじゃ戻ろうか、シン。おまえのお仕置きもあるしね」

「御意に」

撤退しようとしている。雷真はあせって「待てー」と叫んだ。

だが、もちろん、誰もそんな声には耳を貸さない。

現れたときと同様、彼らの姿は森に溶け込み、見えなくなっていく。

騎士も、学生たちも。そして、夜々も。

「夜々ー　行くな、夜々ー」

夜々は切なげに顔を背け、背を向けた。

雷真は必死に手を伸ばしたが、その指はむなしく空を切った。

6

クロイツリツターとやらが去ると、森の中には静けさが戻った。

「ロキ……大丈夫……？」

「触るな！」

ロキはフレイをはねのけ、それから、ぶっきらぼうに言い足した。

「……問題はない」

「でも……血が」

見ると、ロキの首筋、それから背中が裂けていた。

そんなところは切られていない。雷真は不審に思ったが、ロキはフレイをにらみ、

「平気だと言っただろう。いちいち騒ぐな！」

いらだっている。不覚を取って、自分自身に腹を立てているようだ。

雷真もまた、いらだちと焦燥を持て余し、怒鳴り散らしたい気分だった。

混乱している。いろいろなことが一度に起き、わけのわからない連中が出てきて、後悔

や驚愕がない交ぜになつて、頭がぐらぐらする。

夜々を取り戻せなかった。すぐ目の前にいたのに！

「ロキよ。それから、雷真よ。まずは落ち着け」

と冷静な声で言つたのは、もちろんシグムントだ。

「私が思うに――君たちは全員、おかしな連中に目をつけられたようだ。君たちは夜会で互いに競い合う立場だが、これは利害の一致というものだ。今は協力して、当面の敵に対処すべきではないか？」

もつともだ。誰も反論しない。

「では、雷真よ。まずは君の話を聞かせてくれ。一体、何があつたのだ。夜々はどうしてもにいた？」

「俺にも……よく、わからない」

混乱する頭を振り、ぼつぼつと語り出す。

昨日から夜々の様子が変だつたこと。

夜会のあと、雷真が意識を取り戻したとき、泣いていたこと。

既に午前の講義が始まっているが、誰もその場を動かない。フレイは夫たちにブラシをかけながら、ロキはケルビムの首を応急修理しながら、雷真の話を聞いている。

ひと通り聞き終えると、まずはシャルが疑問を挟んだ。

「ねえ。それじゃあの子、自分からいなくなったの？」

「ああ」

「可哀相に……よっぽど不満を溜めてたのね」

シャルは天を仰ぎ、大げさに気の毒がった。

「下手くその相手をするのが嫌だったのよ」

「何の話だー」

「あるいは、変態的な要求に応えるのが嫌で……」

「そんな眼で見えるなー俺と夜々が何でもないってわかったんだろ？」

「ライシン……変態……エロー」

「あんたまで何だよー妙なレフテルを貼るなー」

フレイに突っ込みを入れ、それから少し冷静になり、雷真はつぶやいた。

「さっきはうなずいちゃったが、『自分からいなくなった』ってのは、少し違う」

シグムントが小鳥のように首をひねり、

「彼らに強制されたと？」

「わからない。わからないが……考えられねーんだ。夜々が、自分の意志で、俺の側から離れるなんて」

「ちょっと聞いた、フレイ？ あの自信、何さまかしら？」

「う……ライシン……自信過剰」

「何なんだおまえらー つか、いつの間に仲良くなった」

もちろん、仲がいいのはけっこうなことなので、深く突っ込まない。

「くそつたれ。俺がもう少し気をつけていれば……」

雷真は頭を抱え、がんがんとこめかみを叩いた。

「いずれにせよ、急がねばなるまい。夜々がいなければ、君は夜会に復讐できない」

「そんなことは問題じゃない」

思わず声を荒らげてしまう。雷真ははつとして、

「いや、悪い。もちろん夜会も大事だ。俺はそのために、英吉利くんたりまでやってきた。

だが、夜々が……どんな目に遭わされるかと思うと……」

シャルとフレイも顔を伏せ、おし黙った。

夜々は最高級の自動人形。列強軍部の手に渡れば、確実に解体され、解析される。

ふんと鼻であしらい、口キが立ち上がった。

「そういうことなら、これは貴様の問題だな。オレはもう行く。オレは謙虚で寛大だが、馴れ合いは好かない」

折れたブレードを抱え上げ、軽く足を引きずって、獣道を戻っていく。その後ろを、首をかくかく揺らしながら、ケルビムがついて行った。

言葉は冷たいが、ロキが急いで——松葉杖も持たず——駆けつけてくれたことには感謝している。雷真は口には出さず、心で礼を言った。

「シャルもフレイも講義に戻ってくれ。つき合わせて悪かった」

「ふん、カッコつけちゃって、ムカつく無礼者ね。そんな体じゃ歩けないでしょう。仕方ないから、病室まで送ってあげるわよ。シグムントで」

「いや、それには及ばない」

シャルはぼかんとして、一瞬後、ざくりとした。

「貴方、まさか……探しに行くつもり!?」

「連中が学生なのはわかったんだ。学院のどこかに夜々を隠しているはずだ」

「持ちなさい! 自分がどんな状態かわかって——」

シグムントがシャルの髪を引っ張り、耳元で何かささやく。何を言ったものか、シャルは口をつぐみ、不機嫌そうに背を向けた。

「ふん。勝手にすればいいわ! 勝手に行き倒れて、鳥に飛ばれなさい! 菌だの虫だのに分解されて、土に還りなさい!」

ずんずんと肩を怒らせて去っていく。

フレイは何か言いたげに雷真を見つめていたが、何も言わず、ラビに乗った。そうして、森の中には、雷真だけが残された。

それから半日。

雷真は講義にも出ず、げんせいりん原生林の中をうろついていた。

改めて理解する。学院の敷地は広大だ。汗と土、草の汁でドロドロになりながら、夕刻まで粘ってみたが、結局、何の成果も得られなかった。

足の裏が熱い。痛み止めが切れて、あばらと鎖骨が裂けるように痛む。歩くのにも難儀するようになったので、仕方なく、メインストリートまで戻ってきた。

獣にでも出くわしたかのように、学生たちがぎよつと目をむく。

視線を浴びるのは慣れっこだ。雷真はベンチに座り込み、呼吸を整えた。

時間を無駄にしてしまった。我ながらバカな話だ。

こんなことなら、先に情報を集めるべきだった。

もしくは、フレイに頭を下げて、〈ガールズ〉の協力を仰ぐべきだったか。

だが、甘えてばかりもいられない。フレイにも夜会やかいや、講義がある。委員会活動もしているようだし――あれでフレイは多忙なのだ。

(夜々……どこにいるんだ……!?)

ふと、クチナシの甘い香りが鼻先をくすぐった。

「あきれたわね、坊や。何てざまなの」

ほんやり顔を上げると、そこに妖艶な美女がいた。

自身が生み出す人形にも負けない美貌。レンズがはめ込まれた眼帯をつけ、背後に銀髪
の乙女を従えている。

「硝子さん……いろいろ……」

そのときになって、ようやく、雷真は朝方の「言いつけ」を思い出した。

「連絡がつかないなんて、軍の狗が聞いてあきれるわ」

「すまない。助かった。手を貸してくれ。夜々が――」

言葉の途中で、いろいろの様子がおかしいのに気付いた。

長いまつ毛を伏せ、何かに耐えるように、足もとをにらんでいる。

「……おい、どうしたんだ、いろいろ？」

応えない。いろいろは無言で、かすかに肩を震わせていた。

いろいろに代わって、硝子が重々しく口を開いた。

「よく聞きなさい、坊や」

「あ……ああ」

「夜々は放棄するわ。今後はいろいろを使いなさい」

言われたことが理解できず、雷真は呆けた顔で硝子を見た。





Chapter 3

鼓動を止める言葉

1

淡い夕闇に沈むヴァルブルギス王立機巧学院。

医学部の裏手、木立ちの中は、ひと足早く夜が訪れている。

ハーファントを肩に引っかけ、木立ちの中を進むロキ。その後ろに機械人形ケルビムが
つき従い、光点のような瞳で主を眺めていた。

「ロキ」

ベンチから立ち上がって、ロキを迎えるはだしの乙女。白いワンピースはもうひとつの
月のよう。長い髪が風に泳ぎ、はかなげに揺れる。

乙女は白い肌を朱色に染め、ふんわりと花が咲くように微笑んだ。

「きてくれたのね」

「……また会えるかと、そう訊いたのはオレだ」

「いいの？ 外出禁止なんでしょう？」





「あんたが心配することじゃない」

乙女はうつむいてしまう。ロキは少しあわてて、

「クルーエルはそれほど頭のカタイ奴やつじゃない。黙らせる方法はいくらでもある」

「……ありがとう。ロキは優しいね」

「ふざけたことを言うな。オレは優しくなどない」

「ごめんなさい……」

また、うつむく。ロキは舌打ちして、

「いつまでも立っているな。座れ」

「うん……」

細い腰をベンチに下ろす。その途端、乙女の肩がぶるっと震えた。

ロキはマントを脱ぎ、がぼつと乙女の頭にかぶせた。

「ロキ……」

「……目の前で震えられては、目障りだ」

「ふふっ……やっぱり、優しい……」

マントに顔をうずめ、頬ほずりする。

「あったかい……」

ロキの瞳ひとみから、いつもの（隙）が消える。そんな自分に気付き、ロキは無理やり視線を

きつくして、ひどく乱暴に、乙女のとりに腰を下ろした。

「……あんたの名を、聞いてなかった」

乙女はきよとんととして、それから、自嘲^{じちやう}つばく微笑^{ほくそん}んだ。

「私は（完全統制振動MK5）——」

「そんなものは人間の名前じゃない」

「気付いているんでしょう？ 私が自動人形^{オートマティン}だって……」

「あんたは人間だ」

「……………」

「あんたが人形だと認めてしまったら、オレも、姉貴も、人形になる。……あんたこそ、知っているんだろう？ オレたち姉弟の心臓は、機巧だ」

ややあつて、乙女はそつと、秘密をささやくように言った。

「ソフィア」

「ソフィアか」

「ロキは？」

「ロキでいい」

「ずるいよ」

「ずるくない。これは、オレの戒めだ」

「……戒め？」

「そう名乗ろうと、オレたちで決めた」

乙女——ソフィアは納得したようにうなずき、そして、黙り込んだ。何かに想いを馳せ、十数秒。やがて、思い切ったように振り向き、

「ねえ、ロキ。死にたいと、思ったこと……ある？」

「……ないな。オレはそんな綺麗な人間じゃない。死にたくないと思ったことなら、何千回とあるがな」

「強いね、ロキは」

「強くなど——」

「私はもう……疲れちゃった……」

声が詰まる。思わずソフィアを盗み見て、ロキは息をのんだ。ソフィアの頬は、濡れて、光っていた。

「戦争は……嫌だね」

「——」

「嫌だよ……人が死ぬのは……殺すのは……」

ぼろぼろとこぼれ落ちる涙。

痛みに耐えるように、小刻みに肩を震わせ、自分自身を抱きしめる。

とつさに、ロキは手を伸ばしかけ――

途中で手を止め、引つ込めた。

こんなとき、どうしていいのか、わからない。

無力感にいらだちながら、しかしどうすることもできず、泣きやむのを待つ。

少し落ち着いたので、ソフィアは涙をぬぐい、「ごめんね」と謝った。

それから、すぐるようにロキを見上げて、ソフィアは言った。

「あのね……ロキに、お願いがあるの」

「願ひ？」

「私を――」

彼女が言った「お願い」を聞いて、ロキの心臓は一時、拍動をやめた。

2

硝子の言葉を理解した瞬間、ほんの数秒、雷真の心臓は止まった。

思わず、いろりを振り向く。だが、いろりは目を合わせない。

硝子は着物の袖に手を差し入れ、手鏡ほどの大きさの板を取り出した。

細い溝が縦横に掘られ、暗号めいた文字が緻密に書き込まれている。見ているうちに板

は魔力を帯び、板上に二つ、螢火のような光がともった。

「この式盤を機巧都市に見立てると、この光がいろり、こつちが小紫よ」

「……夜々のはどこだ？」

「ないわ。夜々の反応は消えた。つまり、夜々は死んだ」

何だって……!?

「——か、もしくは、魔力を絶縁されているのよ。つまり、何者かの手に落ちたの。機能を停止しているか、それに近い状態で保管されていることでしょう」

「なら、生きてるってことだ」

「死んだのと同じよ。取り戻すことはできないのだから。夜々は放棄する。その代わり、坊やにはいろりを——」

「そんなことが納得できるか——」

「するのよ。ご覧なさい」

言葉と同時に、硝子から魔力がほとばしった。

いろりの魔術回路に魔力の火が入る。いろりの瞳が銀色に輝いた瞬間、大気が、風が、空間そのものが、文字通り「凍結」した。

雷真の真横に、時計塔に匹敵するほどの、巨大な水柱がそそり立つ。

空気中の水分を瞬時に水結させたのか。冷気とともに死の凄みを放っている。通りすが

りの学生が腰を抜かし、悲鳴をあげた。

硝子がバチンを指を鳴らすと、氷柱は砕け散った。キラキラと神秘的な音を響かせながら、水霧（みづぎり）となって、生ぬるい風に溶けていく。

「これが（氷面鏡）（ひめんきよう）。いろりの攻撃能力は夜々をはるかに凌駕（りやうが）——」

「そんなことを言ってるんじゃない！」

雷真は立ち上がり、つかみかからんばかりの勢いで、硝子に詰め寄った。

「生きているなら、なぜ助けがない！ 奪われたのなら、なぜ取り戻そうとしない！ 硝子さんにその気がないなら、俺（おれ）が夜々を探しに行く——」

きびすを返そうとして、異変に気付く。足が動かない。びくりとも！

見ると、靴が凍りつき、石畳に張り付いていた。

立ちすくむ雷真の顔に、硝子の平手打ちが溶びせられた。

思いのほか強い力。足もとの氷が砕け、雷真は石畳に転がった。

「人の話は最後まで聞くものよ、坊や」

冷やかな言葉。こちらを見下ろす硝子の双眸（そうまろ）には、殺気さえ漂っている。

「今朝方、私のところにお客がきたわ。大胆にも、直接ね」

雷真は朝の電話を思い出した。受話器の向こうで、何かが起こっていた。

硝子の口ぶりから言って、「お客」というのは、敵——

「お客は何て言ってきたと思う？」

硝子は皮肉げに笑って、続きを言った。

「我が国は友好を望む。しかれども、悪意ある中傷は看過しない。熟慮にも熟慮を重ねるべし——要約すると、『おかしい言いがかりをつけたら、戦争になるぞ』」

「言いがかりも何も、こっちはまだ……」

「そう、事態を把握すらしていなかった。つまり、先手を打たれたのね」

あらゆる対策を講じるなという、事実上の降伏勧告。

「情報部が調べたところでは、敵の首魁はドイツの名門ローゼンベルク。坊やが迂闊に手を出せば、確かに、戦争になる相手よ」

雷真の背中に、じつとりと嫌な汗がにじんだ。

コトが大きくなっているのを感じる。これはもう、雷真だけの問題ではない。

「だが、夜々を盗られたまま、泣き寝入りなんぞ……」

「夜々の魔術回路も、構造も、そう簡単なものじゃないわ。解析だけでも数年、模倣にはさらに数年かかるでしょう。夜々をコピーできたところで、実戦配備はまだまだ先。それまでに戦争が始まれば、実質、日本軍に損はない——」

「そんなことはどうでもいいー」

雷真は石畳を叩き、すまし顔の硝子をにらんだ。

「夜々を見殺しにするのか……!?」

「軍部の判断よ」

「だからって」

「坊やの飼主は誰？」

言葉に詰まる雷真。硝子は追い打ちのように、

「坊やは既に、何度も私の命令に背いている。一度は私を騙しました」

雷真はこぶしを握った。口答えの余地はない。

「坊やはまだ何も成し遂げていない。このまま国に戻り、あの苦渋を舐めるような日々に戻りたいの？」

「……………」

「そうなれば、軍の機密を知った者として処分されるでしょうね」

「……………」

「私との賭けを覚えてる？ 約束通り、今、坊やの命をもらおうかしら？」

「……俺が、自分の命惜しさに、夜々をあきらめると思うか？」

もちろん、タダで死んでやるつもりもない。必ずあいつを道連れにする。

「そうね。坊やを人質にしても無駄だわ。だから、私はこう言うの。「戦争が起きる」という意味を、坊やは本当に理解しているのかしら？」

雷真は眉をひそめた。どういう意味だ？

「欧州の火薬庫、という言葉聞いたことがある？」

「……バルカン半島？」

史学の講義で聞いたことがある。聞きかじっただけだが。

「いくつもの民族が入り乱れる土地よ。そこに住む人々は、自分たちの国家を持ちたいと願っている。それが火薬ね」

雷真は黙って続きを待った。いりりも怪訝そうに耳をそばだてている。

「今、オーストリアとセルビアが領土を巡って一触即発の緊張状態にある。オーストリアの背後にはドイツ帝国が、セルビアの背後にはロシア帝国が控えているわ」

「……大国の代理戦争か」

「おそらく、今回はロシア側が譲歩することになるでしょう。日露戦争や、国内の混乱で、ロシア帝国は疲弊しているから。でも」

すつと、長く美しい指が雷真の胸を示す。

「そこで坊やが出てくるのよ。日本と英国は同盟国。この王立機巧学院で、同盟国の自動人形——国家機密——が奪われたとなれば、英国はどうするかしら？」

「そりゃ……メンツにかけて、独逸に圧力を……」

「そうね。あわよくば、機密をいただいってしまうという野心もある。もちろん、ドイツ

もメンツにかけて突っぱねるわ。英独が表立って争うなら、ロシアもドイツを恐れない。セルビアとオーストリアが戦闘状態に突入するのは必至……。そうなれば、周辺国も介入してくるでしょう」

戦いは世界に飛び火する。

これまでの戦争とは規模が違う。欧州各地で火の手が上がる！

「留学生の自動人形オートマタという小さな火種が、火薬庫に引火する。私は世界の行く末になんて興味はないけれど……（世界大戦）の引き金を引く覚悟が、坊やにあるの？」

雷真は口をつぐんだ。

まさしく、ぐうの音おとも出ない。

（俺おれは……何てガキだったんだ！）

自分のことしか見えていなかった。世界のことなど、目に入っていなかった。

もはや、雷真が命を捨てればいいという問題ではない。

世界と、夜々。

てんびんにかけるには、あまりに重さの違うもの。

「わかったら、謹慎していなさい。いろり、坊やのことを頼んだわよ」

「はい、主あまた」

いろりに後事を託し、硝子しょうこは早々に立ち去った。

その態度は、恨めしいほど、淡泊だった。

3

いろりを連れて、医学部に戻る。

クルーエルは活火山のように怒り狂っていて、マシンガンのような説教を浴びせてきたが、雷真がどんな暴言にも反論しないのを見ると、

「……もういい。ベッドに戻って養生しやがれ！」

投げ出すようにそう言つて、雷真を解放した。

雷真は医務室を出て、となりの病室に入った。

室内はがらんとしていた。ロキの姿がない。ケルビムも、フレイもない。

ふと、自分のベッドの上に、封筒が置かれているのに気付く。

雷真は封を切り、中身を取り出して、読んでみた。

「雷真殿？ 何ですか？ 手紙……？」

「ラブレターだ」

「えっ？ ら、雷真殿もすみに置けませんねー」

いろりはあわあわとうろたえた。すらりとして腰が細い、大人びた風貌のくせに、色恋

の話は苦手らしい。雷真は手紙をたたんでポケットにしまい、

「なあ。おまえがここにきちまって、硝子^{しやうこ}さんの警護^{しやうご}はどうなる？」

「硝子^{しやうこ}のことはご心配なく。軍部の護衛がついています」

——心もとない。

もつとも、いろいろと比べたら、どんな猛者^{まうしや}であつても心もとないのだが。

「あの、それで、雷真殿……」

「何だ。急にそわそわして」

「私はこんな、となりに人がいるような場所で夜側^{よがわ}をすればいいのですか？」

「しなくていい！　つか、するな——」

「しかし、夜々^{やや}が毎晩、夜側^{よがわ}を務めていたと——」

「それはあいつのたわ言だ！　実際には何もしていない——」

「しかし、雷真殿くらいの若人は、マメに発散^{はつさん}しなければ気鬱^{きふさ}になると、主^まが——」

「硝子^{しやうこ}さんまで!?　という教育を受けてんだ——」

必死に否定する雷真を見て、いろいろはくすくすと笑い出した。

「冗談、冗談ですよ、雷真殿」

口元に手を当て、品よく笑っている。雷真はどうしようもなく胸が痛み、

「……無理するな、いろいろ」

「何ですか、雷真殿？」

にこつと微笑む。たぶん、いろりは聞こえなかったふりをした。

だから、雷真も言わなかったふりをして、

「悪い。茶を淹れてくれるか？」

「はい」

いろりは笑顔でうなずき、病室を出て行った。

ドアを閉める寸前、いろりの目尻が不自然に光ったのを、雷真は見逃さない。

夜々には煙たがられていたが、いろりは夜々を可愛がつていた。夜々のことを心配していたからこそ、あんなに口うるさかったのだ。

その夜々を放棄すると言われて、いろりは今、どんな気分なのだろう？

無力感は怒りに変わり、雷真はきつくこぶしを握った。そのとき、いろりが出て行くのを待っていたかのように、窓ガラスがノックされた。

しばらくして、いろりが紅茶を淹れて戻ってきたとき――

「……雷真殿？」

病室にはもう、誰の姿もなかった。

開け放たれた窓から風が吹き込み、白いカーテンを揺らしている。

シグムントに先導されて、雷真はメインストリートに出た。

通りは賑わっている。夜会の交戦フィールドに向かう、見物の学生たちだろう。昨夜は久しぶりに実戦があったので、今夜も期待感が高まっているようだ。

通りのわき、屋外灯の下でのベンチに、不機嫌そうなシャルがいた。

シグムントがいなくて心細いのか、しきりに周囲を気にしている。

「きてくれたのか、シャル」

声をかけると、シャルは表情をゆるめ、それから偉そうに胸をそらした。

「クロイツリッターのことで、小耳に挟んだことがあるから、わざわざ伝えにきてあげたのよ。ありがたがりなさい。謹んで拝聴しなさい」

「ああ、恩に着る。教えてくれ」

「す……素直すぎるっていうのもキモイわね。不気味ね、うす気味悪いわね」

顔を赤くして憎まれ口を叩く。それから、わざとらしく咳払いをして、

「今夜参戦予定の七四位まで、全員ぶんの個人情報調べてみたわ。イギリス、オランダ、スペイン、インドー——構成員の国籍はバラバラよ」

「連中は独逸人^{ドイツ}なんだろ。じゃあ、その国籍は偽物か？」

「いいえ、きつと本物よ。嘘^{うそ}を書いたら除籍になるもの」

事実、アンリも書類上の虚偽が発覚し、除籍になった。

「一見バラバラの集団だけど、自動人形^{オートマタ}を見るまでもなく、共通点があったわ。あいつらはみんな、ローレンス育英基金っていうところから後援を受けてるの」

「育英基金……そこが学費を出したのか？」

「そこを経由して、出してるのよ。ローレンス育英基金の本部はロンドン。広く一般から寄付を募って、優秀な学生に奨学金を出してくれる——らしいわ」

「手が込んでるな。で？ そのバックにいるのは、やっぱり独逸か？」

「クロイツリッターの連中も隠すつもりはないみたいね。堂々と名乗ったくらいだし。むしろ存在を周知させて、夜会^{ナイト}参加者を威圧する意味があるのかも」

もしも今夜、雷真^{ライジン}、ロキ、フレイの脱落が決まれば。

夜会の交戦フィールドには、彼らクロイツリッターしか残らない。この先の参加者は、たったひとりで彼らに挑まねばならない。

もしくは、彼らと同じように、仲間を募るしか……。

「ところで連中、何でこんな下の方の順位につけてんだ？」

「あきれたバカね。ちよつと考えただけでも、理由は三つあるわよ。まず、成績の操作が

しやすいってこと。連中は固まっていなくちゃ意味がないんだから。上位だと連番になるのが難しいじゃない」

「なるほど。二つ目は？」

「まだ戦局が固定化してないってこと。自分たちより先に、別の〈ヘチーム〉ができあがっていたら、ややこしくなるわ」

「ごもっともだ。それで、三つ目は？」

「この先の七十人以上全部とやれるのよ。この意味がわかる？」

シャルは唇を寄せ、通行人に聞かれないよう、声を潜めて言った。

「夜会の旨みは魔王になることだけじゃないわ。Dワークスがそうしたように……」

「機巧魔術の実験か」

「みんなに言えることよ。実験機が多数投入されている。つまり——」

「他国の実験機と戦って、最新技術を奪う？」

「実戦に勝る情報収集はないわ。実際に戦えば、威力も弱点も把握できる」

そのために、あれだけの人数がいるのか！

十四人——五人減っても、まだ九人いる。まず負けることはない。

最後まで勝ち抜けば、今期の〈魔王〉を輩出でき——

おまけに、他国の機巧技術を調査できる。場合によっては、奪取することさえ。

狡猾な連中だ。その上、強欲だ。

「胸が悪くなるぜ。……ありがとよ、わざわざ調べてくれて」

「ちち違ふわよ。自惚れないで。小耳に挟んだって言ったでしょう。顔じゃなくて耳も悪いのね。物覚えまで悪いのね。私はプリュー伯爵家のシャルロットよ。どうして貴方なんかのために骨を折らなくちゃならないのよ」

「シャルはわざわざ執行部まで出向いて、ありったけの情報を引き出したのだ」

「ただ黙りなさいシグムントー お昼のチキンをセミの幼虫にするわよー」

シャルは真つ赤になつて、ふんとそつぽを向いた。

「いずれは私も戦うことになるかもしれないもの。連中が勝ち残ってきたらね。そのときのために、対策を練るのは当然でしょう。それに……あいつらは他人の人影を奪っていくような連中なのよ。自動人形はモノじゃないわ」

瞳に怒りがにじんでいる。フレイにとって（ガルム）たちがそうであるように、シャルにとって自動人形は家族なのだ。

不覚にも胸が熱くなり、雷真は顔を背けた。

「……ありがとよ」

「そつ、そそそれより、どうするのよー 私の力じゃ、あの子がどこに捕まってるのか、わからなかったわ。打つ手をしじゃない」

「いや、連中の居場所はわかってる。実はさっき、フレイが——」
言いかけて、はっとする。

がーん、と音がしそうなほどの衝撃を受け、雷真は硬直した。

俺は何というバカだー シャルの言う通り、あきれたバカ野郎だー

忘れていた。気付かなかった。そこまで考えが回らなかった。

そうだ、ロキと雷真はまたしても入院したため、傷病欠場が認められるが——

「フレイはどうすんだ、今夜ー」

シャルとシグムントも、はっとしたように顔を見合わせた。

フレイは欠場が認められていない。つまり、九人もの騎士団を相手に、たったひとりで立ち向かわなくてはならないのだ！

(どうする……!?)

俺とロキとで、サポートするか？

いや、それは下策だ。敵は九人。数の上でも圧倒的に不利だ。

それに、昼間の戦闘を思い出せ。ロキは一瞬で倒された。あいつの体はガタがきている。ケルビムの修理も終わっているかどうか……。

そして、雷真のもとにも、相棒がいない。

いろいろの攻撃能力は夜々を凌駕するという。だが、夜々と積み重ねてきたような訓練を、

いろいろとは経験していない。いろいろの魔術回路も把握していない。

ぶつつけ本書。おまけに、雷真もまた、体にガタがきているのだ。

こんな状態で、連中に勝てるわけが……。

「棄権させるべきよ」

シャルは迷いなく言った。

「残念だけどね。(ガルム) たちをむざむざ死なせたくないなら」

フレイの(ガルム)は本物の犬をベースにしている。通常の自動人形のようにには修理できない。破壊されてしまえば、それつきりだ。

沈黙する雷真を慰めるように、シャルは珍しく優しい声で言った。

「姉弟の目的は同じなんでしょう？ ロキがいる限り、二人の希望はまだ消えない。ロキが完全に回復すれば、勝機が見つかるかもしれないわ。その頃には、クロイツリッターの数も減ってるかもしれないし」

それはあまりに、都合のいい未来予想図だ。

「それに、いくらロキでも、怪我から復帰したばかりで連中とやるのは無茶よ」

傷病欠場は本来、有利なことではない。欠場者にはブランドが生まれる。感覚が鈍った状態で、自分よりランクの高い相手とやらなければならぬ。

ロキはもともと(十三人)だ。そういう意味では、「自分よりランクの高い」相手では

ない。だが、クロイツリッターは「実力を隠して」下位ランクに潜伏していた。数を計算に入れれば、やはり、相手の方が有利だろう。

雷真は奥歯を噛み、考え込んだ。

フレイはおそらく、棄権しない。

あれで忍の強いところがある。きっと、全力を尽くそうとする。

そうなれば、ロキも怪我を無視して、フレイの援護に出るだろう。

ロキはフレイを絶対に見捨てない。死ぬほどの無茶をするはずだ。あの姉弟の心臓には特別な力が備わっている。死に瀕すればおそらく、その力が発動し……。

自動人形が壊れるか——使い手が死ぬか。あるいは、その両方か。

(くそつたれ！ 何とかできないか……！)

ロキとフレイは、いずれ倒さなければならぬ敵だ。

だが、フレイの笑顔や、ロキと背中合わせで戦ったことや、尾を振る〈ガルド〉たちを思い出すと……なぜだろう。彼らを放っておくことは、とてもできない。

だが、雷真にも、やらなければならぬことがある。

夜々を取り戻しに行かなくては。今すぐ——

雷真は夜々を復讐の道具にしようとした。夜々は笑って力を貸してくれた。彼女のその心に、想いに、雷真は報いなければならぬ。それがけじめだ。

フレイも、夜々も、捨てられない。

では、どうする。どうすればいい。どうすれば……。

そのとき、ばあん、と雷真の脳裏に光が弾けた。

「……はは……は」

シャルがびくつとのけぞり、不気味そうに雷真を見下ろした。

「な、何よ、いきなり笑い出して、やっぱりキモイ奴ね」

「……思いついちまった」

シグムントが首をもたげ、雷真の顔をのぞき込む。

「この状況を打開する方策か？」

「ああ。フレイを棄権させず、夜々を取り戻す方法だ」

「何よ、そんな都合のいいこと、できるわけ？」

シャルは半信半疑だ。だが、雷真はベンチから立ち上がり、

「やるんだ。タイムリミットは午後一時——まだ五時間以上ある」

フレイが一時間の《待機義務》を果たすために、一時までには交戦フィールドに戻る必要がある。逆に言えば、それまでに問題を解決すればいい。

「それで、どうするのだ、雷真？」

「簡単なことだよ。——連中をぶちのめすのさ」

シグムントの問いに笑って答え、シャルの肩に手を置く。

「な……何よ、変態っ」

「シャル、シグムント。こんなことを頼めた義理じゃないってのは、重々承知の上で——頼む。俺に力を貸してくれ」

シャルはフンとそっぽを向いた。雷真の手を振り払い、腕組みをする。

「ほんつと、あきれ果てたバカね。バカ界のバカ王ね。私は言っただけだよ。一度だけ……一度だけなら、どんなことをしても、貴方を護るって」

「シャル……それじゃ」

「もし『手伝うな』なんて言ったら、ラスターカノンで黒コゲにしてやるわ」

「助かるー」

思わず抱きついてしまう雷真。制服越しに伝わる感触はやわらかく、折れそうなほどに線が細い。抱きすくめられたシャルは、たちまちバニツクに陥った。

「あつ、こら——だめっ！ そんな……あ……ラスターカノンー」

5

「それで、私に何を期待しているんだね？」

理学部校舎の最上階。教授陣が使っているフロア。

その一室、キンバリー教授の部屋を、すすけた顔の雷真と、まだ不機嫌なシャル、そしてシグムントが訪れていた。

室内は清潔で、整っている。整頓された机。整理された資料。磨かれた床。先日訪れたときとはまるで印象が違う。

混沌の世界に秩序をもたらした者——メイド服姿のアンリが、雷真とシャルの前に紅茶のカップを置く。元貴族とは思えないほど手際がいい。

キンバリーはアンリが淹れた紅茶をすすり、

「魔術師協会には何も期待するな。我々にできるのは、見ていることだけだ」

「見ていることならできるんだな？」

「そうだが——何を考えた？」

「面白いことさ。できれば、保険をかけておきたい」

「言っておくが、魔術師協会に戦争を抑止できると思うなよ。協会は魔術師の倫理を統制する立場だが、国家の前では魔術師も戦力のひとつに過ぎん。その上、我らがファザーは傍觀主義者だ。列強の争いには関与しない」

皮肉めいた調子で、淡々と告げる。ひょっとしたら、そんな協会の方針を、キンバリー自身は苦々しく思っているのかもしれない。

「それでも、事実を『見て』いて欲しいんだ。権威ある第三者に」

「君は戦争を知らん。あまりにも」

冷ややかに笑う。

「君がこれからしでかすことを我らが記録したとしよう。誰が見ても君の潔白を、相手の悪行を示すものだとしよう。それを見た相手は、その記録を何と呼ぶ？」

「……プロバガンダ、ってか」

「そうだ。古来、戦争は大義名分と風聞を操作して行うものだ」

「それでも。学院は魔術師協会の方を信じるはずだ。特に——あの種おやじなら、絶対にそうする」

学院長エドワード・ラザフォード。

腹に一物ありそうな、得体の知れない、あの男。

「確かに……協会が信頼できる記録を提示すれば、世界各国の若き頭脳をあずかる学院としては、『無法者』の側につくわけにはいかん」

それどころか、クロイツリッターの違反行為を発見し、証明できれば。

「そうよ、あいつらを除籍に追い込むことができるわー」

シャルが驚いた声を出す。雷真はうなずき、

「そうなりゃ、次期〈魔王〉^{（インペラタ）}を輩出し、他国の機巧技術を奪うという、クロイツリッター

の存在意義そのものをつぶしてやれる」

「あきれたー 何て腹黒いのー 腹黒い変態ねー 下腹部が黒光りしてるわねー」

「妙な言い方するなー おまえ貴族のご令嬢だろー」

「えっ、ライシンさんのフランクフルトは黒光りしてるんですかっ？」

アンリがお盆を抱きしめて叫ぶ。

しん、と静まり返る室内。

アンリは耳まで赤くなって、部屋のすみへと逃げて行った。

キンバリーは何事もなかったかのように、

「わかった。君の恩恵に乗ってやろう。それで、何をするつもりだ？」

「連中の（城）に乗り込む」

「――何だと？」

「学院の敷地内に連中の溜まり場がある。不法に占拠、改造した（城）だそうだ。そこに押し入って、夜々を奪い返す」

雷真が大暴れすれば、クロイツリッターは夜会を後回しにして、防衛せざるを得ない。

人数減らしができれば、夜会におけるフレイの生存確率も上がる。

夜々も、フレイも、同時に救える。

何より、このやり方なら――シグムントを戦力として使えるー

「一方的に攻撃をしかければ、君は学院の敵になるぞ？」

「俺は夜々を取り返しに行くだけだ。夜々がそこにいれば、俺の理屈は通る」

「夜々がそこにいなければ？ シラを切られて、君の理屈は成立しない」

「そのときは、俺の学術が抹消されて、終わりだ」

キンバリーはしげしげと雷真を眺め、嘆息した。

「私はバカが嫌いだと言っただろう。仮に夜々が見つかり、君の正当性が証明できるとして——九人もの敵を相手に勝算はあるのか？ なあ、（下から二番目）？」

「算術は苦手だね。数字のことなんぞ知るか」

ふっ、とキンバリーは噴き出した。

くっくくくつ、と腹を抱えて笑う。

雷真もシャルもアンリも目を見張った。こんなふうには、キンバリーが楽しげに笑っているところなど、初めて見たような気がする。

「ああ、わかった。了解した。せいぜい頑張つて、無理を通してみせる。バックアップはしてやる」

「恩に着るー」

「そろそろ着ぶくれて、重すぎやしないかね？」

にやりと笑うキンバリー。雷真はうぐつと詰まった。

確かに、恩に着てばかりだ。キンバリーはもちろん、フレイにも、シャルにも。

だが、何としても夜々を取り戻さなければならぬ。きもなければ、あいつに勝つことはできないし——俺は夜々にも大恩があるはずだ。

ふと、あまりにも唐突に、何かが心に引つかかった。

何か、とてつもなく重大なことを見落としているような気がする。

雷真は立ち上がり、ドアの方を向いた。シャルがシリ阿斯な顔で雷真を見上げ、

「……行くのね？」

「いや、手洗いに」

「なっ、こっ——ばかなの？ 死ぬの？」

「うるせー生理現象だ！ 戦いの最中にもよおしたらどうする！」

「うるさいっ早く行きなさいー 行つてファスナーに挟めばいいわー」

「何をだ！ つか、挟んだら流血の惨事だからな！」

シャルにばかばか叩かれながら部屋を出て、静まり返った廊下に行く。

水場で顔を洗い、脂汗を洗い流して、髪を冷やす。

静かな空間にひとりしていると、少しずつ、「見落とし」の正体がつかめてきた。

脳裏に浮かぶのは、銀髪の乙女アリス・バーンスタイン。

前回、セドリツク・グランビルに化けていたのはあの女……だろう。シンを連れてくる

し、約束後の口ぶりや表情には覚えがある。

とすると、あれはかなりの策士だ。

自らの手は汚さず、シャルに学院長を暗殺させようとした。今度は夜々を操って、雷真を揺さぶっている。相手の知力は確実に雷真より上。だとしたら……。

雷真がこれからやろうとしていることも、相手は既に読んでいる？

むしろ——そうさせることが狙い？

あり得る——それが「見落とし」だ——

このままではまずい。敵は罠を張って待ち構えている。

アリスの最終目標は何だ？ 雷真に（城）を攻めさせて、何を狙う？

（——まさか）

閃いて、ぎよっとする。今もつとも手薄で、美味そうな獲物は……。

何て強欲な連中だ——夜々を撃ってにおいて、狙いが別にあるとは——

かと言って、今さら夜々撃退をあきらめるわけにはいかない。この作戦には、フレイを

救う意図もあるのだ。やるしかない。

（くそつたれ……どうすりゃいいんだ……？）

考え込んでいるうちに、懐かしい顔が脳裏に浮かんだ。

かつて剣術道場で、将棋好きの師範が言っていた。敵の思い通りに動いてはいけない。

もし、相手の思惑に乗るしかないのなら――

「そのときは、あり得ない悪手を指して、敵の度肝どぎらを抜いてやりなさい」
そして、雷真かみまことは思いついた。「あり得ない悪手」を。

「おいおい……本気かよ。……確かに、これ以上の悪手はねえだろうが」
笑いが込み上げる。悪手すぎて勝算がない。

だが、だからこそ、敵の裏をかける……かもしれない。

雷真はしばし考え込み、思いついた悪手を検証した。

「……よし。これで、連中の度肝を抜ける」

「いえ、それは無理ですよ」

不意に背後から声をかけられ、反射的に身構える。

音もなく、気配もなく、窓の外に立っている者がいる。

残照が残る空。浮いているのは色つき眼鏡めがねをかけた長身の男――シンだ。

次の瞬間、シンは窓を蹴破こわって飛び込んできた。

ハンマーのような蹴りが、雷真の胴体にぶち当たる。そのまま、その場で半回転。雷真は蹴りに引っかけられて、破れた窓から虚空へと放り出された。

Chapter 4 この歩みをやめない



1

それは、昨日の夕刻のこと。

雷真の病室を飛び出した夜々は、林の中でひとりの女子学生と出会った。

アリス・バーンスタインと名乗る少女と――

「さあ、もう泣かないで。可愛いお人形さん」

アリスはそつと優しく、ハンカチで頬をぬぐってくれた。

夜々は戸惑いながらも、されるがままになる。

優しい微笑み。アリスの銀髪はまぶしいくらいに輝き、目鼻立ちは人形のように整って

いる。彼女が人間なのだと思うと、夜々はたまらない気持ちになった。

アリスは夜々をじつと見つめ、見透かしたようにうなずいた。

「そう。ライシン・アカバネのことが恋しいんだね」

「――」

「不思議がることはないよ。学院のどこにいても、君たちの大騒ぎは目に入る」
くすりと笑い、それから、哀れみをたたえた目を向ける。

「……可哀相に。君はお人形で、彼は人間だ」

夜々^{ヨヨ}はひくつとしゃくり上げそうになり、あわてて顔を背けた。

その首筋に顔を寄せ、アリスが夜々の耳元でささやく。

「しかも、君は彼に必要とされていない」

「——そ、そんなことありません」

「だって、君は弱いから」

「弱い……夜々が……？」

「彼はどうしていつも怪我^{ケガ}をするのかな？ あんな無茶な戦い方をしなければならぬのはなぜだい？」

「——」

「君たち姉妹のことはこの欧州にも聞こえているんだよ。雪、月、花——三つの自動人形^{オートマティク}には三種の魔術回路が搭載されている。そして、雪のお人形ならば」

静かな、しかし、巨人の鉄柱^{てつちう}のように重い言葉。

「彼が傷つくまでもなく、相手を殲滅^{せんめつ}できるだろう？」

「いろり飾さまなら……」

いろいろの領域支配力、空間制圧能力は夜々の比ではない。
あの《魔術喰い》とやったときも。

いろいろならば、流体と化した相手をたやすく破壊できた。

Dワークスの研究施設に殴り込みをかけたときも。

いろいろならば、飛来する短剣を粉砕し、《熱風操作》を無効化できた。

ロキとの戦いでも、雷真は怪我を負わずに済んだはず。

「彼のためを思うなら、君は彼のもとを去るべきだ」

がんつ、と頭蓋を砕かれるような衝撃。

夜々の目尻から、ぼろりと大粒の涙がこぼれ落ちた。

「ああ、ごめんよ。傷つけてしまったね」

アリスはハンカチを手に、夜々の頬を優しくぬぐう。

「泣かないで。僕なら、君の役に立てると思う」

「……………」

「いい方法があるんだよ。とてもいい方法さ。ライシンは雪のお人形を使うことができ、

君はカリューサイに叱られずに済み、その上——」

甘い、甘い、ささやき。

「人間になれる」

夜々は目をまん丸にして、思わずアリスを振り向いた。

アリスはすっと、素っ気ないくらい簡単に身を離し、

「おや、誰かがくるみたいだ。話の続きは日を改めよう」

「ま——待ってください」

「いいや、待てないね。でも、覚えておくんだ。もし君にその気があるのなら、今は彼とお別れしなくてはならない」

「お別れ……」

「ほんの少しのことだよ。ほんの少しの我慢で、君も、彼も、幸せになれる」

アリスは銀髪をなびかせ、きびすを返した。

「よくよく考えてごらん。可愛いお人形さん」

麗しく微笑み、林の外へと去っていく。

夜々は呆然と立ち尽くし、長い銀髪を見送った。

やがて、遠くから、〈ガラム〉たちの息遣いが聞こえてきた。

2

破れた窓をさらに破って、雷真は虚空に投げ出された。

ガラスの破片とともに、はるか下方の地面へと落ちていく――

しかし、大地に叩きつけられるより早く、何かが背中^{たた}中に当たった。

ぱりんっ、と音を立てて、それは割れ、砕ける。ガラス――いや、氷だ！

ぱりぱりぱりんっ、と次々に氷の板を割り、雷真は落ちていく。その速度は少しずつ鈍る。薄氷がいくえにも層をなし、雷真を減速させている――

やがて、綿にくるまれるように優しく、雷真は地面に降り立った。

氷が粉々に砕け散り、冷たい風があたりを包む。

「ご無事です、か、雷真殿――」

木立^{こたて}の枝を蹴り、軽やかに飛んでくる者がいる。青みを帯びた銀の髪を風に泳がせ、ふわりと着地したのは、やはり、いろりだ。

「いろりー 悪いー 助かったー」

「言いたいことは山ほどありますが、すべて後です。敵がきますー」

夜々より少しだけ切れ長の眼で、きりつと上空を見上げるいろり。

「既に《雪》を配備していましたか。手堅いですね、ミスター・アカバネ」

シンは感心したように言って、するすると虚空を降りてきた。

蹴られた腹を押さえながら、雷真はあえぎあえぎ、訊いた。

「……一応、訊いておくれ。俺と、やるつもりなのか？」

「今まさに殺されかけたというのに、それをおたずねになりますか」

シンはまじまじと雷真を睨め、どこか楽しげに笑った。

「バーンスタインの執事は優秀ですが、完全無欠ではありません。ただひとつ難をあげるとすれば、いささか血気に逸る性質なのです」

「まんまと夜々を手に入れて、俺にはもう、用がないだろう」

「……どうやら貴方は、ご自身の価値をご存知ないようだ。生きたアカバネを得ることに、どれほどの価値があると思います？」

「だから奪うつか。強盗の理屈だな」

「いいえ、騎士の理屈です」

「なに——」

「貴方を手に入れるのは『ついで』にすぎません。私の真の目的は貴方を排除すること。先ほど、貴方がおっしゃったではありませんか。『連中の度肝を抜ける』とね。つまり、それこそが、私が貴方を恐れ、排除する理由——」

叩きつけるような殺気を放つ。

膨大な魔力が飛び、あたりに突風が生じた。

いろりが身構え、雷真をかばうように前に出る。

「貴方は危険なのです」

シンは淡々と続けた。

「先だつての戦い、貴方は我が主を——他人を出し抜くことが三度の食事よりも好きという性根の腐りきった方を、あと一步のところまで追い詰めました。条件がそろってれば、敗れていたのは主の方だったかもしれません」

「だから、俺を消すってか」

「貴方がどれほど危険でも、何もさせなければ、主に害は及びません」

「短絡思考もいいところだ。俺を襲ったことが学院に知られたら、あんたの大事なご主人さまは参加資格を剥奪されるぜ？」

「ご心配には及びません。私は私の独断で動いているだけ。私の（エイブの心臓）を解析し、ログをたどれば、私が誰の魔力介入もなしに行動している——すなわち（暴走）していることは明らかです」

啞然として、シンの顔を見つめる。

冗談を言っている顔ではない。シンは至って真剣だ。

「あきれたな……。解体されるのも覚悟の上とは、ほんとと心酔してやがる。俺が言うのも何だが、正気じゃねえ。頭の腐ったご主人さまが、そんなに大事——」

刹那、怒りとともにシンが動いた。

爆発的な加速。一瞬で最高速に達し、雷真めがけて突っ込んでくる。

真正面から猛烈な蹴りを放つ。直撃すれば、間違ひなく、雷真の背骨がへし折れるような一撃だった――が、雷真の前にはいろりが陣取っていた。

キラキラと夕陽を弾く、ぶ厚い氷壁が出現し、シンの蹴りを阻む。

氷はかなり密度が高く、固く結まっている様子だ。シグムントを吹っ飛ばすほどのシンの蹴りにも、一瞬なら耐える――

そして、氷壁が撃ち抜かれるまでの、ごく短い時間に。

「雷真殿！ 魔力を――」

雷真を背後に押しやり、叫ぶ。雷真は呼びかけに応え、魔力を練った。

魔術回路（氷面鏡）の構造は把握していない。操作はすべていろり任せだ。それでも何の問題もなく、いろりは魔術を起動した。

氷壁を砕き、突き進んでくるシン。その突進を、氷の破片が迎撃する。

破片がふくらみ、伸び、鋭い円錐となって八方から襲う――

まさに氷槍。無数の槍がシンを串刺しにしようとする。

もちろん、シンの体には刺さらない。しかし、その激しさはまさしく弾雨。つづげさまの衝撃に抵抗するうち、シンの魔力は見る間に奪われていった。

このままでは魔力が尽きる――

シンは連撃をあきらめ、とっさにベクトルを反転し、後退した。

「1?」

そこに、水霧スイキが待っていた。

ダイヤモンドダストの輝き。氷の霧の中に、もろに突っ込む。次の瞬間、大気中の水分が一斉に氷結し、シンの全身に真っ白く霜がおりた。

動きが鈍る。肉体が分子レベルで運動を停止しようとしている。

「独逸ドイツの人形よ。おまえは既に、私の《冬》の中にいる」

いろりは猛烈な冷気をまといながら、凍こてつく声でつぶやいた。

「囚獄のうとくごろし——霜曇り」

しゃきんつ、と甲高い音とともに、シンは一瞬で氷結した。

フルーツを入れたゼリーのように、氷塊の中に閉じ込められてしまう。

決まった……かと思われたが、敵もさるもの、それでは終わらなかった。

氷塊の向こう側が弾け飛び、中からシンが飛び出してきた。

氷結した手足を無理やり引き抜く。皮膚がはがれ落ち、真まつ赤な鮮血が氷塊を染める。

だが、シンは怯ひるまない。命あつての物種とばかり、全速力で後退した。

空中に逃れ、林の向こうへ飛ぶ。と、その後ろに煙幕のようなものが立ち込め、視界が

急速に悪くなった。——誰かだれが幻惑の魔術を使ったらしい。

標的が見えないのではロスが多い。いろりはあきらめ、雷真らいしんを振り返った。

「申し訳ありません、雷真殿。仕損じました」

その一部始終を、雷真は絶句したまま見守った。

おそろべき力！ 雷真とシャルが二人がかりで——否、四人がかりで苦戦した相手を、いろりはほぼひとりで退けてしまった。

「いろり、その……助かった。ありが——」

「貴方は一体、何をお考えなのです！」

いきなり叱り飛ばされ、雷真は鼻白んだ。

「側仕えの私にひと言もなく、病室を抜け出すなど！ もっと信頼してください！」

「……愚かった。だが、ひとつ間違ってるぜ」

「間違……？」

「おまえは俺の相棒じゃない。硝子さんの相棒だ」

「——」

「だから、俺は俺の相棒を取り返しに行く」

「ふざけないでください！ そんな体で何をしようというのです！」

ほとんど悲鳴。いろりは真っ青になって、雷真に詰め寄った。

だが、雷真はあくまでも意見を曲げない。

「おまえがシンに手傷を負わせてくれた——今がチャンスなんだ。俺は連中の本陣に乗り

込んで、夜々を取り戻す」

「対決する気ですか!? いけません! それでは戦争が起こると――」

「そうはさせせない。硝子さんにも、迷惑はかけない」

議論が噛み合わない。

言い争っても無駄だと悟ったようだ。いろりは嘆息し、冷ややかに言った。

「……どうしても行くとおっしゃるのですか?」

「ああ」

「ならば、私は硝子の「あいほう」として、役目を果たします」

いろりの銀髪が浮き上がり、さらりと扇形に広がった。

「貴方を氷漬けにしても」

雷真の傷に響くほどに、荒れ狂う殺気と魔力。

次の瞬間、いろりの魔術が発動し、雷真の手足にまわりついた。

3

ランプのあかりがほのかに揺れる、うす暗い部屋の中に、夜々はいた。
ふかふかのベッドの上で、膝をかかえて座っている。

寒はなく、空気はひんやり湿っているが、それでも部屋は快適だった。

ベッドの前には小ぶりのテーブルセット。石造りの壁にはタペストリーが飾ってある。部屋は十二畳ほどの広さで、夜々ひとりでは持て余すほどだ。

冷めてしまった紅茶が、テーブルの上に捨て置かれている。

夜々は自問する。ここにきて、どのくらい時間が経ったのだろうか？

既に時間の感覚がなくなっている。夜々は膝を抱え込み、ひたいを押しつけた。

本当に、これでよかったのだろうか。

雷真が心配しているかもしれない。

ふるふるとかぶりを振って、もう何百回目かの迷いを打ち消す。

（だって、これが……雷真のためだから……！）

雷真のため、雷真のため、と呪文のように繰り返すうち、ぼろつと涙がこぼれた。

夜々がいけないことが、雷真のためになる——そんな現実には、あまりにもつらい。

嗚咽が漏れそうになったとき、不意に扉がノックされた。

「気分はどうだい、月のお人形さん」

返事を持たず、銀髪の乙女が入ってくる。

アリス・バーンスタイン。表向きはアメリカの富豪の娘。その実、バーンスタイン——
ベルンシュタイン家はドイツの名門貴族だそうだ。

「また泣いていたのかい。君は泣き虫だね」

アリスはくすりと笑って、夜々の涙をハンカチでぬぐってくれた。口ぶりは少年のようだが、手つきは女性的で、優しい。

夜々はされるがままになりながら、すがるように訊いた。

「本当に……これが雷真のためなんですよね？」

「そうだよ。君にとっては、残酷なことかもしれないけどね」

アリスは微笑み、ふところから水晶玉を取り出した。

「ほら、これをごらん」

「……雷真」

水晶玉が映し出したのは、雷真の姿だった。

しかも、戦闘中だ！

「先走ったシンが彼に襲いかかったんだよ。でも大丈夫。ほら——」

鋭く迫るシンの蹴りを、氷壁の盾が妨害する。

そして、いろいろの魔術回路（氷面鏡）が猛威をふるう。

圧倒的な破壊力。あたり一帯を自分の支配下におき、あのシンを一瞬で退ける。

いろいろは強かった。夜々よりも、よほど。

「よくわかっただろう？ 彼に相応しいのが誰なのか」

「……はい。……はいっ」

夜々は顔を両手で覆い、泣きじゃくった。

アリスはそんな夜々のとなりに座り、耳元で慰めを言う。

「泣かないで。大丈夫、我が国の技術で君が人間になれば、彼のところに戻るよ。今度は道具としてではなく、人間の女の子としてね」

夜々は顔を伏せたままうなずく。何度も、何度も。

アリスの唇に亀裂のような笑みが浮かんだ。

「君は学院の外に出ることはできず、カリューサイのところに返ることもできない。でも、僕らは君を隠しておいてあげられる。ライシン・アカバネはきつと、雪のお人形と組んで、夜会を勝ち上がることになるだろうね」

「はい……」

「何も心配することはないんだ。今は敵対するフリをしているけど、僕らも雪のお人形と真正面からやる気はない。雪のお人形が相手では、大きな損害が出るからね」

「はい……」

「ライシン・アカバネには、折を見て共闘を持ちかけるつもりさ。彼の目的がマグナスで、^{（魔王）}の座ではないのなら、僕らの目的は共存できる。彼は余計な戦いをしたがない、優しい男だからね。そうだろう？」



「はい……」

夜々はもう、虚ろな返事をするだけだ。

漆黒の瞳は輝きを失い、ただ涙を流すだけの器官に成り果てている。

文字通り操り人形のような姿。アリスは満足げに目を細め、

「君は安心して、ここにいればいい。夜会が終わるまでね」

「はい……ありがとうございます」

夜々が泣きやむまで、アリスは飽きもせず、夜々の涙をぬぐっていた。

4

「水漬け……ってのは、ぞっとしないな」

雷真は苦笑して、手足に下りた霜を舐めた。

いろりは細い眉を吊り上げ、

「ならば、愚かなことはしないでくださいー」

「嫌だね」

いろりの目が光る。刹那、空気中の水分が凍りつき、つららが生まれた。つららは雷真の腕にぶち当たり、数センチほど肉をえぐった。

激痛が脳髄まで駆け上がり、氷の先端に血がにじむ。

つららを雷真に突き刺したまま、いろりは冷たく問いかけた。

「このまま血を凍らせましょうか？ それとも、腕をもぎ取りましょうか？」

冷たい殺意。その凄みは氷点下の空気に似て、伝説の雪女のようにだと思ふ。

やせ我慢して痛みをこらえ、雷真は薄く笑った。

「いいぜ、やれよ」

「腕でも、足でも、持っていけよ」

「俺は這ってでも夜々のところへ行く。俺を止めたければ、腕だの足だの言っでねーで、命を取るんだな」

つららをへし折り、きびすを返す。

「いけません、雷真殿」

表情が壊れる。いろりは雷真にしがみつき、喚願するような声で言った。

「お願いです！ 後生ですから！ どうか、愚かなことは……っ」

「夜々をあきらめろって？」

「そうです」

「じゃあ、どうしておまえは泣いてんだ？」

言われて、はっとする。

いろりは驚いたように頬に触れ、濡れていることに、今さら気付いたようだ。

「私が……あきらめると、言っているんです！」

それでも氣丈に、涙ながらに言葉をつむぐ。

「だから……雷真殿も……あきらめてください……！」

「断る」

「私が代わりになります！ 夜々のぶんまで、務めを果たしますから——」

「よく聞け、いろり。俺の相棒は、世界一の自動人形だ。夜々の代わりなんぞ、この世のどこにも存在しねえ！」

いろりは目を見開き、そして、苦しげに顔をゆがめた。

ぼろぼろと涙をこぼす。魔力が勝手に漏出しているのか、しずくは地に落ちる前に氷となり、氷のように転がった。

「俺は夜々を復讐の道具にしようとした。なくなつたからあきらめる、使えないから捨てる——そんな道具みたいな扱いをしたら、俺は本物の外道だ」

「雷真殿の心根、心ざまには……このいろり、感服いたします……。ですが、この世には、心意気だけでは……どうにもならぬことがあるのです……！」

肩を震わせながら、いろりは振りしほるように言った。

「現に今だって……私がいなければ、雷真殿はやられていたではありませんか。落ちて、死んでいたではありませんか」

「だが、おまえは生きてくれただろ」

「――」

「心意気だけじゃ、確かに何もできはしない。それでも」

ふっと笑って、背後を示す。

「人間を引っ張るのは、その心意気なんだぜ？」

雷真が示した方を振り向いて、いろりは目を丸くした。

そこに、五頭の大形自動人形オートマトンがいた。

先頭のオオカミ犬には、真珠色の髪の子学生が乗っている。

その背後、木立キダチの中には、大樹にもたれた男子学生。

不機嫌な顔で腕組みをしている。彼のかたわらにはひとりの大剣。

ふと、いろりの頭上で羽ばたき音がする。見上げると、銅色銅色の竜が舞い降りてくるところだった。竜には金髪の美少女が乗っている。

三人の人形使いと、その自動人形オートマトンたち。

いろりは驚いて、確かめるように雷真を見た。雷真はまずフレイに顔を向け、

「よう、フレイ。ひょっとして、あんたも付き合ってくれるのか？」

「う……ロキと相談して、決めた」

フレイはこつくりとうなずき、肯定した。

「私にとつても……夜会で生き残るのに、一番いい手段。夜々ちゃんと合流できれば……ライシンと協力して、クロイツリッターに対抗できる」

それから、フレイはこてん、と首を横に倒し、

「う……シャルも、行くの？」

「そのキング・オブ・バカを放し剣いにしたら、野垂れ死にするじゃない」

「つまり、ライシンが心配……」

「ちち違うわー 弱者救済よー 高貴なる者の義務よー」

騒ぐシャルの頭越しに、雷真はロキに声をかける。

「ロキ。おまえもきてくれるんだな？」

「くだらないことを訊くなバカ。……フレイが今、応えただろう」

「いきなりケンカを売るなバカ！ 素直に手伝うて言えー」

「バカは貴様だ。誰が貴様など手伝うか銃弾バカ！」

「黙れ砲弾バカ！」「消えろ軽砲バカ！」「ビーム・バカ！」

「う・る・さ・い！ どっちもバカよー」

シャルが割って入り、ケンカを止める。ふんとそっばを向く雷真とロキ。まるで子どもだ。シグムントがやれやれといったふうのため息をついた。

しかし——たとえケンカをしなくても。

三人が三人とも、協力してくれるのだ。

だから、いろりを振り向いて、雷真は笑った。

「これでわかったろ、いろり。俺を認め、悪行に付き合ってくれる奴らがいる。だから、俺はこの歩みをやめない」

いろりはたまらなくなつたように口を覆った。

「小紫を呼んでくれ。それから、おまえには大事な頼みがある」

「頼み……？」

「一番大事な役目だ。おまえには、最低の悪手を指してもらふのさ」

いろりは涙をぬぐい、不思議そうにまばたきをした。

5

「まったくいいさまだね、シン」

魔術の光に照らされた、窓のない大ホール。

壁には飾り気のない緋色の布が垂らされ、中央には堅実な造りの円卓が置かれている。円卓に座するのは五人の学生。その背後に、それぞれの自動人形が控えている。人形はそろいの甲冑に身を包み、それぞれに武器を携えていた。

あたかも、中世の騎士団が軍議を行っているような風情。

その円卓の手前に、執事ふうの男が引き出されている。

血だらけの両腕は見るからに痛々しい。既に修復が始まっているが、垂れ下がった皮膚、その下にのぞく肉の赤みがグロテスクだ。

円卓の一人——銀髪の美少女アリスがなぶるように続けた。

「負けたフリをしろとは言ったけど、ズタボロにやられるとは言っていないよ」

「面目しだいありません」

「おまえを救い出すのに、余計な魔力を使わされたよ。でも、おかげで雪のお人形の魔術回路——ヒモカガミの威力がわかったね」

上機嫌で奥の男子学生を振り返る。

「君も見ただろ、ローゼンベルク。楽しい宴になりそうだ」

「……貴公はいつもそうだな。その迂闊な気性が、いずれは貴公の身を滅ぼすぞ」

「望むところさ」

「おい、アリス」

ローゼンベルクの正面、赤髪の子学生——シュナイダーが割って入る。主を呼び捨てにされて、シンがにわかに気色いしきばむが、シュナイダーは気にせず、

「作戦開始の見切りが早すぎねーか？ 連中がおまえの読み通りに動かなければ、ここにいない連中がとんだ無駄足だ」

ローゼンベルクの左右で、二人の少女が屈託なく笑った。

「無駄足じゃなくて、無駄死にかもねー」

「かもね、かもねー」

「騒ぐな、（ロゼンベルク）（Ⅱ&Ⅲ）」

はしゃぐ少女たちを退け、ローゼンベルクはアリスを見る。

「（V）の懸念（シン）ももつともだと思おうが？」

「まあ、僕はそれでも楽しめるんだけど……」

シュナイダーが殺気立つ。その視線をさえぎるように、シンが身を乗り出してきた……が、アリスはシンの胸板をぽんと叩いて、押しのけた。

「心配はいらないよ。僕の読みは外れない」

「……主。戦いの前にこれだけは言っておくぜ」

シュナイダーは立ち上がり、燃えるような目をローゼンベルクに向けた。

「昨晚、五人を脱落させたこと、俺は納得しちやいない。捨て石扱いしやがって、おかげ

であいつらは本国送りだ。今度また、あんな真似をしやがったら——」

「どうだというんだ？」

ローゼンベルクもまた、凍てつくような視線をシュナイダーに向けた。

魔力と魔力、眼力と眼力が衝突し、火花を散らす。

空気が焦げそうな緊張感。ローゼンベルクの後ろでは、小柄な騎士がタワーシールドを握り直し、シュナイダーの後ろでは、細身の騎士がクレイモアに手をかけた。

ローゼンベルクは気を張り詰めたまま、押圧された声で、

「そのシン——MK4を（機巧兵士）の完成形と見るなら、我らのMK5はテスト運用中の試作品、（R）たちに持たせたMK3は旧世代の未完成品だ」

淡々と、切って捨てるように言う。

「戦力は指数にして五分の一——捨てる以外にどんな使い道があった？」

「俺が言っているのは人形のことじゃねえ！ 仲間の話をしてるんだ！」

「はい、そこまで」

激昂しかけるシュナイダーを、場違いなほど明るい声が制する。

「よしなよ。『最強の剣』と『最強の盾』が言い争いなんて矛盾だら？ 夫婦喧嘩は尤も

食わない——東洋のことわざだよ」

アリスは麗しい笑みを二人に向け、諭すように言った。

「(V)——シュナイダー。君の懸念はもつとみただけど、的外れだよ。第一に、ここにいない四人は無駄足にはならない」

ほら、と水晶玉を掲げて見せる。

「あー ライシン、きたねー」

「きたね、きたね。(暴竜)に(剣帝)、そして(多重なる騒音)ー」

ツヴァイ、ドライと呼ばれた少女たちがはしゃぐ。その言葉通り、水晶玉には雷真以下、数名の姿が映っていた。

ローゼンベルクの目つきが、ますます鋭くなる。

「(ガルム)は五体……。解せないな。(剣帝)のケルビムも、(暴竜)のシグメントも、姿が見えない」

さすがに目ざとい。水晶玉の映像がスクロールしても、見えるのは(ガルム)というろりだけで、ほかの自動人形がいない。

「ヤエガスミの魔術回路で姿を消したようだね。死角から攻撃するつもりかな」
ふふつとアリスは嬉しそうに笑う。

「シュナイダー君がちよつと脅かしすぎたんじゃない？」

「……おかしかねーか。人形を消せるなら、なぜ、自分たちの姿を消さない？」
「消えてるんだよ」

「——？」

「僕の千里眼は生物に反応するのさ。ある程度なら、魔術を貫通する力もある。だから、消えているはずの彼らをこうして映すことができるわけだけど——」

アリスは肩をすくめ、愉快そうに続けた。

「自動人形は人間よりも反応が弱いんだ。だから、ヤエガスミの効力がまさって、映ってくれないんだね。(ガラム)は改造犬だから映るのさ。(雪)のお人形が見えるのは——案外、僕らの騎士と製法が同じなのかな？」

「……まあいい。つてことは連中、こちらに気取られていることを？」

「気付いてないかもね。奇襲を仕掛けるかい？」

ローゼンベルクを振り向くアリス。

シンも、シュナイダーも、双子も、ローゼンベルクの方をうかがった。

ローゼンベルクはじつと考え込み、やがて静かに応えた。

「それが彼らの策かもしれない。迂闊なことはせず、予定通りに迎え撃つ」

「うんざりするよ、ローゼンベルク。君の弱腰には」

馬鹿にしたように言う。だが、反対はしない。アリスはくすりと笑って、

「それじゃ解散だね。連中は僕の読み通りに動いてくれると思うから——それぞれ、勝手に迎撃してくれ。みんな、せいぜい怪我をしないように」

騎士を引き連れ、ホールを出て行くローゼンベルクとシュナイダー。その後ろを、やはり騎士を従えて、双子が跳ねるようについていく。

後には、アリスとシンだけが残る。

6

本立ちの中は暗闇に沈み、かろうじて、梢の向こうに夕焼けが見えた。

夏が近付き、日はずいぶん長くなっているが、さすがにこの時刻——午後七時すぎ——太陽は西の地平にかかっている。

「ここでいいんだな？」

ランプのあたりで地図を確かめ、雷真が頭上を振り仰いだ。

目の前にあるのは高い壁。その向こうは古い研究棟だ。壁の破れ目からのぞいて見ると、ずいぶん前に放棄されたらしく、全体にコケむし、廃墟となっていた。

「う……………ここ。この裏手」

フレイが先頭に立って歩き出す。その後ろを、雷真、シャル、ロキの順番で歩いて行く。裏門から敷地に入り、焼却炉の方へ。やがて焼却炉の前に出ると、雷真はランプのあたりで知の中を照らして見た。

そこに、鉄格子がはめ込まれた、何かの（入口）があった。

フレイは焼却炉まわりの地面を示し、

「ここにたくさん……足跡が集中してる。夜々ちゃんのおいも、する」

ガルムたちが探し当てた場所、それがここだ。

先ほど雷真のベッドに置いてあった手紙——あれには、この場所が記してあった。朝の一件のあと、フレイは独自に調べておいてくれたのだ。

「ありがとよ、フレイ。あんたのおかげで、こうして襲撃がかけられる」

「う……お互いさま」

フレイは何でもないことのように応えた。いつものように無表情だが、どこか嬉しそうだ。一方、シャルはちよつと不機嫌になって、

「何よ、この先は地下迷宮？　どうなってるかわからないわけ？」

鉄格子を眺める目つきが、妙にびくびくしている。怖いかもしれない。

フレイは少し考え込み、こてん、と首を横に倒した。

「……私たちのこと、バレてもいい？」

「ああ、とつくにバレてると思うが——何をする気だ？」

「こうする……」

フレイは（ガルム）たちを焼却炉の前に整列させ、口笛を吹いた。

「わおおおん……と一斉に遠吠えを始める（ガルム）たち。

それはただの遠吠えではないらしい。魔力が音に溶け込んでいる。小紫の（八重葎）が効果を失い、（ガルム）たちの隠形が解けてしまった。

フレイは目を閉じ、耳に手を当てて、意識を集中している。

数分もそうしていただろうか。フレイは雷真の手から地図を受け取り、さらさらと複雑な図形を描き出した。何かの見取り図のようだ。

「う……中は、こんな感じ」

「中って……この中か？」

こくり、とうなずくフレイ。雷真は舌を巻いた。

「すげーな。どうしてわかったんだ？」

「音の反響で……。私は、この子たちと、つながってるから……」

「つながる……？ そんなことできるのか？」

「バカね、知らないの？」

シャルがますます不機嫌になり、ふてくされたように言った。

「いっぱしの人形使いなら、コントロール中の自動人形と知覚を共有するくらい、わけないわ。もっとも、その間、人形使いは無防備になっちゃうけど」

優れた人形使いと、一部の自動人形には（知覚の共有）が可能なのだ。使い魔と魔術師

の關係性を引き継いでいる。

「へえ……俺はやつたことがなかったな。フレイがいてくれて、助かったぜ」

「どうせ私は役に立たないわよー ふんー」

なぜかシャルが涙ぐむ。わけがわからず、戸惑う雷真の横から、

「無駄話は後にしろ。図の通りなら、出口は二つだ。正面から行くのか？」

見取り図をにらんでいたロキが、刺すような声で言った。

言われて、雷真も見取り図に目を落とす。内部は入り組み、迷路のようになっている。

そして、この焼却炉とは別に、もうひとつ、出入口があるようだった。

「……そうだな。夜々を裏から運び出されちゃ厄介だ。二手に分かれよう。俺は正面から

行く。裏手はロキ、おまえに任せる」

「命令するな。貴様が裏に回れバカ」

「張り合うなバカー」

「う……ケンカは、めー」

「これは私見だが——フレイは裏に回った方がいい」

シャルの頭の上で、シグムントが口を開いた。

年長者の意見には重みがある。ロキと雷真も口論を中断し、振り向いた。

「どうということだ、シグムント？」

「（ガルム）の素敵能力、空間認識能力を見ただろう？ いざというとき——」

「ああ、そうね、逃げられそうになったらすぐにわかるし、奇襲を受ける心配もないわ。裏手を固めるのはフレイの方が安心よ」

シャルが意図を理解し、言葉をつなぐ。雷真はうなずいて、

「じゃ、やっぱりロキも裏手だな」

「勝手に決めるなバカが」

「じゃあ一体どうなさるんですかロキさん？」

「ふん。（多重なる騒音）の脱落はオレにとっても不利になる」

「結局行くんじゃないかー」

「嘖みつくなガキが。オレは謙虚で寛大だが、どうにもガキは気に食わない」

「こいつは……」

わなわなと怒りに震える雷真。その横では、シャルが急にもじもじとして、わざとらしく咳払いをした。

「じゃ、じゃあ、私は正面ね。自動的にそうなるわね。他意はないわね」

そう、こちらはシャルとのコンビだ。雷真は少し気を取り直し、

「アテにしてるぜ、シグムント」

「うむ」

「えっ？ ああ……私は……」

なぜか落ち込むシャルを不審に思いながら、雷真はフレイに声をかける。

「気をつけろよ、フレイ。ロキのバカは殺しても死なねえだろうが、あんたがやられたら元も子もない」

「う……ありがとう」

「誰がバカだバカ。殺しても死なないのは貴様だ脳みそが希ガスバカ」

「いちいちケンカを売るな脳みそが水銀バカ！ 重金屬バカ！」

「ケンカは、めっ」

フレイに仲裁され、お互いに舌打ちをする雷真とロキ。とにもかくにも二手に分かれ、それぞれのルートから突入する運びとなった。

「行くぞ、シャル。おまえもいいな、いろいろ？」

背後に向かって呼びかける。

闇に溶け込み、じっと黙っていた銀髪の乙女は、こくりと素直にうなずいた。

「それじゃ、十字軍の城に、いざ突貫だ」

雷真はにやりと笑って、鉄格子を蹴破った。



Chapter 5 迎撃

1

硝子は安楽椅子いすの上で、煙管きせるを片手に、燃え尽きかけた太陽を眺めていた。その視線をさえぎって、ふわりと窓枠に着地する誰か。

それはひとりの女で、フードつきの黒マントをかぶっていた。

「こんな形で再会しようとはね。ご機嫌よう、花柳斎殿——いや失礼、どう見てもご機嫌斜めといったご様子だな？」

「ええ。たった今、虫の居所きよ所が悪くなったわ」

「私のせいかね？ それは悪いことをした」

「いいえ、あのきかん坊のせいよ。また何かしでかしたのね……」

かつんつ、と腹立たしげに煙管を打つ。灰が飛び出し、床を汚した。

それから、硝子は親しげに微笑み、

「ようこそ、キンバリー先生。挨拶あいさつもなしに、窓から家庭訪問かしら？」



「非礼は詫びよう。こちらにも都合というものがあってね」

「表の連中は何をしていたのかしら」

「そう言つてやるな。彼らは一流の人形使いだよ。ゆえに、超一流の魔術師を相手にするのは、いささか酷というものだ」

「ふふ……。それで、超一流の魔術師さまが、後進国の人形師に何の御用？」

「なに、ご高名な花柳斎殿にお会いしたくてね。表敬訪問だよ」

「こんな時間にアポもなく？ 時と場合をわきまえて欲しいわね」

「もちろん、わきまえているとも」

そう言つた瞬間、キンバリーの背後で爆発が起こつた。

建物が砕け散り、土砂が巻き上がる。火薬の臭いはせず、閃光もなかったので、火薬による爆発ではない。魔術的なものだ！

悲鳴と怒号が交錯する。どうやら、警備の人形使いたちが騒いでいる。

「……何事かしら？」

「なに、私のほかに、ふしつけない連中がやってきたのさ」

「襲撃……。小紫、いらつしゃい！」

部屋の外に向かつて呼びかける……が、反応がない。

怪訝そうな硝子に代わり、キンバリーが窓の外に向かつて呼びかけた。

「きたまえ。ご主人さまがお呼びだぞ」

その声を受け、おずおずと遠慮がちに、飛び上がってくる乙女がいた。

紅葉色の着物をまとい、髪を左右に結っている。普段と違って表情が暗い。だが、それはまぎれもなく小紫の顔だ。

硝子は眼帯越しに乙女を見つめ、盛大なため息をついた。

「何を考えているの……あの坊やは……」

あきれ顔で言い捨てて、眼帯のレンズを操作しつつ、ぐると周囲を見回す。建物の壁越しに、戦況を見ているらしい。

「襲撃者は四人と四体……。あら、軍の人形使いが子ども扱いだわ。宣戦布告もなしに、他国の重要人物を襲うだなんて、無法もいいところ。灰十字の戦士さまは、あわれな人形師を助けてはくださらないのかしら？」

「魔術師協会は中立的な傍観主義者だよ。その目的は監視と観察——あいにく、私にできるのは見ていることだけさ」

キンバリーはそっけない。窮地に陥った硝子を見て、楽しんでいるようでもある。

戦闘音は近付いてきている。すぐ真下で衝撃音が響き、断末魔の悲鳴が聞こえた。またひとり、警護の人形使いが倒されたようだ。

直後、床をぶち抜いて、自動人形が飛び出してきた。

2

雷真はランプの明かりを頼りに、薄暗い通路を歩いていた。

背後にはシャルとシグムント、青い着物の乙女——いろいろの姿がある。

ここはもともと、あまり公にはできない実験をしていたらしい。地下通路は複雑に入り組み、いかにも不気味だ。

「何よ、もう！ 嫌な湿気！」

シャルがぼやく。しきりに髪を気にしている。

「髪もいいけど、足もとに気をつけるよ。尻が仕掛けてあるかもしれない」

「ふん、あされたバカね。その台詞、尻に引つかかる伏線じゃない——」

がくんつ、とシャルの体が沈む。言ったそばから、トラップだ！

落ちていくシャル。予想外に細い手首を、とっさにつかみ、引き上げる。

あばらがきしんで、どっと脂汗が噴き出した。幸い、シャルは無事だ。床板がぐるりと回転し、どんでん返しの要領で、再び閉まる。

何度も使える落とし穴だ。下は不思議と明るく、水面のようなものが見えた。かなりの高さがある。落ち方によっては、命を落とすかもしれない。

シャルはへたり込み、顔面蒼白せうはくになっている。雷真は苦笑して、

「どうやら、おまえの台詞の方が伏線として優秀だったみたいだな」

「……雷真よ。どうやらその台詞こそ、もつとも優秀な伏線だ」

シグムントの言葉と同時に、がこんつ、とどこかで何かが作動した。

何の装置かはすぐにわかった。通路の向こうから、大量の水があふれてくる――

「シャル――」

「任せて――ラスターカノン――」

シグムントがあごを開き、水流に向かって光線を撃つ。

水流は見事に消し飛ばされ、波しぶきのように砕け散った。が、水は途切れず、後から後から押し寄せてきた。水位が上がる――このままでは、おぼれる――

「シャル、床を撃ち抜け――」

シグムントはすぐさま斜め下に首を向けた。シャルも何だかわからないままに、第二射。激しい水流をぶち抜き、床にラスターカノンが放たれた。

雷真の期待通りに穴があく。と同時に、予想外のことが起こった。

大量の水が穴へと落ち込み、一緒に引きずり込まれてしまう。

穴から落下。かなりの高さを落ちて、とほんつ、と水面に突っ込んだ。

先ほど見えた通り、下はプールだった。雷真はあわてて天地を確認する。ほのかな光を

顔りに、上と思われる方向へと泳ぐ。

途中、わたわた暴れるシャルを見つけて、肩に担いだ。必死に水をかき、どうにか水面に顔を出した途端、べきつ、と頬に肘鉄（ひでりてつ）をもらった。

「どこ触ってるのよっ変態！」

「どこって……腹？」

「胸よっー 何よ、このっ……うわーん！」

地雷を踏んでしまったようだ。ほかほかと雷真（かみまこと）を殴り、大暴れするシャル。雷真は放り出した衝動をこらえ、岸を探して泳ぎ出した。

「雷真、こっちだ。人造の鳥がある」

ばさばさとシグムントが飛んできて、道案内をする。シグムントが示す方向、プールの中央に石造りの足場が見えた。

そちらには既に着物の乙女がいて、雷真を引き上げてくれた。

「雷真——殿。大丈夫……ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

本当は着水の衝撃であばらを痛めていたが、顔には出さず、周囲を確認する。

プールはかなりの広さだった。学院の体育館が二つは入る。天井は高く、あいた穴からまだ水が落ちてくる。雷真たちが立つ「島」はプールの端から端まで横断していて、その

中央部にはテニスコート二面ほどの広場があり――

そこに、四つの人影があった。

「落ちてきたねー」

「うん、落ちてきたねー」

「ドジだねー」

「うんうん、ドジだねー」

くすくすと楽しげに笑う少女たち。

そして、槍を構えた、彼女たちの騎士。

「ふん……早速お出ましつてわけね」

シャルはぐつしより濡れたスカートを手でしぼり、強がって言った。

「この私の前に現れたこと、後悔させてやるわー」

3

ずうん、と地響きが伝わってきて、夜々は顔を上げた。

肌にびりびりと、魔力の波長を感じる。間違いない。戦闘が起きている。

そこへ、かちやりと扉を開けて、ノックもなく入ってくる者がいた。

「あ、アリスさん！何かあったんですか？」

「ライシン・アカバネが君に会いにきたんだよ」

夜々は反射的に立ち上がった。しかし、一歩を踏み出すより早く、アリスは夜々の肩をつかみ、押しとどめた。少女とは思えないほど、力が強い。

「おいたはいけないよ。どこに行こうっていうんだい？」

「それは、もちろん、雷真に……」

「会って、どうする？」

「それは……」

「まあ、会わせてあげてもいいけどね」

「本当ですか？」

「きちんとお別れを言う自信があるなら」

夜々は雷に撃たれたように、立ちすくんだ。

ほろり、と頬を涙が伝う。

そう——そうだ。別れると決めたのだ。それが雷真のためだから……。

「泣かないで。これから幸せになろうっていうのに」

幼い子どもを諭すように、ゆつくりと言ひ聞かせる。

「彼がきていることを告げたのは酷だったかな？でも、君を信頼してのことだよ。君の

ように強力な——敵国の——自動人形オートマタを拘束していないのよね」

「……すみません」

「彼が戻ってこいと言ったら、君の心は揺れるだろう。ひょっとしたら、そのままついていってしまうかもしれない。そうしたら、君たちは元通り、不幸になる」

夜々は顔を両手で覆い、しくしくと泣いた。

「心配しなくても、僕らは彼に危害を加えないよ。なぜなら——ライシンが連れているのは、雪のお人形なんだからさ」

やわらかな声音こゝろにくるんで——針のような言葉をささやく。

夜々の表情がゆがむ。アリスは微笑み、さらになぶった。

「もし彼の連れているのが君なら、僕らは容赦なく叩きのめした。君は弱いからね。でも、雪のお人形が相手では、そうはいかない」

「……………」

「彼の要求はわかってる。君を返せと言ってくる」

「……………」

「そう、彼は君を取り戻そうと、敵地のと真ん中に乗り込んできたんだよ。君はまた、彼の命を危険にさらしてしまったようだね？」

また、雷真を危険な目に遭わせてしまった……。

夜々は必死に嗚咽を喚み殺し、震える声でたずねた。

「雷真をつ……雷真を、どう……するんですかっ？」

「悪いようにはしないよ。できれば味方につけたいと、そう思ってる」

「味、方に……？」

「そうだよ。そうすれば、君もまた、彼と一緒にいられるだろう？」

きゅううう、と夜々の瞳孔が開いた。

「一緒に……一緒に……いつしょ……に……」

夜々は何かにとりつかれたかのように、同じ言葉を繰り返した。

アリスは夜々を抱き寄せ、殺し文句をつぶやいた。

「彼は雪のお人形を使つてマグナスを倒し、君は彼の側にいられて、僕らは魔王の座を手に入れる。ほら、みんなが幸せになれるだろう？」

「みんな、が……？」

「そうとも。だから、そのために——我慢できるね、夜々？」

夜々は命のない人形のように表情を失くし、こくり、とうなずいた。

アリスが夜々の部屋を出ると、廊下には険しい顔のシンが待っていた。

アリスは構わず歩き出す。(光明)の魔具に照らされた廊下は明るく、綺麗に掃除され

ている。その主の左斜め後ろを、シンが黙ってついてきた。

「何か言いたそうだね、シン？」

「お嬢さまの根性が腸捻転のごとく曲がりくねっているとは言え、月の人形を口車のみで支配しようなどと……危険です」

「立ち聞きとは感心しないね」

「主の暗愚をいさめるのもバトラーの務めなれば」

「暗愚とは言ってくれるじゃないか。僕みたいな天才をつかまえてさ」

「相変わらず鼻につくほどの自信家ぶりですが、その浅ましい自惚れと、残念な快樂主義のために、祖国を危険にさらすおつもりですか？」

「OK、シン。あとで泣かせるからね」

「今まさに泣きたい気分です」

「やれやれ。君といい、ローゼンベルクといい、どうしてそうも心配性なんだい？」

「お嬢さまが豪胆すぎるのです。もしくはバカであらせられるのです」

「敬語で言うのと五割り増しバカにされた気になるね。何も心配はいらないさ。月の人形は僕が完全に支配しているよ、その心をね」

「ですが、やはり拘束具をつけるべきです。あの部屋は魔術的に遮蔽されていますが、中からの破壊は可能です」

「拘束だって？ 怖じ気づいたのかい、M、K、4？」

振り向いたアリスの瞳には、はつきりと侮蔑の色があった。

「先の戦闘を思い出せよ。君は単独でライシンと《暴竜》を圧倒した。おまけに、今回は僕が君を使うんだよ？ 負ける道理はないね」

「しかし、こちらで戦力を分散しております。その上、お嬢さまの目的は……」

「おや。そんなに気に入らないのかい？ ライシンを手に入れるってことが？」

「はい。バーンスタインの執事は優秀ですが、ただひとつ難をあげるとすれば、いささか信心深いのです。今朝方、死んだ母の夢を見ました」

「信心ね……。最近聞いた中では最高のジョークだよ」

「どうか、ご再考ください。ライシン・アカバネは危険です」

びたり、とアリスは足を止めた。

振り向きざま、魔力を飛ばしつつ、シンの頬を張る。

シンの上体がぐらりと揺れ、赤いアザが浮かび上がった。《強制支配》の応用で、シンは魔術で抵抗することができず、もろに打撃を受けたのだ。

「僕は強欲なんだよ、シン。すべてを手に入れて——そして、すべてを壊したい」
引きちぎるようにシンの頬をつねる。シンの頬が裂け、赤い血がにじんだ。

アリスはシンを突き飛ばし、

「さあ、行くんだ。彼を広間に連れてこい」

「……仰せのままに」

シンは頬から血をしたたらせながら、うやうやしく礼をした。

空中をすべるように飛び、廊下の端まで飛んでいく。

その背中を見送って、アリスはくすくすと笑った。

くすくす、くすくす。

笑いながら歩いていく。その歩みは優雅で、そして、どこか哀しげだった。

4

左右対称の少女二人を見比べ、シャルは声を低くしてつぶやいた。

「ヴァイツゼツカー姉妹だわ。どっちがどっちかわからないムカつくお調子者だけど——

強敵よ。2オン2の野戦演習では、三回生最強のペアだもの」

「三回生って……あれで先輩……なのか？」

思わず、ぶしつけな視線を投げてしまう雷真。

体型といい、仕草といい、表情といい——どう見ても五歳は年下なのだが。

「あーっ、疑ってる！ 私たちを子どもだと思ってる！」

「うん、疑ってるねー 頭にきちゃうねー」

「お姉さんだってとこ見せちゃう？」

「うんうん、見せちゃおうー」

双子はびよんとハイタツチすると、いきなりブラウスをはだけた。

仰天したのはシャルだ。シャルは両手を振り回し、雷真の視界を塞ごうとした。

「なな何やってるのよー 見ないでよ変態ー 痴漢ー」

「変態って何だー 何で俺が痴漢扱いされるんだー」

双子は屈託なく笑って、元通りに服を着た。

「ね？ お姉さんだったでしょ？」

「お色気たっぷりでしょ、でしょ？」

「まあ、シャルよりはある——」

言葉の途中で突き飛ばされ、雷真はプールに叩き込まれた。

文句を言おうとシャルを見ると、うつすら涙ぐんだシャルの目は、その涙が凍らないのが不思議なくらい、絶対零度に冷えきっていた。

雷真はぎこちなく足場に這い上がり、ころころと笑う双子に向き直る。

やはり、どう見ても子どもだ。その上——

先ほどから感覚を研ぎ澄ましているのだが、まるで敵意を感じない。シグメントも同じ

感想を持ったのか、思慮^{しりょ}深げな瞳で、じっと双子を観察している。

「あのさ、あんたたちって……本当は人殺しが好きだったりするの？」

双子はきょとんとして、顔を見合わせた。

「カエルの解剖が好きだったりするか？ 血を見たら興奮したりするの？ 相手の目玉をえぐったり、はらわたを引っ張り出したり、骨をそいだりする趣味が——」

言っているあいだに、双子は青ざめ、がくがくと震え始めた。

「日本人は野蛮だねっ」

「うん、野蛮だね。残酷だねっ」

化け物を見るような視線を向けてくる。雷真は拍子抜けした。

見た目が純粹そうなので、本性は冷酷な殺人鬼——的なオチかと思ったのだが。

この調子なら……話が通じないか？

「なあ、夜々はどこだ？ あんたたちとは戦いたくない。居場所を教えてくれ」

「……教えちゃダメだよね？」

「うん、ダメダメ。ローゼンベルクに怒られちゃうよ——」

双子はそろって雷真をにらみ、

「教えないもん——」

雷真はぼりぼりと頬をかき、濡れてしまった見取り図を掲げた。

「この——番奥の部屋か？」

「教えないもん——」

「じゃあ、こっちの——小部屋につながってる、広間みたいなところか？」

「おっおっ教えないもん——」

非常にわかりやすい反応だった。

「ありがとよ。探す手間が省けたぜ。急ぐぞ、いろり——」

「ダメ——」

双子はあわてて、雷真の前に立ちふさがった。槍を構えた騎士二体が、見事にシンクロした動きで互いの槍を交差し、雷真とバートナーの通路をふさぐ。

「ダメなんだからっ——」

「そうだよっ、ダメだよっ」

双子は何だか泣きそうになっている。

調子が狂う。彼女たちをぶん殴って押し通るのは気がひけた。

「ラチがあかないな……」

「バカね。簡単なことじゃない。——ぶっ殺して通ればいいのよ」

冷やかな声でシャルが言った。目が危険な感じに据わっている。

巨大な魔力が集中する。シグムントがあごを開き、喉の奥が発光した。

「あ、おい、待てー」

「呪うなら自分たちの乳を呪いなさい。ラスターカノンー」

竜のあぎとから放たれた光芒^{こうぼう}。それは光の大砲だ。万物を消滅させる恐るべき光線が、少女二人、人形二体に襲いかかる。

しかし、騎士人形は槍の穂先を交差したまま、よけようもしない。ラスターカノンは一瞬で二体をのみ込む——寸前、Uの字に振り返った。

こちらに飛んでくる。光線はシャルをかすめ、帽子の端を消し飛ばした——きわどい。ほんの少し射線がずれていたら、シャルがこの世から消えていた。

「反射……した……!?」

雷真は目をむいた。どういうことだ。シンにあんな能力はなかった。連中の自動人形^{オートマトン}は、シンの同型機じゃないのか……!?

「(暴竜^{テラウラクス})、びっくりしてるー」

「してるしてるー びびってるー」

「びびびびってないわよー 変なこと言わないでー」

「落ち着けシャルー 今ので理解できないおまえじゃねーだろー」

横から怒鳴ると、シャルはムスツとして口をつぐんだ。

(連中、ほとんど魔力を練らなかった……)

集中もせず、指示も飛ばさず、しかし完全に同調した動きで、二体の自動人形オートマトンを操り、魔術を発動させ、あのラスターカノンを反射しやがった。

「あの二人、性格的にはアレだが、人形使いとしては相当な腕だ。おまけに、おまえらとは相性が悪い。一旦下がつて、対策を練ろうぜ」

「くだらないこと言わないで。私はブリュー家のシャルロットよ。認められたまま、撤退できるわけないでしょう」

シャルの表情には、まだ余裕があつた。ひよつとして、勝算があるのか？

「先に行きなさい。ここは引き受けてあげるわ」

「ああ？ バカ、状況をよく見ろ！ 相手は二人だぞー おまえだけで――」

「バカですつて？ バカですつて？ バカつて言う方がバカなのよー」

「シャルの言う通りだ、雷真」

冷静な声で、シグムントが言つた。

「状況を理解すべきは君だ。こんなところでモタモタしていて、夜々ヤヤを持ち逃げされては困るだろう。それに――今の君は足手まといだ」

雷真は歯噛みした。悔しいが、シグムントの言うことはもつともだ。

「案ずるな。シャルは、君の前では失態ばかりを演じてきたが」

「誰が演じたのよー」

「君が思うよりも、優れた人形使いだ。(十三人)の称号は伊達ではない」

雷真は迷った。確かに、一刻も早く夜々を取り戻したい。それに、一度突入した以上、相手に時間的猶予を与えたくない。

「……わかった、この場は任せる。行くぞ、いろり」

雷真は腰のベルトに手を伸ばし、ポーチから円筒形の物体を抜き出した。

安全ピンを引き抜き、足場に叩きつける。

火薬は若干しけつていたが、しかし、問題なく着火した。もうもうと黒煙が立ちこめ、急速に視界を悪くする。その煙幕にまぎれて、雷真は駆け出した。

「えっなにー!?」

「なになにー!?」

混乱する双子のわきを抜け、まんまと突破に成功する。

(怪我するなよ、シャルー)

雷真は心で念じ、プールを後にした。

5

がさがさと茂みを切り払い、ケルビムが進む。

その後を、ロキとフレイ、五頭の犬たちがついていく。

しばらく行くと、突然木立（こぶ）ちが途切れ、視界が開けた。

そこにあつたのは、古代の円形劇場を思わせる、すり鉢状の広場だった。

本当に劇場……のわけはないから、魔術の実験場か何かだろう。

「あそこが（墓口）か」

ロキの視線の先、劇場の舞台にあたる部分に、ぽっかり穴があいていた。

ロキはふいっと向きを変えると、林の中を歩き出した。

「連中を迎え撃つ。犬どもを散開させる。陣を張るんだ」

「う……あの中、行かないの？」

「取（と）りえて踏み込むことはない。オレもあんたも、野外戦の方が有利だ」

「でも……相手が、出てこなかったら？」

「必ず出てくる」

ロキは断言した。フレイは理解できず、首をひねった。

「少しは頭を使え。オレたちが再び合流すれば、こちらの戦力は跳ね上がる。（剣帝）と」

（暴竜）が分断されている今こそ、連中にとっては好機なんだ」

なるほど、とうなずくフレイ。ロキは表情を曇らせ、

「オレの見立てでは、連中の中でもっとも厄介なのはシン——あいつが本陣でライシンを

連え撃つなら、こつちにはローゼンベルクがやってくる。ローゼンベルクの自動人形にはケルビムの刃が通らないからな」

ふと、ロキの横顔が騒がったような気がして、フレイはどきりとした。

「さあ、わかったら犬どもを散開させろ。本立ちに伏せておくんだ」

言われるまま、指示されたポジションに（ガルム）を伏せる。（ガルム）たちは劇場を取り囲むように、半円形に配置された。

背後を突かれた敵が驚き、劇場を抜けようとしても、最後まで射線が集中し続ける位置取りだ。「音の砲弾」はあまり効果がないようだが、大量に浴びせれば、いつか必ず貫通できる。それは前回、雷真（カミマコ）がシンとの戦いで証明した。

さすがはロキ、頭もいい。フレイの緊張が思わずゆるみかけたとき、

「ぐ……うおおおおっ！」

いきなりロキの首筋が切れ、ぶしゅつと血が噴き出した。

「くそ……こんなときにー」

ロキは必死に左胸を押さえている。

フレイは直感した。心臓が暴れている！

フレイも一度、体験している。一度リミッターが外れてしまうと、血液を、肉を、心臓が強制的に魔力に変換し、無制限に使おうとするのだ。

（そういえば……！）

昼間、シュナイダーにやられたあと、ロキの背中に傷が見えていた。

あれはすり傷などではなく——既にあのとき、心臓が暴走しかけていたのか！

ロキは苦悶の叫びをあげ、地に膝をついた。

ぶしゅ、ぶしゅ、と飛び散る血液。フレイはためらい、そして、決断した。

「ロキ……ごめん！」

口笛を吹いて、〈ガルム〉を召集。

魔力を送り込み、吠え声をあげさせる。吠え声は魔力を運び、空気を振動させる。波形が干渉し、同調した瞬間、ロキがびくびくつと衝撃した。

伸び上がり——そして、倒れる。

鼓膜から音の衝撃を叩き込み、脳を描きおって、気絶させたのだ。

ロキの心臓は暴れるのをやめた。魔力の漏出がやみ、脈拍も落ち着く。

フレイはほっとして、そっと慈しむように、ロキの体をさすった。

痛めた臓はまだ完治していない。あちこちに走る刀傷は、義父ブロンソンにつけられたもの。フレイのため、〈ガルム〉を護るために、負った傷だ。

「ありがとう、ロキ……」

ふと、大たちの耳がピンと立った。

間の悪いことに、誰かの足音が（裏口）から聞こえてくる。

「う……ケルビム」

フレイはさすがのような気分で、ロキの相棒を見上げた。

ケルビムは反応せず、じっと倒れた主を眺めている。

はつきりと稼働レベルが落ちている。全身が無機材料で作られた——禁忌人形ではない

——ケルビムは、使い手の意識がない今、まともに戦える状態ではない。もっと言えば、意思の疎通ができるのかどうかもわからない。

だが、フレイはあきらめず、

「ケルビム。ロキを、お願い……。ロキを、護って」

光点のような瞳がゆっくりと動き、フレイをとらえた。

「Hmm.. Yes.. Yes, I'm ready」

わかってくれたようだ。

フレイは安堵し、そして、気持ちを引き締めた。

羨みを飛び出し、戦略もへったくれもなく、円形劇場へと下りて行く。

ややあって、二人の男子学生、二体の騎士が（裏口）から現れた。

先頭のひとりが何かを空に放り投げる。

それは上空で弾け、滞空し、煌々とあたりを照らし出した。照明弾、もしくは照明効果

のある魔具だろう。こちらも丸見えだが、おかげで、相手の姿が確認できた。

金髪のローゼンベルクと、赤髪の新ナイター。

彼らが連れているのは、小柄でタワーシールドを持った騎士と、長身瘦弱でクレイモアを持った騎士の二体。

ローゼンベルクは探るような視線をフレイに向けた。

「（剣竜）の姿が見えないな？」

「どこかに隠れているのかも知れないぜ」

シュナイダーが油断なく視線を巡らせる。ローゼンベルクはかぶりを振り、

「いや——気配を感じない。そこで貴公に問うが、（多重なる騒音）」

視線が再びフレイをとらえた瞬間、フレイは全身震毛立った。

巨大な魔力を感じる。そう、まるで義父を前にしたような……。

「貴公は迂闊にも、たったひとりで我らに立ち向かおうというのか？」

膝が勝手に震え出す。萎えそうになる気力を振りしほり、フレイは叫んだ。

「みんな！」

がおんつ、と犬たちが一齐に吠え、五発の砲弾を生み出した。

音の振動を魔力によって収束させ、増幅させ、回転させた一撃。それはあたかもドリルのごとき破砕力を持って、敵に向かって突き進む。

五頭が撃ち出した砲弾は互いに共鳴し、融合し、威力を増してぶち当たった。

戦艦の主砲にも匹敵する威力。爆風が劇場の床をえぐり取り、大量の土砂を巻き上げる。立ち込める土煙。しかし、その粉塵が暗れたとき――

その向こうには、タワーシールドを構えた、小柄な騎士がいた。

まったくの、無傷。盾の表面には傷ひとつついていない！

ローゼンベルクはフレイを見下ろし、冷ややかに言った。

「宣戦布告と受け取ったが、いいのか？」

さーっと血の気がひく。とっさに逃げ道を探してしまつて、気付く。

ローゼンベルクの背後、シュナイダーのとなりに――誰もいない！

次の瞬間、がら空きとなったフレイの背中に、クレイモアが振り下ろされた。

6

奥へ、奥へ。ひたすら奥へ。

入り組んだ地下通路を、見取り図を片手に、雷真は駆ける。

いつの間にか照明が増え、ランプがいらなくなっている。

（夜々……待ってろ、夜々！）

目的の広間はもうすぐそこだ。

「……黙つちまつて、どうした、いろり？」

駆けながら背後に呼びかける。だが、返事はない。「暫定」パートナーの乙女は、ただ不安そうに雷真を見上げてきた。

その気持ちだが、雷真には手に取るようにわかった。

雷真は見取り図を押しつけ、彼女の白い手に握らせた。

「いざとなったら、おまえは逃げろ」

「——えっ？」

「おまえだけなら、逃げられるはずだ。魔力は渡しておくから、魔術を使って出口へ向かえ。おまえが本気になれば、連中にも捕まらないだろ——あぶねえ！」

とつさに乙女を抱きかかえ、真横に飛ぶ。

雷真がいたあたりを、突風が吹き抜けた。

もちろん、ただの突風ではない。風を連れて突っ込んできた者がいる。

執事然とした立ち居ふるまい。色つき眼鏡にオールバックという容姿。端整だが、弾猛な鯨を思わせる風貌。それはもちろん——

「よう、シン。前方不注意とは感心しねーな」

「これは失礼。貴方の姿が見えないもので、距離感が狂ったのです」

「嘘つけ。小紫の魔術はとっくに効果が切れてるはずだぜ。俺たちの姿は、もうはっきり見えてるはずだ」

「ええ、確かに見えていますね」

にこりとみせず、真顔で答える。雷真は怒りを通り越し、苦笑してしまった。

シンは雷真と、背後の乙女を見やり、やり返すように言った。

「不法侵入とは感心しませんね、ミスター・アカバネ。ここは学院の建物ですが、現在は立ち入り禁止区域です。おまけに――」

「クロイツリッターの領地だ、つてか？」

「左様で。野の獣でも、縄張りは理解するものですよ」

「悪いな。鍵が開いてたんで、入っちゃった」

雷真もやり返すように言って、それから、シンの背後に目をやった。

「あの綺麗なお嬢さまはどこだ？」

「さて……どこでしょう？」

「もったいぶるなよ。このいろりを相手に、ひとりりでリベンジしてわけでもねーんだろ。人形使いの助けがなけりゃ、あんたにや到底、勝ち目がない」

「十分にありますがとも。私はただ、こう言えばいいのです。『私を破壊すれば、月の人形も破壊されますよ』と」

「……陳腐な台詞せうしやくだな。反吐へどが出るぜ」

「貴方あなたのような手合いには、この手の魯し文句ろしぶんくがもつとも効果的だと、人間性が腐敗したお嬢さまはよくご存知なのです」

確かに、そんな言い方をされてしまつては、雷真かみまことには手も足も出せない。

雷真が遠退えんたいしていると、シンは肩をすくめ、

「選択の余地はありません。ここでやり合つても、私が勝ちます」

「大した自信だな。あんな目に遭わされてよ」

「既にそちらの手の内は読めていますし、先の戦いでは——」

「本気じゃなかった、つてか？」

「おっしやる通りです」

さらりと言う。どうやら本当に、先ほどの戦いでは手加減をしていたようだ。

だとすれば——わざと負けることに、どんな意味があつたのだろうか？

「ですが、ご安心を。今ここで戦うのが得策とも思っていないません」

「相変わらず、回りくどいな」

「ミスター・アカバネ、私とともにきてください。おひとりで結構。後ろの人形は、この際、見逃して差し上げます」

「……ひとつ、教えてくれ」

「何でしょう？」

「夜々は無事なのか」

「はい。丁重におもてなししております」

「嚴重に拘束して、の間違いだろ」

「いいえ。自由にされていますよ」

「何だつて？」

耳を疑う。次に、真偽を疑った。

本当に夜々を……拘束していないのか？

ではなぜ、夜々は逃げない？

(……いや、あり得る)

昼間、林の中で会ったときも、夜々は拘束されてはいなかった。

「やれやれ。一体どんな手品を使つて、夜々の心を縛りやがった？」

「それは、ご自分の胸に訊いてみてはいかがです？」

「――」

「貴方が彼女を使いこなせないこと、それがすべての原因では？」

その瞬間、雷真は理解した。

そうか……そういうことか。

それで、わかる。何もかも、想像できる。

夜々がどうして連中のもとへ行ったのか。

どうして戻ってこないのか。

シンがいろいろにわざと負けたのも。つまりはそのため――

はあああ、と大きなため息をつき、雷真は苦笑した。

「あんたのお嬢さま、確かに性格はアレだが……認めるぜ、すげえ女だ」

「皮肉ですか？」

「いいや、本心だ。夜々を――他人の心を、そんなふう支配しやがるとは」

シャルのときとは逆だ。人質も取らず、夜々自身の心の隙につけ込んだ。

「夜々は拘束されてはいなかった。自分の意志で俺の側を離れていった。あんたがいろいろに負けたフリをしたのも、夜々の心を操るためだ。つまり」

やり場のない怒りをたぎらせ、雷真はシンをにらむ。

「自分じゃ力不足だと、いろいろこそ俺の相棒に相応しいと、思い込ませるために」

これまでの戦い、雷真は常に満身創痍で戦ってきた。

そのことを、夜々はいつも気にしていた。自分自身を責めていた。雷真に何度も詫びた。夜々がついていながら、夜々がついていたのに、そんなふうに。

すべての原因は、俺の弱さ。

「夜々……すまない……」

雷真は深く息をつき、そして、毅然^{きざん}として顔を上げた。

「おまえは帰れ、いらい」

背後から、息をのむ気配が伝わってくる。

「雪月花^{せつげっか}をふたつも盗^{ぬす}られちゃ、俺が硝子^{しょうし}さんに殺されちまう。見逃してくれると言ってるうちに、お前は上に戻るんだ」

「——でも」

「帰れ。ここまで付き合ってくれて、ありがとよ」

乙女はじつと雷真を見つめ、切なげに眉^{まゆ}を寄せた。それから、振り切るようにきびすを返し、俊敏に通路を駆け抜けた。

シンは追撃せず、品定めするように雷真を見つめ、そして手を差し出した。

「では、参りましょう。ミスター・アカバネ」

「ああ」

雷真の腕をつかむと、シンはするすると宙をすべった。極めて安定した飛行。狭い通路を直角に曲がっても、慣性に振り回されることもない。

やがて、シンはホールに飛び込んだ。

「どうぞ、ミスター・アカバネ。ただいま、お茶の用意をします」

乱暴に雷真を放り出し、そっけなく告げる。

雷真はコンクリートに投げ出され、一回転して立ち上がった。咳き込み、あばらの激痛に耐えながら、あたりを見回す。

大ホール。天井が高い。三階ぶんの高さはあるだろう。

壁には緋色の幕が吊るされ、獅子をあしらった騎士団旗が飾られている。

そして、ホールの中央には。

「……手間が省けたぜ。どんな民が待ち構えてるかと思えば、あつさりここまで案内してもらえとはな」

本製の円卓が置かれ、ひとりの少女が座っていた。

ゆっくりとそちらへ歩き出す。シンはかまわず、ホールの外へと出て行った。

こうも簡単に、二人きりにしてくれる。

雷真は円卓を見やり、黒髪乙女に向かって、つぶやいた。

「……探したぜ」

この世の終わりのような、大きな憂いをたたえたその瞳。

漆黒の瞳に雷真を映し、悲しげに雷真を見つめるその姿は――

夜々のものだった。



Chapter 6

すべてが嘘に

1

雷真は黒髪の乙女を見つめ、引き寄せられるように一歩、進む。

乙女はびっくりと身を引き、叫んだ。

「こ、こないでください！」

「そう言うなよ。わざわざ出向いてやったんだぜ。おまえだって、俺と話すために、わざわざ顔を見せてくれたんだろう——」

ふっと笑って、その名を口にする。

「アリス・バーンスタイン」

「雷真、何を言って……？ 夜々が、わからないんですか……？」

「さすがに演技が上手いな。だが、どんなに上手く化けようと、無駄だぜ。俺はさっき嘘を言ったんだ。小紫の（八重霞）は、まだ効果が残ってる」

「——」



「（八重蔵）は標的を指定できる。隠形が効く範囲、効かない相手を指定できるんだよ。小紫に頼んで、夜々は標的に含めてもらった。つまり——本物の夜々には、俺が見えないはずだ」

雷真が認識できている段階で、彼女は夜々ではない。

ふふっと、黒髪の乙女は笑い出した。

「……まさか、そうくるとは思わなかったよ」

はらはらと花びらが散るように、欺瞞が解けて、下から少年の顔がのぞく。

グランビル家の御曹司——執行部議長セドリツク。

「そんな仕込みをしておきながら、どうして僕の誘いに乗ってくれたんだい？」

「本物の夜々と話がしたい」

「それだけのために？ 命知らずだね」

「命は惜しいさ。だが、大人しくしてれば、俺が殺されることはないと踏んだ」

「へえ、どうして？」

「おまえの執事が言ってたことだぜ。赤羽一門の生き残りには価値がある。——神を造るためにな」

ほう、と大げさに驚いた顔をするセドリツク。

互いの服を探り合うような沈黙。緊張が自然と高まり、空気が張り詰める。

そこへ、無粋な足音が響く。シンがティーセットを持って戻ってきたのだ。

セドリツクは笑って、雷真を円卓に誘った。

「お茶に付き合いなよ。君とは一度、ゆつくり話がしたかったんだ」

「その顔をやめて、あの綺麗な顔を見せてくれるなら、考えてもいいぜ？」

「ふふっ、色男だね。色魔というのは本当なのかい？」

「そんな嘘は嘘だからな？　ほとんど風評被害だからな？」

「じゃあ、単にこの顔がお気に召さないのかな？」

「それはおまえの顔じゃねえだろ」

「……どっちが僕の顔かなんて、もうわからないさ。誰にも」

鬚りのある笑み。軽くあしらうような言葉だったが、セドリツクの姿はたちまち崩れ、

あの銀髪の美少女へと変貌した。

円卓に落ち着き、手招きをする。

雷真は深呼吸して、ざわめく心をおし殺した。

シャルやフレイのことが心配だ。

ここにローゼンベルクはいない。おそらく、フレイの方に向かったはず。こうしている

あいだにも、フレイやシャルが、やられているかもしれない。

だが、アリスの誘いは断れない。会話の流れ次第では、敵の正体に迫ることができる。

シャルとアンリを本当の意味で救うことも、できるかもしれない。

だから、大人しく席につく。アリスはにこりと微笑み、

「光栄だね。嬉しいよ、その気になってくれて」

「おまえが譲歩したからな」

「じゃあ、こちらもサービスだ。面白いことを教えてあげるよ。グランビルのお坊ちゃまのことだけど——彼はとくに消えちゃってるんだよ。この世から」

「何だって？ セドリツクは確か、軟禁を解かれたって……」

「それが本物だと、どうしてわかるんだい？」

雷真の反応を楽しむように、アリスは焦らすような問を取った。シンがカップに紅茶を注ぐのを待ち、ひと口味わってから、ようやく続きを言う。

「僕はね、アリス・バーンスタインであると同時に、セドリツク・グランビルでもあったんだ。アリスが入学してから、ずっとね」

「……ずっと、だと？」

「いやあ、大変だったよ。二人ぶんのカリキュラムをこなすのは。出席は替え玉を使うとしても、定期考査があるしね。ただでさえ、この学院には聡い連中が多い。教授連中に感づかれたらおしまいだしさ」

にこにこ笑いながら、楽しげに語る。

「アリスは病弱だ……っていう設定を生かして、テストは追試を活用したよ。シンはグランビルの執事で通してたから、アリスの方では接触できなくて——」

「セドリツクは死んだと言ったな？ なぜ、偽者が必要だ？」

「僕が偽者だとバレたからさ。キングスフォート——つまり英国にね」

キングスフォート。また、その名が出た。つくづく、縁がある。

「前回の一件で、僕らがグランビルを掌握していることがバレちゃった。だから、彼らは彼らで、セドリツクの偽者を用意したんだ。どっちが本物か、って話になると面倒だから、僕らはセドリツクの仮面をあきらめた」

聞いているうちに、雷真は混乱してきた。

わけがわからない。そんな手の込んだ真似をして、一体、何がしたいのか。こいつらの目的は何だ。いや、それを言うなら、キングスフォートの目的もわからない。

「どういふことだ。じゃあ、おまえは何で、シャルをたきつけて……」

「順を追って説明してあげるよ。まず、グランビルはキングスフォートと並ぶ英国の重鎮だ。政敵になったこともあるけど、今は一味同心。盟友の間柄さ」

「じゃあ、セドリツクも魔術喰い騒動に……？」

「察しがいいね。そう、加担していた。何と言っても執行部の議長だしね。風紀委主幹と執行部議長が組めば、いろいろと工作ができるだろう？」

「反吐が出るぜ」

「僕はグランビルのセドリツクとして、途中からフェリクスを手伝った」

「だが、おまえは本物のセドリツクじゃない」

「そう、僕は獅子身中の虫だ。協力するふりをして、最後にはキングスフォートとグランビル、そして学院理事会を仲違いさせるのが目的だった」

「学院と……仲違い？」

「知ってるんだろ？ キングスフォートは学院長に近付き、懐柔しようとしていた。あれの共同研究をエサに接近しようとしてたんだ」

アリスはすうっと目を細め、謎かけのようにささやいた。

「でも、学院と英国の接近を快く思わない連中もいるんだよ。世界には、ね」

「……独逸帝国」

「そうとも！」

嬉しそうに笑う。アリスはカップを置き、両手を組んで、あごをのせた。

「学院と英国を切り離す好機さ。グランビルのお坊ちゃまが両者の秘密協定をブチ壊し、かつあんなものを見せつければ、混乱は決定的だよ。グランビルとキングスフォートもおかしくなるし、学院と英国にも不審が芽生える」

「……あんなものって、何だ？」

アリスはにやりとして、答える代わりに、こう訊いた。

「魔術師最大の禁忌が何か、知っているかい？」

「禁忌人形？」

「いや。人間を造ることだよ」

「――」

「それは神の領域に踏み込むことさ。当然、バチカンも黙っちゃいない。でも、魔術師という連中は進歩という幻想にとりつかれていて、真理の探究をやめることができないんだ。困ったことにね」

そうだ。フレイとロキを造った男、Dワークス社長ブロンソンも言っていた。

人類とは後退や停滞をよしとせず、進み続けるもので――

その歩みに、魔術師は寄与しなくてはならないのだと。

事実、人間の知的好奇心には際限がない。

それは人類の文明を豊かにする。人間の暮らしぶりは、百年前よりよほどよくなった。

鉄道が、蒸気機関が、機巧魔術が、人間の生活を高度に発展させてきた。

「英国も、ドイツも、君の祖国も、この学院も、魔術師たちは今、こぞって人間を造ろうとしてる。みんな、周囲に先駆けて、神の御業を得たいんだよ」

「バカげてる。何でそんな……」

「ロマンだよ、ロマン」

甘えるような声。雷真ライジンの鼻先をくすぐるような、蠱惑こわく的な笑みを見せる。

「もっと現実的な言い方をしようか？ 機巧の人間はなみの兵士をはるかに超える武器となる。シンの戦いぶりを見ただろう？」

「……確かに」

「そして、ここが禁忌人形との決定的な違いだけだね。神性機巧カインは、自動人形オートマトンを使うことができるんだよ」

つまり、魔術師になれる。

それでは、本当に、本物の――

「そう、彼らは自動人形オートマトンであると同時に、本物の人間なんだ。神性機巧がふたつあれば、お互いを使い合うことができる。この意義がわかるかい？」

「いや……」

「〔魔活性不協和の原理〕を超越する」

「――」

「……かもしれない、って話さ。少なくとも、魔術の共鳴、共振効果は期待できる。それによる新たな回路の開発も。新戦術の発案も。魔術師たちが解決できていない、あまたの問題を一挙に解決できるかもしれない。機巧魔術のビッグバンだよ。ルネッサンスだよ。」

魔術師なら、目の色を変えて当然さ」

びし、と雷真を指差し、アリスは自信たっぷりに言い放った。

「断言しよう。完全な神性機巧を造った国家が、きたる世界大戦を勝ち抜き、次の千年紀に君臨する」

雷真は衝撃を受け、しばし、言葉を失った。

ただ人造の人間を造るというだけではなかった。

マシンドールとやらの開発には、それほど大きな意味があったのか。

アリスはひとごとのような口調で、話を続けた。

「ドイツの研究は相当な段階まで進んでいる。その成果をちらつかされて、学院理事会は揺れている。ここでドイツが共同研究を持ちかければ、学院は英国と手を切って、ドイツの側につく……というわけさ」

「バカな。独逸——おまえたちは学院長の命を組^くったんだぞ。自分が暗殺されかけたつてのに、学院長が手を組むはず……」

「組むさ。そういう男だよ、エドワード・ラザフォードはね。利用価値があると踏めば、私情なんかこれっぽっちも挟まない」

「……詳しいんだな」

「おや、口がすべったかな」

アリスは意味深な笑みを浮かべ、再びカップを手を取った。

そんなアリスに、雷真は皮肉っぽく笑いかける。

「それで？ ペラペラとこ高説いたみいるが、そんなことを俺にバラしちまってるのか。言つとくが、俺は一応、日本軍の密偵だぜ？」

「知ってるよ」

「……何が目的だ」

「僕はね。欲しいものがあると、どうしても手に入れたくなっちゃうんだ」

アリスは円卓に身を乗り出し、キスができそうなくらい接近した。

その動作が本当に自然だったので、警戒する間もなかった。

背後のシンが緊張したおかげで、ようやく、自分の無警戒に気付いたほどだ。

甘い香りが肺に満ち、雷真は思わず息を止めた。もう数秒、この空気を吸っていたら、この乙女に魅了されてしまいそうな気がした。

至近距離から雷真の瞳をのぞき込み、アリスは言った。

「僕のものになれ、ライシン」

「……なに？」

「君が欲しいと言ってるんだよ」

——アカバネの血が欲しいという、あれか？

硝子^{しよう子}もまた、魔術マテリアルとして、雷真の命を欲しがっている。

「違うよ。そうじゃない」

雷真の思考を読み取ったかのように、アリスは笑って首を振る。

「君のすべてが欲しいのさ。戦士としての力も。魔術の才も。マテリアルとしての体も。男としての体も。そして、君の心も」

雷真はすうつと息を吸い込み、

「断る」

「おや、つれないね。僕のものになれば、マグナスに勝てるかも——」

「俺は夜々^{やや}を取り戻し、仲間と帰る」

ぶつと、噴き出すアリス。笑いながら、水晶玉を取り出す。

「ほら、ご覧よ。お仲間はこちらなありません」

水晶玉に映ったものを見て、雷真は愕然^{ひくぜん}とした。

2

「ラストセイバー！」

馬ほどの大きさのシグムントにまたがり、シャルは宙を飛んでいる。空中を高速で移動

しながら、魔力を練り上げ、魔術回路（魔剣）を起動した。

びーっ、と布を引き裂くような音を立てて、光の剣が伸びる。

光の剣は二体の騎士の真横から、鎌のようにすべる。しかし、騎士二体は即座にこちらを振り向き、互いの槍を交差させた。

光が反射し、シグムントの肩をかする。あやうくシャルが斬られるところだ。

シグムントは失速し、ふらふらと落ちて、どうにか足場に着地した。

ヴァイツェッカー姉妹が喜び、びょんびょん跳ねる。

「墜落したねー」

「したね、したねー」

「今度は、こっちからいく？」

「いこう、いこうー」

二人の意志を受け、騎士二体が攻撃に移った。

圧倒的な加速。一瞬でトップスピードに到達。完璧にユニゾンした動きで、左右に分かれ、水上を飛んで、両サイドから襲いかかってくる。

どちらに反応しても、もう一方の槍で串刺しにされる！

手綱を引くようなイメージ。シャルはシグムントに魔力を送り、跳躍させた。

空中に逃れる。だが、もちろん、そんなものでは振り切れない。

瞬時にバクトルを真上に変更、追いつがってくる騎士二体。

繰り出される槍をぎりぎりかわし、苦しい空中戦を展開する。何度目かに回避を失敗、シグムントの腹が裂け、血が飛んだ。

それた槍がブールの壁に当たり、巨大な亀裂が蜘蛛の巣状に走った。

分厚い石壁が砕け、大穴がうがたれる。

槍が壁を砕くだなんてー驚愕しつつも回避を続けるシャル。緩急自在の敵の動きに、翻弄されながらも、しかしきわどく対応する。

（これも経験……ってやつねー）

シンとの戦いを経ていなければ、最初の一撃でやられていただろう。

大振りの一撃を回避した瞬間、二体の騎士が離れた。好機だ！

「ラストーカノン！」

光の大砲が片方の騎士をとらえる。騎士は光をもろに浴び――

（――受け止めた!?）

光は槍の穂先で止まった。それ以上、一インチも進まない！

そうして光を溜めているあいだに、もう一体の騎士が合流した。

槍を交差した瞬間、ラストーカノンが放たれた。あちらから、こちらに。

光の大砲がシャルをのみ込む前に、シグムントが高度を落としてシャルをかばった。光

は翼にぶち当たり、一枚を根元から消し飛ばす。

虎の吠え声のような叫びをあげ、今度こそ、シグムントは墜落した。

3

クレイモアの斬撃が、フレイの背中に振り下ろされる。

その瞬間、フレイの背中に、どすんっと衝撃がきた。

グレートデンがタツクルをして、フレイを前に突き飛ばしたのだ。

前方の地面に投げ出されるフレイ。おかげでフレイは無事だった。しかし――

背面装甲がたやすく裂かれ、グレートデンの肉がざっくり切れる。

「ルビー」

頬に愛犬の血がかかり、フレイは錯乱しそうになった。

グレートデンはよろけながらも、どうにか立ち上がった。今の一撃は、まだしも浅い。

フレイを殺すわけにはいかないのです、浅く切ったのだらう。

「今のはあんたの操作じゃないな。自ら主をかばうとは、なかなかの忠義だ」

シュナイダーが感心したように言う。その口調は好意的ですらあった……が、彼と目が

合った途端、フレイは今さらのように恐怖にすくんだ。

このシュナイダーは、あのロキを一時で倒している。

彼の騎士はクレイモアを構え、次の指令を待っていた。ケルビムのブレードをたやすく切った剣。当然、〈ガルム〉は楽に両断できる。

先ほど、一瞬で背後に回られた。あの機動性はシンにそっくりだ。同じ魔術回路を搭載しているのだろう。だが、それだけではない——そう、シンを上回る攻撃能力を感じる。

シンは、ケルビムのブレードを折りはしなかった！

ぶるぶるとかぶりを振り、自分を奮い立たせるフレイ。

「う、みんなー」

フレイの号令で〈ガルム〉が集まり、魔力を溜める。

まずはシュナイダーの騎士を狙い——一斉に吠えた。

吠え声は砲弾となり、石造りの床を砕きながら、騎士に向かって殺到した。砲弾は途中で重なり合い、さらに破壊力を増して、突き進む！

そこへ、ローゼンベルクの騎士がすべり込んできた。タワーシールドで〈音の砲弾〉を受ける。それがただの鉄の板なら、簡単に破碎できただろうが——

やはり、盾はびくともしない。この盾は昼間、ケルビムの斬撃に耐え、刃をつぶした。

その防御能力は、やはりシンにまさっている。

タワーシールドがフレイの視界をさえぎり、シュナイダーの騎士を見失った。

「迂闊^{うかつ}だな」

ローゼンベルクが憐れむようにつぶやく。その瞬間、ラビの背後にシュナイダーの騎士が出現した。

フレイが悲鳴をあげる間もなく、クレイモアがラビを斬り裂いた。血をまいて転がるラビ。

かろうじて息があるのか、だらりと舌を垂らし、あえぐ。

広がる血だまりがフレイの心を凍りつかせ、思考を麻痺^{まいひ}させた。

絶望し、へたり込むフレイの前で、シュナイダーが口を開いた。

「どうする、主^{へい}？」

ローゼンベルクは悲慮^{ひりょ}深げにあたりを見回し、慎重な決断を下した。

「まずは抵抗する気力を奪おう。一匹ずつとどめを刺せ」

「わかった」

「ラビっー だめ……やめてーっー」

動けないラビに、無情にも、必殺の刃が浴びせられる――

水晶玉に映ったのは、シャルとフレイの姿だった。

どちらも危機的状況だ。騎士型自動人形に追い詰められている。

（くそつたれー あいつは何をしてるんだ……!?）

「ああ、（剣帝）なら、こつちだよ」

雷真の思考を察して、アリスが映像を切り替えてくれる。

ロキは林の中に倒れていた。背中が裂け、血がにじんでいる。

背中に氷を落とされたような気がする。あいつがやられた……!?

「そしてもうひとつ楽しいニュースを。カリューサイのところに四人を差し向けてある。

指揮を執っているのは（Ⅳ）——四番目に強い男さ」

「——四人？」

「機巧兵士四体を連れてね。君が連れてきた（雪）のお人形はまだ戻っていない。つま

り、カリューサイはもう僕のもの。君が帰る場所なんて、どこにもないんだよ」

「バカな！ 学生を襲撃に使ったのか？」

「ご心配には及ばないよ。こう何度もゲートをすり抜けられたんじゃ、学院のメンツは丸つぶれだからね。確たる証拠が出てくるまでは、通過されたことを認めやしない。学生を使うからこそ、完全犯罪が可能だと思わないかい？」

アリスは勝ち誇り、楽しげに笑い出した。

「仲間はやられ、帰る場所もない。君の言ったことはすべて、嘘になったね。さあ、状況がのみ込めたなら、大人しく僕のものになりなよ」

「断る」

「……この期に及んで、まだ無駄な強情を張るのかい？」

「赤羽一門は血に汚れた戦争屋だが——ふたつところには仕えない」

「やれやれ……サムライってやつは面倒だね」

アリスは席に戻り、何か思いついたのか、小悪魔的な含み笑いをした。

「じゃあ、体に訊いてみよう」

刹那、シンが動いた。

本来に、一瞬だった。手負いの身では反応することもできない。

両腕をひねり上げられる。羽を広げたニワトリのような姿勢。シンのポケットから鎖が飛び出し、蛇のようにまとわりついて、雷真の足を拘束した。念動か何かだ。

「……何をする気だ？」

「いいことを♡」

言うが早いのか、アリスはいそいそと円卓の下に潜り込んだ。

シンの腕に不自然な力がこもる。怒っている……ようだ。

何だ？　と思った次の瞬間、妙な感覚が股間を襲った。



「な——っ!?」

あろうことか、アリスの頭が、両膝のあいだから出現したのだ。

銀髪がふとももに落ち、布越しにもどかしい感觸を伝えてくる。甘ったるい香りは香油のものだろう。内ももをまさぐられ、ぞくぞくとあやうい快感が腰に抜ける。指先は少しずつ、際どい部分に近付いてきて——

「こ、こら—— やめろ—— 何しやる——」

アリスは小首を傾げ、妖艶な流し目をくれた。

「何って……恋人同士の語らいをね？」

「体で語るな！ まずは言葉で語れ——」

「君が強情だから、力ずくで僕のものにしようと思ってさ」

「おまえは夜々か—— やめろ痴女——」

かちやかちやと雷真のベルトを外しにかかるアリス。雷真はあせった。まずい。このままではいろいろとまずい……。

「や、やめろ……、この……うっ！」

そのとき、びしっ、と空気がひび割れるような音がした。

続いて、ごごご、と謎の地震が発生する。

おどろおどろしい妖気が漂い、気温が三度も下がったような気がした。

「アリスさん……。雷真に何をしようとしてるんですか……?」

冷え冷えとした声。ホールの入り口に、地震の発生源が立っていた。

悪霊も即座に退散したくなるような、怨霊じみた表情だ。

アリスがため息をつく。息がかかって、雷真の腰がびくびくつと震えた。

「いけない子だね、夜々。部屋で待ってる約束だっただろう?」

「だって……っ! 雷真に変なことをする気配が……っ!」

「……やれやれ。雪月花のセンサーはどうなってるんだらうね?」

アリスは苦笑し、ちよつと同情のこもった目で雷真を見た。

「夜々!」

雷真は拘束を振りほどこうとしたが、もちろんシンはびくともしない。

無理に力を込めると、雷真の肩がはきばきと嫌な音を立てた。

「待った待った。無理をしないでよ、ライシン。もっと平和的にいこう」

「夜々と話をさせろ!」

「何を話そうって言うんだい?」

「……俺がおまえのものになるかどうか、夜々と話して決める」

苦しまぎれの台詞。だが、アリスは面白そうに目を輝かせた。

「それでもし、おかしい結論が出たら——戦争になるよ?」

「おまえらこそ、戦争を起こすつもりか。硝子さんまで襲いやがって」

「僕はそうなくてもいいけどね」

「――」

「でも、僕らにそのつもりはない。日本軍が矛を収めてくれれば、問題なしさ。十分な対価を支払うつもりだし、そこは政治屋が上手くやってくれる」

麗しい微笑を浮かべ、雷真の胸に指先を当てる。

「だから、あとは君しだいだ。君があくまで抵抗するかどうか」

雷真の身動きを精神的にも肉体的にも封じた――この状況で、それを言うか。

雷真は怒りを通り越して、笑いたくなった。

この女には、下手な嘘など無意味だ。だから、思ったままを言う。

「世界大戦とやらの引き金を引く度胸は、俺にはない」

「そうだろうとも」

「……夜々と話をさせてくれ」

「いいよ。放してやれ、シン」

「いけません、お嬢さま――この男を自由にするなど――」

あからさまな狼狽。シンが力んだせいで、雷真の肩が悲鳴をあげた。

「僕がいいと言ったんだよ？」

ごうつ、と音を立てて、アリスの肩から、瞳から、魔力の炎が噴き上がった。

ロキやマグナス、学院長を前にしたような威圧感を感じる。

雷真の首筋に鳥肌が立つ。この女……ただ者じゃない！

「カリューサイの方も終わった頃だし、彼の仲間も全滅する頃だ。万一、彼が月の人形を取り戻したとしても、もうどうすることもできないさ」

雷真の耳には、不思議と、残念そうに聞こえた。

「それでも彼が歯向かうなら、僕らが叩きのめせばいい。それとも、僕がついているのに、人形一体に負けるつもりかい、おまえは？」

「いえ……それは……」

「いいかい、シン。世の中にはね、二種類の人間がいるんだよ。我欲のために戦争を起こせる人間と、そうじゃないヘタレがね」

シンは奥歯を噛み、ややあつて、未練そうに手を放した。

腹いせのような蹴りで鎖を断ち切る。加重がかかって足首が折れそうになったが、雷真は不満を言わず、よろけながら椅子を離れた。

シンとアリスの横をすり抜け、今度こそ、夜々のもとへ向かう。

夜々の焦点は合っていない。雷真は魔力を高め、小紫の（八重霞）を解除した。

ようやく、夜々の瞳が雷真をとらえた——瞬間。

「雷真は馬鹿ですー」

いきなり叱られた。雷真はあわてて、

「いや、落ち着けよ？ さっきのはあの痴女が勝手にしたことだからな？
俺の意志じゃないからな——」

「どうして、きたんですか……っ？」

ひくつとしゃくり上げ、ぼろぼろと大粒の涙をこぼす。

「こんなところに……ひとりでー また、怪我して！」

もう言葉にならない。わーん、と夜々は声をあげて泣き出した。

「……悲かった」

雷真は夜々を引き寄せ、揺れる肩を抱え込んだ。

「でも、どうしても——おまえを、あきらめられなかった」

「……………」

「どうして、黙っていなくなったんだ？」

「だって……っ」

夜々は雷真の胸に顔をうずめ、たまらなくなったように言った。

「夜々なんかより、いろいろ姉さまの方が……雷真の、役に立つから……っ」

「そんなことはない。おまえは俺の大事な相棒だ」

「だって、雷真の傷が治らないのは、夜々のせいなんでしょうっ？」

「え……？」

「夜々が近くにいると、雷真の（命）を吸い取ってしまうんでしょうっ？」

冷たい水を頭からぶっかけられたような気がした。

突拍子もない夜々の言葉。おそらくはアリスが吹き込んだことなのだろうが……あまりにも、腑に落ちてしまった。

確かに、このところ、傷の治りが遅い。

「学院にきてすぐ、硝子（しょうこ）が夜々にしたのは、そういうことなんでしょう……!？」

夜々はむせび泣く。自らを責め、呪うように。

そう——魔術喰いとの戦闘を見越して、硝子は夜々に何かした。

夜々は目を回して倒れた。あのときから、夜々の体には異変が起きている。

それまでの二年間、一度も見たことがない——夜々の角。

夜々が警備の拘束具を断ち切ったときも、同じ角が出ていたという。

雪月花（せつげっか）の三姉妹には、雷真もまだ知らない秘密が隠されている。

「……おまえが俺の命を奪うって？」

雷真はため息をついて、そっと、夜々を胸から引き離した。

「違う——」

夜々は目をまん丸にして、雷真を見返した。

「おまえが何度、俺の命を救ってくれた？」

「――」

「俺を護ってくれたのは、いつも夜々——おまえだ」

強く訴える。通じろと念じながら。

「俺の相棒はおまえだけだ。だから、俺を捨てないでくれ」

利那、夜々の表情が崩れた。

くしゃつと顔をゆがめ、また涙をあふれさせる。

ほろほろ。ほろほろ。

やがて、夜々は泣き笑いのような表情で、微笑んだ。

「捨てないで……なんて、かつこ悪いです……雷真」

「知ってるよ」

夜々はそつと遠慮がちに、雷真の手に自分の手を重ねた。

ばんばん、とわざとらしく、アリスが拍手をした。

「さすがだね。さすが色男。うわき通り、女心を掌握するのが上手い」

「雷真……っ、そんなうわきが……っ！」「ごっこ」。

「いってえ！ 落ち着け夜々！ 手がつぶれる！」

あわてて振りほどく。いいシーンが台なした。

「伸直りも済んだことだし、これからは二人仲よく、僕に力を貸してもらうよ」

雷真は皮肉っぽく笑って、

「夜々を取り戻したのに、俺が言いなりになると思うか？」

「首輪をつけるよ。君はシャルロットほど従順じゃなさそうだから、特製の首輪をつける予定さ。逆らったら『ドカン』ってやつをね」

「そんなのはごめんだ。俺たちはもう帰らせてもらう」

「……聞き間違いかな？」

空気がびりびりと震える。

アリスが発散する魔力が、空気を振動させている。シンが殺気を漂わせ、ゆっくりと主の前に出た。そのシンもまた、猛烈な魔力を発散している。

二人ぶんの魔力は圧倒的だ。雷真のあばらや肩が、しくしくと痛む。

シンは単体でもあの性能。アリスという人形使いを得た今、シンの戦闘能力がどれだけ向上しているのか。考えただけでも恐ろしい。

だが、雷真は怯まず、

「独逸に寝返るのも、おまえたちに与するものも、俺はごめんだ」

「……あきれたね。そんなわがままが通ると思うのかい？」

「通すさ。俺は夜々と帰る。おまえたちをぶちのめしてでも」

「戦争を起こすつもりかい？」

「そうはさせない」

「仲間たちが全滅するよ？」

「そうはならない」

「カリューサイを見殺しにするの？」

「もちろん、しない」

「子どもだね！ だだっ子だー」

「その上、脳みそが希ガスのバカなのさ」

雷真は夜々の手をつかみ、もう片方の手で、アリスの脚元を示した。

「さっきの水晶玉で見てみろよ。おまえの言葉はすべて、嘘になる」

アリスはうす笑いを浮かべたまま、無言で水晶玉を取り出し、魔力を込めた。一瞬後、映し出されたものを見て、さしものアリスも顔色を変えた。

5

硝子の部屋に飛び込んできたのは、騎士のような自動人形だった。

黒い十字の飾り布。甲冑をまとい、ハンマーを携えている。

騎士はハンマーを振りかぶり、硝子の脳天めがけて振り下ろした。

「主——」

紅葉色の着物の乙女が、主を案じて叫ぶ。

ハンマーの一撃を、硝子はよけようとしめない。

がいんっ、と激突。ハンマーは硝子の頭を砕く——前に、何かに阻まれた。

硝子の頭を護っていたのは、六角形の赤い光。魔術による防護壁だ。

防護壁はハンマーを受け止め、たわみ、弾き飛ばした。

騎士がハンマーごと、窓から外へと放り出される。

「主——ご無事ですか——」

紅葉色の着物をひるがえし、乙女が硝子のもとへ飛ぶ。

硝子はうなずいて乙女に応え、それから、キンバリーに笑みを向けた。

「見ているだけではなかったの？」

「そこは礼を言うところだろう？」

キンバリーは苦笑しつつ、空中の防護壁をかき消した。

「私にできるのは見ていることだけだが——当然、自衛はさせてもらう」再度、外から飛び込んでくる騎士。キンバリーは動じもせず、

「姿を見せてはどうだね、（粉砕者）^{ナックワッペン} シュミット」

ややあつて、騎士の背後、窓の向こうの桜の枝に、人形使いが現れた。

「よく俺だとわかりましたね、キンバリー先生」

褐色の肌の少年。制服こそ着ていないが、学生のようなだ。

「わかるとも。君の魔力は出力こそ見事だが、波形が乱れる癖がある。ノイズが混じっているのさ。直せと忠告したはずだがね」

「すみませんね。そんな癖があらうとなかろうと、俺は十分、無敵なもので」

「花梅斎殿は私と面談中なのだ。君には夜会もあるだろう。帰りたまえ」

「それはできませんね」

「できない？」

愉悦にゆがんだ笑みを見せ、少年は不遜に言い放った。

「見られてしまったからには、貴女もろとも排除しなくては」

「できるかね？ 不出来な教え子が」

少年は応えず、へらへらと笑っていた。相当な自信があるようだ。

キンバリーはかぶりを振った。

「バカに刃物とはよく言ったものだ。切れ味のいいナイフを手に入れて、強くなったと勘違いする。私は体罰は好かないが、君には仕置が必要だな。自動人形を学院の敷地外に

持ち出した上、教授に対して不敬の極み。あまつさえ、殺傷しようとは」

「殺傷されたくなければ、大人しく捕まってください。ここ警備は間もなく沈黙します。何せ俺はクロイツリッターの（N）——機巧兵士がついている。自動人形も連れていない貴女には、万に一つも勝ち目はありませんよ」

「あら、それじゃあ先生」

それまで黙っていた硝子が、くすりと笑って、横から口を出した。

「うちの子を貸してあげるわ」

硝子が乙女に視線を投げる。乙女はうなずき、キンバリーの前に進み出た。

キンバリーはにやりとして、乙女の背中に膨大な魔力を送り込んだ。

「気の毒だが、シユミット。これで君には、万に一つも勝ち目はない」

魔術回路を起動したわけでもないのに、乙女の体が強烈な冷気を放った。

息ができないほどの圧迫感。シユミットの騎士が壁際まで押し戻され、シユミットが桜の枝から転げ落ちた。

騎士があわててそちらに飛び、シユミットを抱えて着地する。

「みんなー きてくれー」

シユミットが叫ぶ。声にはあせりがにじんでいる。相手の性能を直感して、早くも自信が揺らいだのか。根性のないことだ。

キンバリーは乙女の背中に手を当て、微弱な魔力を流し、回路を探った。

「ほう……これは美しい……見事な回路だ。とてもすぐには把握できない。制御はおまえに委ねていいかね？」

「はい、キンバリー殿」

そうこうするうちに、シユミットの仲間たちが続々と集まってきた。

老僧のような風貌の学生。ほかに、見慣れた顔が二つほど。その騎士たちが同じ数。合わせて八人分の人影が立つ。

「さて、それでは、連中をしつけてやるとしようか——」

キンバリーはうすく微笑み、抑揚の消えた声で呼びかけた。

「いゝりとやら」

乙女の体から魔力がほとばしり、キンバリーが施した欺瞞が解ける。

いろりは氷のような銀髪をさらめかせ、すさまじい冷気を放出した。

そして、一方的な殺戦が始まる。



Chapter 7 聖地に至る薔薇の騎士

1

ラビに振り下ろされた刃は、すかつと空を切り、大地を割った。
驚くフレイの眼前に、くるくると回転しながら、金属の翼が突き刺さる。

——いや、翼にしては、ずいぶんと鋭角的なデザインだ。それは大剣の（つか）であり、短剣のコンテナでもある、ケルビムの背面パーツだった。

ケルビムがラビを抱え、地面すれすれに滞空している。片翼を切り離されながら、白刃の下をくぐり抜け、ラビを助けてくれたのだ。

フレイはあわててロキを探す。ロキは円形劇場の外れ、客席にあたる部分の最上段に、荒い息をつきながら立っていた。

ひたいが切れ、腕が切れ、脚が切れて、血がしたたっている。だが、暴走はしていない。冷静な瞳で、眼下のローゼンベルクとシュナイダーを見下ろしていた。

「オレは謙虚で寛大だが、どうにも許せないものが三つある」



ロキは踏みしめるように、一步一步、階段を下りてきた。

「貴様と。貴様たちと。貴様たちにおくれをとった、自分自身だ」

ローゼンベルクの横で、シュナイダーがため息をついた。

「どうやら、懲りてねえようだ。(剣帝)は思ったよりも頭が悪いな」

「あいにく、オレは腦みそが重金屬のバカだね」

ロキはフレイを護るように立ち、そつと、ささやくように言った。

「フレイ。音を消せ」

急に名を呼ばれ、あわてながらも、フレイはロキの意図を了解した。

口笛を吹き、(ガルム)たちに指示を送る。よろよろと立ち上がった(ガルム)たちは、

覚悟にも駆け出し、円形劇場を取り囲むように散開した。

(頭張って……ラビ……みんな！)

フレイの魔力を受け、遠吠えのように高く鳴く。

吠え声が不思議なハーモニーを生み——一瞬後、効果はすぐに現れた。

音が消える。すっきりと。この一帯だけ、唐突に無音地帯になった。

シュナイダーが戸惑った様子で何か叫ぶが、当然、声は聞こえない。ローゼンベルクも

また、珍しく動揺の色を見せていた。

だが、彼らに対応する隙は与えない。ロキはもう攻撃に移っていた。

ケルビムが折れたブレードを振りかざし、シユナイダーの騎士に迫る。ローゼンベルクの騎士が、小柄な体を割り込ませ、タワーシールドを構えた。

あれを貫くことは不可能だ。だが、ロキはそのままブレードを叩きつけた。

無音で噛み合う鋼と鋼。力が拮抗したかに見えた、そのとき――

「――っ」

おそらくは悲鳴に近い叫び。しかし聞こえない。

フレイの位置からは見えている。ローゼンベルクの足の甲を、短剣が貫いた！

フレイは義父の言葉を思い出した。

（実戦においては、人形使いを狙うのが定石……）

これは夜会ではない。人形使いを狙っても、とがめられはしない。

フレイが音を消した今、ケルビムの短剣は無音の暗殺者だ――

盾の騎士はケルビムと競り合っているせいで、主のもとに戻れない。

そうこうするあいだに、ローゼンベルクはさらに三本の短剣に串刺しにされた。

「――っ――」

野郎、という形に唇を動かし、シユナイダーが騎士に突撃を命じる。

しかし、反応が遅れる。音が聞こえないせいだ。知性の高い自動人形を使い慣れている

と、音声で指示を出すが増えるので、違和感があるのだろう。

一方、ロキは普段から、ほとんどの操作を魔力のみで行っている。

自在に操る動きに鈍りはない――

クレイモアの一撃。一寸の見切りでかわすと同時、ロキはケルビムを大剣に変形させた。切っ先を形成するブレードが片方折れているので、いささか不格好だが、機能的には問題ない。そのまま勢いをつけて回転し、騎士の頭上をすり抜け――

超高熱の炎をまとい、騎士を背後から斬り裂いた。

熱と刃が騎士の脊椎を縦に裂く。盛大な血しぶきが飛び、ケルビムを真っ赤に染め上げた。そうして、騎士はあっけなく、一刀のもとに倒れ伏した。

騎士の肉体が崩れ、黒ずんだ灰と化する。

「――!?」

シュナイダーの唇は「馬鹿な!」というふうに動いた。血まみれのローゼンベルクも信じられないという顔。フレイも同じ想いだ。あの敵に、刃が通った――

ロキがこちらに手向け、軽く振る。

フレイはうなずき、〈ガラム〉たちにハーモニーをやめさせた。

あたりの静寂が破られ、再び音が戻ってくる。風の音や、木々のざわめきや――

「……あんたのおかげで、二度、命拾いした」

ロキの、ぶっさらばうな声が。

フレイは嬉しくなって、仔犬のように軽やかに、ロキの背中に飛びついた。

2

翼を失い、シグムントはバランスを失った。

ざぶんつ、と水面に落下する。もちろん、シャルも道連れだ。シャルは必死に水をかいて、シグムントの体にしがみついた。

「シグムントー 大丈夫!?」

水面がうつすら赤く染まる。かなりの出血だ。だが、シグムントは平気そうな顔をして、どこかとばけた調子で言った。

「さすがは〈魔剣〉。己の体で味わうと、こうも効くのだな」

「言ってる場合? 死んじゃうわよー」

「心臓は無事だ。それより、シャルよ」

「……わかつてる。このままじゃダメね」

シャルは憎々しい気分で背後を振り返った。

双子はびよんびよん飛び跳ね、ハイタッチして喜びを表現している。

勝ったつもりでいるらしい。つけ入るなら、今だ。

「あれを……やるわ」

決意を秘めたささやき。シグムントの首に取りつき、たずねる。

「できる？」

「私にとってはたやすいことだ。だが——君は大丈夫か？」

「前回、シンってやつとやったときに比べたら、まだまだ魔力に余裕があるわ。でも、次で限界まで力を出す。だから、貴方も限界まで力を貸して」

「わかった」

シャルを背中に乗せると、シグムントは三枚の翼で水面を叩き、飛び立った。

「どうするの？」

「ねえねえ、どうするの？」

「鬱陶しいやつらねー ほえ面かかせてやるんだから！」

シャルはこぶしを振り、魔力を振りしぼった。

「いくわよ、シグムント——ラストフレアー」

膨大な魔力の伝導。シグムントのあごから、光の針が飛び散った。

双子の騎士が槍を交差させ、反射しようと構えを見せる……が、シグムントのあごは、彼らではなく、真下の水面に向けられていた。

豪雨のように降りそそぐ光の弾雨。それは水を吹き飛ばし、消滅させ、まばゆい閃光を

生み出した。光と光が重なり合い、視界が真っ白に染まる。

「何これっ？」

「まぶしいっ！ 見えないっ！」

動揺する双子。騎士二体も対応に困った様子で、槍を構えたまま、動けずにいる。

そうしているあいだにも、大量の光を浴びて、シグムントの体に変化が生じた。

全身から噴き出す妖気。暗雲のごとく立ち込める、濃密な闇。

「目覚めよ力……ファフニール……（暴虐の王）——」

シャルがありったけの魔力を込める。光を奪う闇の中から、たくましい腕が、脚が飛び出した。はつきり、大きい。腕一本が象一頭ほどの大きさだ！

シグムントの膨張は止まらない。どんどん質量を増やし、プール全体を覆うほどに巨大化する。光に包まれていたプールが、一転、竜と闇に支配されてしまう。

双子は動揺を通り越し、混乱して悲鳴をあげた。

彼女たちの騎士が、主を護ろうと防御態勢を取る。その一体に、竜の巨大な鉗爪が襲いかかった。恐るべき力で、騎士をわしづかみにする。

まさに暴力。騎士の抵抗をもものともせず、壁に叩きつけた。

と同時に、もう一体の騎士を、巨大なあざとがとらえ——

「ラストーカノン——」

至近距離から、莫大な魔力を交換した一撃。

騎士は槍をかがけ、防御した。双子の片方があわてて魔力を送る。人形と使い手、二人ぶんの魔力は侮れない。見事、ラスターカノンを受け止めた！

（なるほど……片方だけだと、『受け止める』ことしかできないのね）

シャルはうなずいた。察するに、シンの魔術の発展型。「ターゲットのベクトル制御」を可能にする魔術回路だろう。自分以外を対象にできる点は、シンより優れている。使い手の魔力も、なるほど大したものだ。だが――

最大出力のラスターカノンは、防ぎきれるものではない！

「早く逃げなさい！ そのままだと、死ぬわよ！」

声を張り上げる。死ぬという言葉を開いて、双子の腰が砕けた。

二人そろってわたわたと駆け出す。騎士がこらきれなくなる前に、シャルは念をこらし、ラスターカノンの射線をそらした。騎士の槍と、左腕と、左足を消し飛ばして、ラスターカノンは壁に大穴をあける。

騎士一体が機能停止。ほっと息をついた瞬間、シグムントが咆哮した。

見ると、右腕に槍が刺さっていた。つかんでいた方の騎士が、槍で攻撃してきたのだ。

槍は肉をやすやすと切り裂き、骨をえぐった。

凄まじい破壊力。腐ってもシンのシリーズ機だ。

双子が死にもの狂いで魔力を送り込んだらしい。三人ぶんの魔力を感じる。

動転するシャルの前で、シグムントは躊躇せず、右腕を捨てた。

巨大な腕が引きちぎられ、プールに落ちて、盛大な水しぶきをあげる。

「やったー」

と喜ぶ双子。だが、ただで腕をくれてやるほど（暴竜）は甘くない。

そのときにはもう、シグムントのあごが騎士の方を向いている。

「ラストーセイバー」

細く収斂した光の剣。騎士はとっさに飛び、空中をジグザグにすべって、振り切ろうとした。だが、ラストーセイバーは、その程度の動きではかわせない。

天井を切り裂きながら迫いすがる光。それはやがて騎士に追いつき、両足を断ち切った。あふれる鮮血。シャルは思わず口を押さえる。

二体の騎士には、まだ息がある。通常の自動人形なら戦闘可能なレベルだ。

だが——二体は動こうとしない。どうやら、痛みあまり失神したか。

「哀れね。ついでに皮肉ね。マシーネンソルダート、確かに強敵だったけど」

人間であるがゆえに、痛みや負傷と無縁ではいられない。

双子はもう戦意を喪失し、抱き合ったまま震えている。

決着だ。シャルはふう、とため息をつき、ようやく、緊張を解いた。

3

夜々の目の前で、アリスは水晶玉を取り落とした。

床を転がる水晶玉。その中では、クロイツリッターの面々が次々とやられていた。

雷真はアリスとシンをにらみつけ、淡々と言った。

「数の力に頼ろうなんて、セコイ考えの連中に、あいつらは負けない」

「……君が言うど滑稽だね。君たちがやったことと、どこが違うんだい？」

「おまえたちはなぜつるむ？」

「決まってる。有利だからさ」

「そこだ。俺たちは今つるんだところで、最終的には不利になる。お互いに、消えてくれた方がありがたいと思ってる。それなのに」

息を吸い、吐き、雷真は静かな声で言った。

「俺と夜々を見捨てられないと思つて、手を貸してくれる。そんな奴らが、損得でつるむような連中に、負けるわけがねえんだよ」

言い放つ。夜々の胸いっぱい、熱い感情が満ちる。

そう、みんなが、夜々と雷真のために戦ってくれた。

アリスの口車に乗って、勝手なことをしてしまった、私のために……。

つん、と鼻の奥が痛む。だが、泣くのは後だ。

体内の魔力の流れを整える。いつでも、雷真の魔力を受け入れられるように。

「好きにやったもんだね。本気で戦争を起こすつもりかい？」

アリスが雷真に問う。雷真はかぶりを振って、

「戦争にはならない。おまえらはドジを踏んだのさ」

「……へえ？」

「おまえのお仲間、キンバリー先生に——魔術師協会にケンカを売った。相手を間違えたな。こうなりや、プロバガンダと主張するにも根拠が弱い。露西亞も英吉利も仏蘭西も、独逸包圍に動くだろう。こんな状況で、独逸が無理に戦争を起こそうとするか？ 自慢の神性機巧とやらが、あつさりやられた後だぜ？」

「……水晶玉に《雪》が映った理由が、やっとわかったよ。欺瞞の魔術を維持するため、ヤエガスミが使えなかったんだな」

「そうだ」

「じゃあ、君はここまで、丸腰できたっていうのかい？」

「丸腰じゃない。小葉が一緒にいた」

「丸腰じゃないか！ 《花》のお人形には戦闘能力がないんだろう！」

声が高くなる。怒っているのではなく、喜んでいるように見える。

ひたいを押さえ、天を仰いで、アリスは楽しげに笑った。

「まったく、あきれたね。キングだけで敵地に乗り込むなんて、とんだ悪手だ」

「俺もそう思ったが、それほどでもなかったな。将棋には入玉（はいるぎょく）ってのがある」

「ニユーギョク？」

「敵地の玉は、簡単にはつかまらない」

雷真（かみまこと）に手ほどきを受けたので、夜々も将棋のことは知っている。

チェスと違って、将棋は持ち駒（こしこま）を好きな位置に打てる。

そして、敵地の駒は、すぐに「成る」ことができる。

それゆえに、敵地の玉は堅い。強力な味方が続々と現れ、玉の周囲を固めてくれる。

そして今、雷真という玉のとなり（となり）に、夜々がいる。

今の夜々は——（たふしにせんごん）億千金の龍王（りゆうおう）、龍馬。

アリスは笑みを消し、真顔で雷真を見つめた。

「面白い。彼を倒せ、シン。できるだろう？」

「お嬢さまの仰せとあらば、たやすいことです」

シンが動く。例のごとく、慣性もへったくれもなく、いきなり最高速——と思った速度から、さらに加速した。

見れば、アリスがてのひらを向け、魔力を送り込んでいる。アリスの力を帆船のように受け、さらなる速度を得たようだ。夜々を回り込むようにスライド移動。ある一点で磨突にベクトルを変え、襲いかかってきた。

夜々は身を盾にして雷真をかばう。シンは急停止、急加速して、夜々の頭上に飛び出した。そのトリッキーな動きに、夜々はたちまち敵を見失った。

だが、雷真が捕捉はさみしている。魔力の波長で夜々を誘導、位置を教えてくれる。その流れに逆らわず、夜々は向きを変え、真上からの蹴りを受け止めた。

「吹鳴フクナギ——四衝——」

「はい！」

下がるシンに追いつき、蹴りを放つ。シンは驚いたようだが、軽くさばいて後退——と見せかけて、さらに突進してきた。

重い蹴りが空中の夜々をとらえる。夜々は両腕を交差してブロックした。空中では勢いが殺せず、吹っ飛ばされて床に転がる。

やはりシンは百戦錬磨だ。しかし、夜々も負けてはいない。反転してすぐに起き上がり、雷真のとなりに戻った。

そんな夜々を見て、アリスが興味深そうに言った。

「やるね。男子三日会わざれば——っていう、東洋のことわざ通りだ」

「高い授業料を払ったからな」

あばらを押さえる。この怪我の代償が、経験値となって蓄積されている。

夜々にはわかる。雷真はシンの思考が読めるようになってきたのだ。速度と挙動は尾介だが、思考が読めていれば、対応できる。

「遊んでいると足をすくわれそうだ。さっさと片付けるよ、シン」

返事の代わりに、シンが動いた。アリスの命令も魔力も受けない、独自の行動。ここがシンの怖いところ。自分の判断と魔力だけで、おそるべき戦闘能力を発揮する。

シンが雷真の側面に回り込み、横から突っ込んでくる。

夜々がそちらに飛び出し、ブロックしようとした、そのとき。

ふつ、とシンの姿が消えた。

一瞬後、反対側の壁面に、高速移動する影が映った。

夜々は瞠目する。あり得ない速度。音より速い――

夜々が影に気を取られた瞬間、背後から猛烈な殺気を感じた。

シンが唐突に出現。雷真の背後から、強烈な蹴りを繰り出してくる。

雷真は床に身を投げ出してかわした。本気で危険を感じ取ったのだらう。だが、シンはさらに雷真を追う。重い蹴り。ざりざり、夜々が間に合う。ブロックした瞬間、衝撃で

夜々の足もとが沈んだ。

重すぎるー 床が陥没したー

夜々のボディがきしみ、白い肌がざっくり裂けた。雷真の魔力が間に合わず、魔力供給を受けずに防御したため、負荷に負けたのだ。

「夜々ー」

「平気ですー」

力を振りしぼり、シンを弾き飛ばす。弾かれたシンは宙をすべって――
また、消えた。

そして、やはり雷真の後方に、高速移動するシンの影。

（またー これは、何……!?）

このあいだの「錯覚」か。加速に予測がついていかないのか。でも……?

夜々には正体もつかめない。困惑しているあいだに、雷真は腰のハーネスに手を伸ばし、スタンダレネードを投げつけた。――アリスに向かって。

直撃はしない。突如そちらにシンが現れ、グレネードをキャッチする。

瞬間、炸裂。爆音と閃光、そして衝撃がホールを揺らした。

アリスはよろめいた……が、それだけだ。シンにかばわれ、平然としている。
残念。今ので気絶してくれば、シンの戦闘能力は半減したのだが。

「どうしますか、雷真……?」

夜々は決断を迫るように言った。

シンを打倒するために編み出した、「あの戦法」を使いますか、と訊いている。

シンに敗北したことで、発奮したのはシャルだけではない。雷真らいまことと夜々も、シミユレーシオンを重ね、対策を編み上げている。

「いや……この状況じゃ、使えない」

相手がシンだけならば、動きを封じる方法はある。

しかし、それは極めて難しい方法だし——何より、今はアリスがいる。

シンの行動をすべて封じたところで、シンの魔術回路はアリスが操作できるのだ。二人を分断しなければ、この切り札は切れない……。

「——いや、逆か」

雷真が魔力を練るのがわかる。どうやら、何か思いついたようだ。

戦闘中だというのに、夜々は嬉しくなる。雷真はいつも、どんな危機に直面していても、策を練り、機転を利かせ、夜々が驚くような手段で、窮地を脱してくれる。

「夜々。少しのあいだ、俺にコントロールをあずけてくれるか？」

「はい」

「おや、何か思いついたみたいだね」

目ざとく気付き、アリスがくすりと笑った。

「でも、さっきのはただだけないな。おかげで髪が短くさくなっちゃったよ。後で洗ってくれるかい、ライシン？」

「阿呆、自分で洗え」

「それって、『一緒にお風呂に入る』ところまではOKって意味？」

「雷真……っ！」「ふんふん」。

などと軽口を叩くあいだに、アリスは魔力を練り上げていたようだ。

ごうっ、と魔力を解放し、となりのシンに注ぎ込む。

大きいー とんでもない出力だ！

決めにくるつもりか。魔力はシンの全身に行き渡り、魔術回路を起動した。

そして、シンが消えた。

一瞬後、雷真の右手にシンの姿が出現する。

いけないー 雷真があぶない！

だが、雷真は反応しない。夜々にできることは、雷真を信じて、コントロールを任せる

ことだけだ。信じて、頼って、雷真に身を委ねる……。

「天鰲 九 六衝」

雷真の魔力が、その意志が伝わる。

夜々は渾身の力で、側面ではなく、真正面に向かって、こぶしを繰り出した。

ぐわっ、と空気がゆがむほどの衝撃。

こぶしの振りだけで床が砕ける。夜々のこぶしは何もない虚空を切り裂き、衝撃波で床を砕き、ずばんっと轟音を響かせた。

直後、誰かが床に倒れる音が響いた。

右手のシン——の虚像——が消え、目の前に、倒れたシンが現れる。

アリスが息をのむ。意外な展開に驚いた様子だ。

シンは起き上がろうとして、できない。身を起こすたび、再び床に転がった。

平衡感覚を失っている。

夜々のこぶしは当たらなかった。しかし、衝撃が鼓膜を破ったのだ。

シンはあきらめない。自分の魔術回路を起動しようとして——

「が……あああああつー」

叫ぶ。腕の皮膚がはがれ落ち、ちぎれ、四方八方へすっ飛んでいった。

「よせよ、シン。バラバラになりたいのかい？」

アリスはあきれたような顔をして、雷真をしげしげと眺めた。

「驚いたね。僕の（虚像）をこんなに早く見抜くなんて」

雷真は起き上がれないシンを指差し、

「さっきからの、そいつの動き——ありえないほど速すぎる」

「でも、僕の登録コードは（加速の妖精）だよ？」

「音速に近付けば、衝撃波が生じるぜ。さっきの夜々みたいにな」
だから、あれは実際の速度ではない。

「おまえは何度も、余計なものを俺に見せている」

幻影を操る力。変身能力。消えたように見せる透明化現象。

それらがすべて、同じ魔術によるものだとしたら？

「おまえが幻を操るとすれば、筋が通る。そこで、おかしいと気付いたのさ。消えることができるのに、なぜシンは消えたままで攻撃しないのか」

アリスが黙る。雷真はにやつと笑って、

「克服できるんじゃないかったのか、魔活性不協和の原理」

「……かもしれない、って言っただろう？」

苦笑するアリス。そこでようやく、夜々にもカラクリがわかる。

シンが攻撃に移ると、アリスの魔術は効果を失っていた。逆に、アリスの魔術がシンを隠すとき、シンは自分の魔術を使えない。

シンというボディの中に、ふたつの魔術はうまく共存できないのだ。

アリスの魔術で消えているあいだ、シンは「人間並みの」速度しか出せず――

その上、打撃も通るのだ。当然、鼓膜だって破れるはずだ。

そして、平衡感覚が狂った今、シンには自分の体が制御できない！

勝った——と思った、その刹那。

「お説ごもつともだけどね、それで勝ったつもりなら、まだ一手足りないよ」

アリスが笑う。彼女が発散する魔力は、そのままシンに流れ込んでいた。

シンが飛び上がり、夜々に向かって突進してくる。蹴りではなく頭突き。アリスはまだ魔力に満ちている。魔力のストックだけなら、シンにも余力がある。制御をアリスにゆだねれば、二人はまだ戦える……。

しかし、夜々はシンの突進をひらりとかわし、上から蹴りを叩き込んだ。

シンは対応できず、防衛はおろか、姿勢制御もできず、床に叩きつけられた。

決まった——むしろ、蹴った夜々が驚く。

シンは反転し、真上の夜々めがけ、さらに向かってきた。

夜々は空中で身をひるがえし、突進を受け流して、カウンターの蹴りを放った。

やはり直撃。たやすく吹っ飛ばされて、床を転がるシン。

小さなため息とともに、見かねた様子で雷真が口を開いた。

「もうやめろ、アリス。(下から二番目)の俺が、どう考えても俺より頭のいいおまえに、

講釈を重ねてやるぜ。機巧魔術の利点は何だ？」

「……自動人形の存在」

「そうだ。自動人形オートマソンつてのは大したもんだぜ。夜々もいろいろも小柴こしばも、俺よりずっと頭がいいんだ。複雑な魔術回路を、実に巧みに使ってくれる。俺は大雑把な指示を出すだけで、あとは三姉妹がやってくれるのさ。精密な操作をな」

雷真は動けないシンを見下ろし、あわれむように言った。

「シンの魔術回路は、俺には理解がわからない。分子レベルでベクトルを制御できるってシャルは言ったが、正直、俺にはサッパリだ。でもよ」

アリスは無言だ。雷真がいわんとすることは、もうわかつているらしい。

「分子って、何個あるんだ？ それは、俺たちに把握できる数なのか？」

シンは自分の肉体だから、感覚的にコントロールできる。

タイムラグもなく制御でき、感覚器からのフィードバックも迅速だ。

それゆえに、攻撃にも防御にも対応できる。フェイントにも対応できる。

だが、アリスは違う。彼女は優れた魔術師らしいが、他人の体を分子ひとつひとつまで制御するなど、困難だ。その上、格闘戦の技量に隔たりがある。

「俺たちは二人でひとつ。ひとりになったおまえが、勝てる道理はない」

「だったら、証明してごらんよー」

アリスが力み、魔力をしほり出す。文字通り、最後の力か。壁が揺れ、天井からほこりが落ちてくる。膨大な魔力にホール全体が震え、地震が発生した。

ゆっくりとシンが浮き上がり——動く。

ぐおんつ、とホールの中を旋廻する。速い——衝撃波で床がえぐれる。

なるほど、これも道理だ。格闘経験の差を埋めるため、小手先の勝負ではなく、純粋な力と速さに賭けたのだ。止めることのできない力で、打ち砕くつもりか。

だが、それはおそらく、雷真の狙い通り。

「森閑絶衝——」

森閑は敵の攻撃を待ち受ける意図。夜々はその意図を正確に汲み、半身になって、シンの突撃からわずかにそれた。

交差する一瞬に、シンの腕を取って、手首をひねる。

小手返し。柔術の繊細な動きに、アリスは対応できていない。

シンはたやすく引っくり返り、床に叩きつけられた——と同時。

「（神機御雷）」

叩きつけた勢いに重ねて、さらに追撃。夜々は瓦割りのように、足もとのシンめがけ、こぶしを叩き込んだ。

アリスがシンの魔術回路を起動し、真上へのベクトルで対抗する。

力と力の衝突。衝撃波が床を砕き、爆風が砂塵を飛ばす。

だが、雷真は魔力をゆるめない。ますます強く、夜々に力を送ってくれる。

そして――ある一瞬に、夜々がまさる。

シンの体が沈み、沈み、十メートルも沈んで、ホールの床が抜けた。

4

小さくなつていくシグムントから飛び降り、シャルはすとん、と足場に下りた。死んだ鳥のように落ちてくる仔竜を、あわてて抱きとめる。

「シグムントー！ しっかりしてー 平気なのっ？ 気を確かにー」

「平気……とは言えんな。だが、命に別状はない」

弱々しく答える。シグムントはくたつと首を垂らし、浅い呼吸を繰り返していた。

翼を一枚と、右の前肢を失っている。腹を裂かれ、血に汚れている。そんなシグムントを、シャルはぎゅっと抱きしめた。

「ありがとう。よく戦ってくれたわ」

「昼のチキンを奮発してもらえそうかね？」

「そっ、それとこれとは話が別よー」

「修復にはかなりかかる。しばらくは、今回のような無茶はできないぞ」

「わかってるわ。……ありがと」

シャルはシグムントを抱いたまま、手の甲で涙をぬぐった。

毅然と顔を上げ、双子の方に向き直る。

シャルと視線が合うと、双子は「ひいつ」とすくみ上がった。

「さあ、手袋を渡しなさい」

すこむように一喝。双子はびくつとのけぞって、

「や、やだー やだやだー」

「ローゼンベルクに叱られちゃうよー」

「ふん、大丈夫よ。ローゼンベルクも、とっくにやられてるわ」

双子はきよとした。それから、お互いに顔を見合わせ――

「やだー」

見事なステレオサウンド。シャルの神経を逆なでする。

「いいから、さっさと奇越しなさいー この負け犬ー」

逃げようとする双子をつかまえ、無理やり手袋を取り上げる。

「うわーんー」

「な、泣かないでよー 私がいじめっこみたいじゃないー」

ともかくこれで、この二人は夜会の参加資格を失う。

シャルは泣き声から逃れるように、早足でプールを出た。

「さあ、ライシンのところに行くわよ」

「うむ。もつとも、加勢できる状態ではないが……私も、君も」

だが、行くしかない。知らず駆け足になってしまいがち、シャルはシグムントを抱いて、通路を走った。

5

ロキはフレイの側を離れ、敵に向かって歩き出した。

その先には、血まみれのローゼンベルクと、彼の騎士。

既に戦意がないのか、騎士は呆然と立ち尽くしている。一方、シュナイダーは鋭い双眸に殺意をにじませ、ロキをにらみつけていた。

ロキの背後でフレイが緊張している。弟の身を案じているのだろう。だが、ロキを信じて、無言で見守っている。

「ふん……他愛もない。あの執事の方がよほど完成されていた」
死人に鞭打つような調子で、ロキはローゼンベルクに言った。

「性能を特化したのが裏目に出たな。分子の『静止』に特化した方は、その安定性ゆえに瞬時の反応ができず、分子の『進行』に特化した方は、進行方向に逆らいさえしなければ、

「実にもろい」

その言葉通り、盾の騎士の動きを封じ、剣の騎士を背後から斬り伏せた。

言うほど簡単なことではない。ロキは短剣とケルビムを操り、ひとりで波状攻撃と集中攻撃を行った。たぐいまれな魔術の才能と、技術がいる。

「手袋を寄越せ。貴様たちの戦争は、ここで終わりだ」

ロキがケルビムに向かって手を差し伸べる。ケルビムは瞬時に大剣へと変形し、ふわりと浮いて、ロキの手に収まった。大ききのわりに、まるで重さを感じない。

ローゼンベルクの双眸に、恐怖の光が走った。

「待て。殺すつもりか？」

「三度は言わない。手袋を寄越せ」

シュナイダーが怒鳴りかけるのを手で制し、ローゼンベルクが手袋を外した。

パールホワイトの手袋。夜会参加者の証。それを忌まわしげに捨てる。シュナイダーも舌打ちしながら、それにならって、手袋を投げ捨てた。

ロキは念動で手袋を引き寄せ、自分の手につかみ取った。

興味を失くしたかのように、二人の敗者に背を向ける。

その瞬間、背後で殺気と魔力が膨れ上がった。

フレイの紅い瞳に戦慄が走る。今ここに執行部の審判はいない――手袋を捨てたからと

いつて、戦いを放棄したとは限らないのだー

フレイが警告を発するより早く、敵は動いていた。

それまで無言で立っていた騎士——ローゼンベルクの騎士が、音もなく、ロキの背中に突進した。ざらりと輝く鋼^{はがね}。いつの間にかナイフを抜いている。騎士はナイフを腰だめに構え、小さな体ごと、ロキの背中にぶつかって来た。

ぶしゅつ、と鈍い音が響き、血が糸をひいて飛んだ。

騎士の兜^{かぶと}が宙に舞う。

はね飛ばされた兜。その下にあったのは、美しい乙女の顔だった。

ロキの視線の先で、フレイが目を見張る。無理もない。甲冑^{かこう}の下に乙女の体が隠されていようとは、鈍くさい姉にはわからなかっただろう。

ロキの肩にのせられる乙女の顔。森の妖精^{えんせい}を思わせる美貌^{びよう}だ。しかし、その唇から血があふれ、白い肌は見る間に血に染まった。

ローゼンベルクはさらに魔力を送ったが、あいにく、騎士はもう動かなかった。

乙女の胸を、大剣が貫いている。

小柄な体に対し、その剣はいかにも巨大だった。

ソフィアははかなげに、弱々しく微笑^{ほほえみ}んで、小さくささやいた。

「やっぱり……優しいね、ロキは」

「……オレは謙虚で寛大だが、あいつのように甘くはない」

彼女の魔術回路は防衛に特化したものだ。使い手に隙があったとは言え、彼女が「自分の意志で」魔術を起動していれば、この一撃は防げたはずだ。だが、現実には大剣は貫通し、ソフィアの〈イブの心臓〉を破壊している。

ロキはゆつくりと大剣を引き抜き、よろめく乙女を支え、抱きかかえた。

「私を殺して」

数時間前——夕闇が迫る木立ちの中で、ソフィアはそう願った。

「私は……本当に、人間だったの。ほんの一年前まで」

「……あんたは今も人間だ」

「うん、ロキは私を人間だと言ってくれた。だから」

ふんわりと麗しい、白薔薇を思わせる微笑み。

「どことも知れない戦場で、人形として破壊されるよりも。実験の不始末で、廃品として処分されるよりも。人間として、ロキの手で死にたいの」

訴えるような眼差し。邪険に振り切ることができず、ロキはまごついた。

「……わかった。だが」

精一杯の優しさを込めて、不器用に——ぶつきらばうに、言い捨てる。



「それはまだ先の話だ。いつか戦争が起きて、あんたが戦場に立ったとき……」

「約束ね？」

「ああ」

そっとソフィアの手が触れる。ロキはその手をつかみ、握りしめた。

そのソフィアが今、ロキの肩に首をあずけ、微笑んでいる。

「約束……果たしてくれて……」

幸せそうに。穏やかに。そして、清らかに。

「ありがとう」

事切れる。瞳孔が急速に閉じ、瞳が光を失った。

刹那、肉体の結合がゆるみ、花が散るように崩れ、風に溶けて消えた。

「……迂闊。撤退だー」

言うが早い、ローゼンベルクは全力で後退した。まさに、命からがら、といった風情。怪我した手足を必死に動かし、シュナイダーとともに駆けていく。

その背を見つめるロキの全身に、猛烈な殺気が宿った。

ごうっ、と噴射音を響かせて、ケルビムが燃え上がる。しかし――

奥歯を噛んで、数秒。

ロキは敗者に背を向け、フレイの方へと歩き出した。

フレイはじんわり涙ぐみ、有無を言わず、ロキを抱きしめた。

「な……何の真似だ」

「う……いいよ？」

「……何？」

「泣いて、いいよ？」

身を離し、にこっと笑いかける。

一瞬、ロキの胸に込み上げるものがあつた。

だが、それは一瞬のことだ。ロキはいつもの、冷然とした顔に戻って、

「誰が泣くか、バカ姉貴」

フレイはもう一度、ロキの体を抱きしめた。いつの間にか集まってきた〈ガルム〉たちが、姉弟の周りにお座りして、しきりにしつばを振っていた。

7

夜々がもたらした破壊は、あっけなくホールの床をおち抜いた。

崩れ落ち、沈下する床。その下から、夜々が飛び出してくる。

宙返りして、雷真のとなりに着地。その衝撃で、足もとの床が崩れ落ちた。

雷真はあわてて後退する。崩壊に追いかけられるように、夜々と一緒に十数メートルも走って、ホールのすみまで下がった。

床の下は見えない。驚いたことに、空洞が広がっている。

（これは、まさか――）

ざわつと、雷真の首筋に寒気が走る。全身を舐められたような、おぞましい恐怖。次の瞬間、眼下の闇の中に、無数の瞳が浮かび上がった。

瞳。間違はなく、瞳だ。おびたらしい数。それは標的を探すようにきょろきょろと動き――ある瞬間に、一斉に雷真を見つめた。

やっぱり、あれだ！ あのとときのあれは、錯覚じゃなかった！
では、ここは……あの地下空洞に続いているのか！

「あ、雷真ー アリスさんがー」

思考の途中で夜々の叫び声。示された方を見ると、ガラガラと崩れ落ちる床の向こうに、かかしのように立ち尽くすアリスがいた。

足もとまで崩壊が迫っているのに、逃げようもしない。

考えるより早く、体が動いていた。夜々の悲鳴などおかまいなしで、崩壊のへりを駆け抜け、亀裂を飛び越え、落ちる瓦礫を蹴って、アリスに迫る。

タイミングをはかったかのように、アリスの足もとが抜けた。

落ちかけるアリスを空中でつかまえ、思いきり手を伸ばす。

届け、と念じながら伸ばした指が、床のへりに引っかかった。

強烈な加重。ほっそりとしているのに、アリスは重い。大人の男なみだー

べきべきと軋（こ）が嫌な音を立て、肉が裂けたような激痛が走った。

歯を食いしばる。唇から血の泡があふれる。それでも、雷真はアリスを離さない。

「雷真！　そこでじっとしててくださいー　今いきますー」

夜々が叫ぶ。とは言うものの、足場が悪く、どこが崩れるかわからない。跳躍すれば、着地の衝撃で、雷真が引つかかっている床を崩してしまうかもしれない。

夜々が戸惑っているあいだに、アリスが我に返ったようだ。

「何……やってるんだい？」

アリスははんやりと、呆（ほう）けたような声で言った。

「僕と心中するつもりかい？　離しなよ——」

「断る——」

雷真は叫び、眼下を見た。一面に広がる闇。前回は砂の斜面に落ちて助かったが、あの断崖（だんがい）に落ちれば、到底、助かるまい。

「く……おまえは生き残って、シャルにワビを入れろー　アンリにもだー　こんなところ

で勝手に死ぬなんぞ、誰が認めるか！」

雷真が手を離さないのを見て、アリスは苦笑した。

「情けをかける必要はないよ。もう、気付いているんじゃないかな？」

「何をだー いいから、つかまれー！」

「僕が魔具もなしに（虚像）の魔術を使うわけ——使えるわけ」

「ああ!?」

刹那、はらはらと花びらが散るように、アリスの肌が破れた。

上着の袖、スカートの下からのぞくのは、鋼鉄の装甲。

雷真がつかんでいる左手と、左足が——あるいは左半身が——人工物だ！

「自動人形……!?」

「ご名答。僕は半分以上、機巧の存在さ。機巧兵士ではないけどね」

「うるせえ！ だから何だー！」

アリスが目を丸くする。雷真はもうヤケクソで叫んだ。

「自動人形なら、俺のものになれ！ おまえの根性、俺が叩き直してやる！」

はかん、として、アリスは絶句した。

遠くから夜々の殺気が漂ってきたが、それはこの際、置いておく。

アリスはうつむき、全身の力を抜いた。

鋼鉄の腕を通して、彼女の震えが伝わってきたような気がした。

（泣いてる……のか？）

しかし、やがて顔を上げたアリスは、いつもの余裕ぶった笑顔だった。

「君には教えてあげるよ、ライシン。これはシンも知らないことさ」

「何を言ってるー 早くつかまれ！ 腕が抜ける——」

「僕の本当のババはね、エドワード・ラザフォードっていうんだ」

にこつと横面の笑みを見せる。次の瞬間、右手で雷真の腕を払った。

ばきんつと嫌な音を立てて、雷真の手首が外れる。

関節を外された！ たまらずゆるむ握力。するとすべり落ちていくアリスの手を、

雷真はどうすることもできない。

そのまま闇に吸い込まれていくアリスを、なす術もなく見送った。

「雷真！ 大丈夫ですかー」

やつと近くまできた夜々が、慎重に、しかし軽々と、雷真を引き上げてくれる。

雷真は呆然と、いつまでも穴の底を眺めていた。

（エドワード……ラザフォード……学院長……!?）

闇の底は見通せない。



Epilogue

美酒のように甘く

半ば崩れ落ちてしまった床に、雷真はへたり込んだ。

夜々が心配そうに足もとを見る。崩壊はすぐ足もとにまで及んでいる。

「どうしましょう雷真。もう……逃げ道が」

「そうだな……。天井をぶち抜いて地上に出るか……」

とは言ったものの、夜々にそれをやらせるだけの魔力がない。

思案していても仕方がない。雷真は気合を入れ、意を決して手首をはめた。べこきつ、と軽い音とともに関節が噛み合う。

「あの、雷真……アリスさんは」

「おまえ、シンの（心臓）を潰したか？」

「あ、いえ……手ごたえはありませんでした」

「なら、大丈夫だ。あの二人は、たぶん生き残る」

足もとの隙は深い。だが、あの二人は、そう簡単にはくたばるまい。

がらがらつ、と尻の下で床が崩れて、雷真はあわてて後ずさった。

いよいよまずい。困っていると、不意に風切り音が聞こえてきた。



ホールの入り口から、鋼色はがねいろのドラゴンが滑空してくる。

「ライシンー 無事なの?」

「シャルー 助かったー」

夜々と二人、シグムントの背中に飛び乗る。と同時に、床が完全になくなった。

シャルはラスターカノンを天井に撃ち、脱出口を開いた。

最短距離で地上へ向かう。建物から飛び出したところで、魔術の照明が目には飛び込んできた。真昼のように明るい。光の下には円形の——古代の劇場のような広場があり、そこに、ロキとフレイの姿があった。

シグムントはばさばさと羽ばたきながら、広場の真ん中に着地した。

夜々に手伝ってもらって、雷真もシグムントの背中から降りる。フレイがたゆんだゆんと胸を揺らして駆けてきて、マフラーを踏んでコケた。

「ライシン……やった、の?」

「ああ。そっちも、やってくれたみたいだな」

雷真はロキの手に注目した。二人ぶんの手袋を握っている。

「ローゼンベルクは七四位だったんだろ? シャルが二人、俺おれがひとり墮落けおとした。今頃いまごろ、キンバリー先生が四人やってくれてるはずだから……」

七四位まで一挙に脱落。(手袋持ち)のおよそ四分の一が消えた計算だ。ロキとフレイ

を入れて、残り七四人を倒せば……あいつに届く！

「現在時刻は十時……つてとこか。それじゃ、さっさと交戦フィールドに向かおうぜ。フレイは今日のぶんの（待機義務）を果たさねーと」

言い終わる間もなく天地がぐらつき、倒れそうになる。

「雷真！ 大丈夫ですかっ？」

「ああ……悪いな夜々。俺たちも早く病室に戻ろう」

夜々は急に黙り込み、一同の輪から離れ、背を向けた。

「やっぱり、夜々は……もう、雷真とは一緒にいられません……」

「ちよつと、何言ってるのよ！ 何のためにみんな——」

気色ばむシャル。その髪をくわえ、引つ張って、シグムントが黙らせる。

雷真は夜々の後ろに立ち、頑なな背中に呼びかけた。

「蒸し返すなよ、夜々。俺の相棒はおまえだけだ」

「だって……夜々はあつさり敵の尻にかかって……っ。こんな馬鹿な子は、いつか雷真の命取りになります……」

「約束したろ。二年前の、あのかき」

「あのかきだつて——」

声が詰まる。夜々はぐすつと涙ぐみ、細い肩を震わせた。

シャルとフレイが不思議そうな顔をする。ロキでさえ、ちらりと雷真を見た。

「夜々をかばって、雷真は……」 雷真の背中には……っ」

「そうだ。俺は死にかけた。でも、おまえは誓った。ずっと俺を護ってくれと。どんなときでも。命の続く限り」

「――」

「その誓いを果たせ」

おずおずと振り向いた夜々は、許しを請うような目をしていた。

「本当に……夜々で、いいんですか？」

「言っただろ。俺の相棒はおまえだけだ」

夜々は安心したように力を抜き、わあああん、と雷真にしがみついた。

「ふん……。ここまでお膳立てしてあげたのに、もとの鞘に収まらなかつたら、とっちめてやるところよ」

苦笑するシャル、仏頂面ぶつどうめんのロキ、そしてフレイを順に見て、雷真は頭を下げた。

「今回は世話になった。ありがとうよ」

「う……感謝、してる？」

「もちろんだ」

「じゃあ……デート……」



「ひ、卑怯ひげんよフレイー 私だって頑張ったのに！」

「シヤルは……前に一回、デートした」

仲よくなったはずなのに、なぜだか陰鬱になり、にらみ合う二人。しかし、雷真かみまことの注意は、既に少女二人には向いていなかった。

雷真が見ていたのは、先ほどから黙り込み、どこか遠くを眺めるロキ。

視線の先には、これといって何もない。戦闘せんとうの痕跡こんせきと、砕けた甲冑かこうがあるだけだ。

「何だロキ、悪いもんでも食ったのか？ 拾い食いか？」

「貴様と一緒にするなバカ」

ロキは冷たく言い捨て、それから、独り言のような調子でつぶやいた。

「あいつと出逢であったのが、オレではなく……貴様だったら」

あいつ——？

「……いや、いい」

「何だよ、言いかけてやめるなバカ」

「……そうだな。オレは大バカ野郎だ」

自嘲じちやうの笑み。雷真は気味が悪くなって、ひそひそと夜々ややにささやいた。

「聞いたか、夜々。やっぱこいつ、悪いもんを食ったんじゃない？」

「こ、これは——ついにロキさんがデレ期に……!?」

「えっ、なにに？　そういうルートなわけ？」

シャルが目を見せ、なぜか食いついてくる。何があだかわからない。

やがて、一同はぞろぞろと連れ立って、夜会ナイトの交戦フィールドへと戻った。

うち捨てられた甲冑カウが、いつまでも、風に吹かれて横たわっていた。

結局、雷真ライマとロキは再び病室送りとなった。

翌日の夕刻まで、ロキは死んだように眠っていた。見舞いのフレイも疲れが溜たままっていたらしく、ロキのベッドに突つ伏ふして、居眠りイミヤリをしている。

先ほどまで雷真ライマを見ていた夜々ヨヨは、飲み水を汲くみに出て行った。

静けさが睡魔スイマを呼び寄せ、雷真ライマもうとうとしている。窓の外はまだ明るい。日本にいたときよりも太陽は高い――が、そろそろ、夜会が始まる時間だ。

不意に、クチナシの香りが鼻先をくすぐり、雷真ライマは目を開けた。

夢か、うつつか。雷真ライマのベッドの上に、艶あまやかな女が腰かけていた。その手前には、銀の髪を持つ、美しい乙女がいる。

「硝子しょうしさん……と、いろり？」

いろりの瞳ひとみはうるみ、あふれそうなくらい、透明なしずくをたたえていた。

「雷真殿……。夜々を救ってくれたこと、このいろり、生涯忘れません」



雷真の手をつかむ。予想に反し、いろりの肌は燃えるように熱かった。

いろりは何か言いたげに唇を開いたが、何も言わず、そつと下がった。

「また無茶をしたわね、坊や」

いろりに代わって、硝子^{しろうど}がささやく。とがめるように、しかし、優しく。甘噛^{かんがみ}みのような叱^しり方は、ここしばらく、雷真には見せてくれなかったものだ。

「これでもう何度目の命令違反かしら。……でも、夜々^{やや}を取り戻してくれたことには、私もお礼を言いたい気分よ」

つややかな唇が優美な曲線を描く。

「だから、ごほうびをあげるけど——お仕置きをしなくちゃね」

すつ、と雷真の頬に硝子の影がかかった。

何をされたのか、わからなかった。

いろりが顔を真っ赤^かにして、あわあわと両手で宙をかき混ぜる。

「せいぜい生き延びなさい、坊や」

それだけを言うと、いろりとともに、霞のように消えてしまう。まさにうたかたの夢。

雷真はしばし杳然^{しょうぜん}と、ほのかに漂うクチナシの香りをかいでいた。

そつと自分の唇に触れる。離して見ると、指先に口紅がついていた。

その意味を理解した途端、かっと頭に血がのぼった。

ばくばくと心臓が暴れる。雷真は赤面し、ベッドに突っ伏して、しばし悶えた。

「あ……いや、待てよ？　これがごほうびなら、お仕置きつてのは、何——」

ぞくつと、背筋が凍るような戦慄が走った。

冷やかな空気が三方向から流れてくる。

ロキのベッドではフレイが目を見まし、不満げな目を向けていた。

窓の向こうには、こっそりのぞき見をしているシャル。

病室の出入口には、水差しを握りつぶした夜々がいる。

雷真はぼりぼりと頭をかき、とりあえず、一番おかしい者に突っ込んだ。

「ええと、シャル？　窃視は犯罪だつて知ってるか？」

「ひひひとが、ひとが心配して、様子を見にきてあげたのに——」

「雷真……っ、夜々だけつて、夜々だけつて言つたくせに……っ」

「ライシン……へんたいやろう……浮気者」

「ちよつ、待てよ、何でおまえら、そろつてキレて……落ち着けえええ——」

あいにく、出入口に窓と、逃げ道はすべて押さえられている。

数秒後、病室に断末魔のような悲鳴が響き渡った。

そして今夜も、夜会が始まる——

あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

いきなりですが、このあとがきを立ち読み中のアナター

この四巻には〈ドラマCD付き特装版〉があるんですよ。YOUー どうせなら特装版を買いちゃいなYOUー

既に特装版をお持ちの方には共感していただけたらと思いますが――

キャストは皆さんガチハマリで原作者ウハウハの布陣です。夜々×雷真もロキ×雷真も激萌え必至。出番が控えめなフレイもボンコツ可愛くて、収録現場で海冬レイジは悶えました。そして「是非に――」とお願ひしたシャル＆シグムント組が素敵すぎ！ あの中田譲治さんが演じてくださったシグムント、たまらなくカッコイイですよー。

とくPさん＆LINDYさん＆原田ひとみさんの麗える新曲「Moody」も収録！ この素敵CDが初回生産限定というのは、悪い冗談としか思えません。もしくはハードなSMプレイ。後で泣かないように、早めにゲットしてくださいね。

――というわけで宣伝でした。のっけからすみませんでした。

そんなこんなで機巧少女も四冊目です。

普段の海冬レイジなら、既に物語が折り返しているはずの巻数なのですが――

正直、まだ全然「始まってない」気がします。夜会参加者は半分も出てませんからね。当然、後ろ半分の方がウエイト重いわけですね。

幸い、「あと〇冊でお願いしますね」という恐怖の宣告はきていません。ズバリ、皆さんのご支持があればこそ、今後ともよろしくお願いします！

さて、今回の思い出は……そう、雷真の股間に〇〇〇が接近するシーン。

「もっと色っぽくエロくー」

という感嘆符つきの改稿指示書に度肝を抜かれました。

トゲトゲのフキダシで囲まれてました。叫び台詞でした。

そんなわけで、あれは担当庄司さんの心の叫びが詰まったシーンです。決して僕の欲求不満が発露したわけではないんです。勘違いしないでよねっ。

改稿に際しましては、今回も庄司さんとするろおさんに大変お世話になりました。適切なアドバイスの数々で、初稿から確実にクオリティアップしているはずです。今後ともアテにしております。

また、今回のイラストも素敵すぎで大感謝です。いろいろ可愛いよいろいろ。あと双子。お

忙しい中、特装版ジャケットや数々の特典絵を描いてくださったるろおさん……貴方と組めて、機巧少女は本当に幸せなシリーズです！

なお、本書より数日早く、高城計さんのコミック版「機巧少女は傷つかない」が発売されています。そちらもぜひチェックしてみてくださいね。そして本編より女の子らしい夜々や、小動物全開のシグムントに癒やされちゃえばいいじゃない！

また、本編ではまだ姿が描かれていないマグナスや（戦隊）も登場しています。もちろんデザインはるろおさん。原作オンリーの方も要注目です。

現在、海冬レイジは機巧少女を鋭意製作中です。少しでもいいものになるよう、頭が痛くなるほど悩んでいます。激しい現実逃避をしながらね……っ。物語はまだまだこれからですので、次もぜひぜひ、よろしくお願いします！

ではまた次回、機巧少女らでお会いできますように！

こんにちは、絵の人です。
機巧少女も四巻になりました。

今回は男キャラを楽しく描けましたよ？
内容的にも、ロキのちょっとしたロマンスとか
もう素敵すぎてピンク色のガスとかでちゃいそうです。
(注・脳内ではロマンス扱いです)

さて。三姉妹のお姉さん、いろりが登場しましたね。
最後の妹さんは、次回以降に活躍予定です。
はてさて、どう修羅場っていくのか凄く楽しみですな？



あま

レーベル



マシンドール
機巧少女は傷つかない4
Facing "Rosen Kavalier"

発行	2010年11月30日 初版第一刷発行
著者	海冬レイジ
発行人	三殿崇二
発行者	株式会社メディアファクトリー 〒104-0061 東京都中央区銀座8-4-17
印刷・製本	株式会社廣済堂

©2010 Ryo Kato
Printed in Japan ISBN 978-4-8401-3579-5 C0010

※本書の内容を無断で複製・転写・放送・データ配信などすることは、固くお断りいたします。
※定価はカバーに表示しております。
※見下本・落丁本はお断りいたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。
※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。
メディアファクトリー カスタマーサポートセンター
電話 0570-002-001
受付時間 10:00～18:00(土日、祝日除く)

【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】

あて先 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 MBF渋谷イースト 株式会社メディアファクトリー
MF文庫J編集部宛付 「海冬レイジ先生」様 「るろお先生」様



左記より本書に
関するアンケートに
ご協力ください。

★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料
許可を受けプレゼント! ★サイトにアクセスする際や、登録・メール送
信時にかかる通信費はご負担ください。 ★中学生以下の方は、保
護者の方の了承を得てから回答してください。

